

大阪大学 GLOCOL 海外体験型教育企画オフィス (FIELD O)

2013 年度
海外フィールドスタディプログラム
モンゴル「開発と保護：環境保護遊牧民組合を作る」
報告書

大阪大学グローバルコラボレーションセンター
OSAKA UNIVERSITY
GLOBAL COLLABORATION CENTER

開発か伝統か、それとも…
—技術者のための「エスノグラフィー」—

(大阪大学 GLOCOL 海外フィールドスタディプログラム モンゴル)

目次

謝辞	2
序	4
技術者のためのエスノグラフィーとは	5
第1章 モンゴル概要—調査地概要—	7
第2章 開発か伝統か - 文化の視点から - コラム ささやきをきく	11 29
第3章 開発か保護か - 技術の視点から - コラム 調査を通じて感じたモンゴル	31 44
第4章 新しい生活空間の創造 都市と草原のあいだ - デザインの視点 - コラム 海外調査の第一条件はタフであること	45 62
第5章 学生たちは何を学んだのか—フィールドスタディの方法論—	63
第6章 モンゴル側からみたフィールドスタディ	69
資料 1 プログラム概要(2012年と2013年)	82
資料 2 ネルグイ氏の紹介	83
資料 3 調査に対する地域の評価(書)	87
資料 4 アンケート調査質問票	89

謝辞

すべてのきっかけはツェレンダグワ・ムンフバヤスガラン(バヤサ)さんご夫妻との出会いであった。また、モンゴルでは彼らのご両親、バヤサさんの祖父、シヨンホル・ネルグイさん、モンゴル国立大学のドラム・ブムオチル先生、シュライ・メンデーバヤルさん、バトゾリグ・ガンバトさんに大変お世話になった。ここでは皆様の名前を述べることはできないが、調査地域の方々やモンゴル国立大学及び科学技術大学の関係者の皆様をはじめ、大阪大学 GLOCOL の先生方や事務の皆様（特に片山歩さん）から頂いたご支援とご協力に心より感謝申し上げます。



序

地域研究は人々との出会いである。地域の人々から地域の状況、問題、文化、自然を知る。また、彼らと共に考え、地域間の比較を通じ、共通的なものから、地域的要素も重なる複雑かつ深刻化の一途を辿る問題を理解する。私たちは地域の調査を地域での出会いに始まり、地域の人々との研究と意見の共有だと理解している。

オングィ川流域の環境保護及び遊牧民との交流は 7 年以上続いており、これまでに教育プログラムが 3 度実施された。だが、地域の人々との交流の様子や調査結果、学生たちの意見をまとめ、こうしてモンゴル語版の報告書が出版されたのは今回が初めてである。本書は各章の構成をはじめ、モンゴルでは 2 人の学生、岸本紗也加さん及びソソルボラム・アマルバトさんが中心となり、編集を担当した。モンゴルにおける教育プログラムを企画、実施した者にとっては、本書の出版を非常に嬉しく思う。研究成果の報告という意味もあるが、むしろより多くのモンゴル人読者の皆様に対して、オングィ川の問題を考えて頂き、新たな解決への道を共に模索する一助となれば幸いである。

大阪大学 GLOCOL

思沁夫

技術者のための「エスノグラフィー(ethnography)」とは

2010年より、GLOCOLは、海外体験型教育企画オフィス(FIELDO)を設置し、大阪大学の学生に対し「海外フィールドスタディ」プログラムを提供している。海外フィールドスタディをはじめとする海外体験型教育プログラムを通じて育みたい人間像は、下図のように記されている⁽¹⁾。



しかし、ここで育みそして伸ばすことを目指している専門性、コミュニケーション力、調整力、柔軟性、実践力、批判力(すなわち、複眼的思考力)の具現化は容易ではなく、これまでの実施プログラムに対する検証及び方法論の抽出作業も行なわれていないと考えられる。このような状況下において、海外フィールドスタディ・モンゴル班では、参加者全員で1つの「エスノグラフィー」を記述する(完成させる)ことを通じ、実践性、自習性、学際性の理解を試みた。

「エスノグラフィー」とは、文化人類学という学問分野における基礎的調査手法であり、調査地域に対する「質」的な理解を重視したアプローチである。しかし近年、エスノグラ

フィーは社会学、心理学、教育学や経営学など様々な分野で応用されるようになっている。その背景には、グローバル化の浸透に伴う文化、生活環境の異文化化-ハイブリッド化や「情報氾濫」などにより、物事の本質が捉えにくくなったことが一つ挙げられる。また、共同作業としてエスノグラフィーを書く方法を考えるに至った過程として、①今回のプログラム参加者は理工系の学生が多い②モンゴルにおける環境問題が深刻化している③またモンゴル側は日本との交流、協力を通じた環境問題の改善・解決を望む意思が強いことなどが挙げられる。エスノグラフィーの記述には、注意すべきことがある。綿密かつ周到な調査が必要とされるだけでなく、現地調査での収集資料を分析、最終的には地域の人々に少なからず還元できるように、まとめなければならない。

ここでいうエスノグラフィーとは、一般的に理解されているような〈民族誌〉とはいくつかの点で異なる。本エスノグラフィーでは、モンゴルの抱える問題の記述及び分析を通じ、出来る限り解決へとつながる意見や、アイデアの共有に重点が置かれているほか(本文の第2章、3章と4章)、教員が学生たちの調査、研究の様子を観察したノート(第5章)も含むからである。

エスノグラフィーは、解釈分析を中心に調査研究の成果をまとめるのが一般的だが、われわれは調査研究を現地へ還元する目的で提案と問題解決に重点が置かれていることを強調しておきたい。

この技術者のためのエスノグラフィーは初の試みである。ここでいう技術者とは、狭い意味での技術者のみを意味するものではない。科学技術だけでなく、社会技術を扱う人びとをも想定した広い意味で用いている。そのため当然のことながら欠点や課題もあると思われる。だが、本エスノグラフィーをより良い海外フィールドスタディプログラムとするため、考察、検討の材料、ヒント、きっかけとたく、今回の GLOCOL オンライン・パーペー投稿を決断した所以である。

注

(1) 詳細は GLOCOL のホームページ(<http://www.glocol.osaka-u.ac.jp/>)を参照。

第1章 モンゴル概要—調査地概要—

思沁夫

1990年代初頭、モンゴル国（以下、モンゴル）は社会主義体制から民主主義制度に移行し、モンゴルの産業基盤は大転換した。社会主義時代、モンゴルの産業は牧畜を中心としていたが、民主化以降、エネルギー・鉱山開発業にシフトし、モンゴルは世界市場における競争や国家や企業による投資、誘致など、世界と密接な関係性を持つようになった。特に鉱山ブームは鉱床の多い、鉱物資源の豊かな地域に大きな変化をもたらすこととなった。まず、鉱山業の発展は社会を細分化させる。遊牧を生業とする地域の人々にとって、鉱山開発により、改変させられた環境はもはや遊牧に適さず、生活も困難となる。さらに、地域社会は流動化する。鉱山開発が要因で首都ウランバートルの人口は年々増加傾向にあり、人口集中が様々な社会問題を引き起こしている。今回のフィールド調査の交流地域は、鉱山開発、環境破壊、地域社会の細分化と流動化がまさに進行している地域である。

調査対象地域であるオブルハンガイ・アイマグ (Uburkhangai aimag) は、(aimag とは、県のことである) モンゴル国中部に位置しており、総面積は 63,500 平方キロメートルに及んでいる。地形としては、県北部はハンガイ、すなわち山地で覆われており(総面積の 23%)、中央部では草原が、(総面積の 28%)、南部ではゴビ(砂漠)と乾燥草原が混合している。ハンガイはモンゴルにおける数多くの河川の水源地でありそのほとんどは北部、東北部へと流れている。オンギ川は南部へ流れ、ゴビ砂漠(行政的には南ゴビ県)に到達した数少ない川の 1 つである。オブルハンガイ県は生態的環境の多様性から、家畜頭数及び種類が多く、モンゴルを代表する遊牧地域でもある。

オブルハンガイ・アイマグの総人口は 11 万人であり、うち 7 割は遊牧民である。オブルハンガイ・アイマグは 19 のソム、108 バグに分かれている。県庁所在地はアルバイヘルであり、ウランバートルから 430 キロメートル離れた地点にある。

モンゴル帝国の首都はかつてこのオブルハンガイ・アイマグにあった。さらに、清朝時代のオブルハンガイ・アイマグ(当時は「サインノヨン・ハンの藩領」と呼ばれていた)はモンゴルにおける宗教文化の中心地の 1 つでもあった。スターリン政策により、多くの文化遺産は破壊されたが、モンゴル唯一の「世界文化遺産」はオブルハンガイ・アイマグにある。

1991 年、モンゴル国の民主化に伴い、オブルハンガイ・アイマグも市場化と資源開発により急速に変化し、あらゆる分野に変化は波及している。しかしここで特に注目したいのは、人々の移動と環境問題である。

地図1 モンゴル国オブルハンガイ県



地図2 オブルハンガイ県概要



地図3 オンギ川



写真 枯渇したウランノール (湖)



オンギ川は南ゴビに注ぐ非常に貴重な水源である。だが、1990年代末にオンギ川は断流し、河水で成り立つウランノール (湖) が枯渇した(上の写真を参照)。オンギ川の断流は様々な原因であるが、中でも1993年以降に開始されたオンギ川上流域でのエレル社による砂金発掘が大きな原因の1つと考えられる。エレル社が鉱山開発を開始し、ニンジャが続出、地元企業の参入も目立ち始め、遊牧民の間でも分裂が起こり始めた。

地域の抱える環境問題、例えば地表水減少、砂漠化や飲用水汚染などは、地域の持続性に直接的に影響を与えるため、真剣に取り組まなければならない課題である。さらに、市

場化や拝金主義の流行により、人々は細分化、分断され、地域社会は流動化し、不安定な状況に置かれるまでになった。以下の表が占めるのは移住者のみであり、その家族は含まない。実際は、さらに多くの人々がウランバートルへ仕事や進学などの目的で移住している。また、自動車やバイクなどの普及により移動は日常化している。

オブルハンガイ県における 18～50 歳までの男性の県外移住者数

	2008	2009	2010	2011
ウランバートル市	304	300	379	183
セレング県	5	8	2	1
ダルハン市	4	6	11	6
エルデント市	8	6	4	3
ドルノゴビ県	11	6	4	0
ブルガン県	4	13	11	6
オムンゴビ県	3	17	10	6
トゥブ県	3	5	9	7
ヘンティ県	2	0	3	0
ゴビアルタイ県	1	1	0	0
スフバートル市	1	0	0	0
バヤンホンゴル県	3	1	1	1
ザブハン県	1	1	0	0
ゴビスムベル県	1	0	1	0
アルハンガイ県	3	2	4	1
ドルノド県	0	0	1	6
フツブスゲル県	0	0	0	1
合計	355	365	440	230

注:

この表が示す数字はオブルハンガイ県全体のものである。

2011 年の数字は 7 月 31 日までである。

ここでいう移住とは移籍を伴う移住を意味する。

モンゴル産業の鉱山開発業へのシフトは地域社会に様々な変化をもたらしたほか、同時に環境破壊に危機感を抱き、環境を保護し、守るための教育が施されてきている。そこで、本モンゴルフィールドスタディプログラムでは「開発と保護」というテーマで、オブルハンガイ・アイマグにおける鉱山開発の現状と環境保護に取り組む遊牧民組合の活動を中心に調査、研究を進めることとなった。

第2章 モンゴルの文化・伝統の観察

牧 美喜男

私は『世界を作った男 チンギス・ハーン』（堺屋太一、著作）を読み、モンゴルに関心を抱き始めた。大阪大学で知り合ったモンゴル人留学生の友人ら（内モンゴル自治区出身）は、いずれも控えめかつ誠実な、礼儀正しい人柄が印象的であった。彼らとの交流により、モンゴル人は日本人と多くの共通性があり、また、自国の歴史や伝統に対する誇りの高さも感じた。ちなみに、遺伝子的に日本人と最も近い民族は、ブリヤートモンゴル族であると言われている（NHK スペシャル『日本人はるかな旅』:2001年DNAの鑑定の結果）。

モンゴルは民主主義体制へ以降後、経済発展を遂げていると言われる。しかし同時に、モンゴル社会において様々な矛盾が生じていることは想像に難くないところである。ウランバートルでは高級高層住宅に暮らす裕福な人々もいれば、地下のマンホールに暮らす孤児たちがいる。私はマスメディアでこのマンホールチルドレンについて知り、衝撃を受けたことを今でも覚えている。モンゴルは矛盾と混乱をいかに克服し、そこで伝統や文化がどのように関わるのかを観察したい。これは私のフィールド・スタディ参加動機となった。また、私は文化・伝統の保持が若者育成に必要なとの動機をもとに、「倫理的品性開発を中心としたリーダーシップ育成モデルの構築」という題目で論文を執筆したことがある。上記の論文の目的は、文化や伝統の保持状況やその作用を知ることであった。この研究目的は今回のフィールド調査の参加動機や目的と密接に関連している。本フィールド調査においては、モンゴルの事例を通じ、モンゴル人がどのように伝統及び文化の生成、また変容に対応しているのか、一般論にとどめるのではなく、「個」から深く考察したいと考えた。

面積と人口

モンゴルは遊牧国家である。これは世界的にみて大変稀である。日本の約4倍もの面積を誇るが、人口は大阪市よりやや多い程度である。現在のモンゴル族は、今日、3カ国に分かれて居住している。モンゴル（人口290万）、ロシア・シベリアにあるブリヤート共和国（人口40万人）、中華人民共和国の内モンゴル自治区（人口2千万人、うちモンゴル族2割）である。モンゴルの人口の半数近くがウランバートルに集中しており、海外居住者が10%ほどだと言われている。

モンゴルの歴史

清朝崩壊後、モンゴルはソ連の衛星国となった。1924年、「モンゴル人民共和国」が成立し、その後共産党の支配が続いた。近代以降の過酷な経験として、1930年代のスターリン時代、当時の人口120万人中、のべ10万人が殺害された。今回のフィール

ド調査に同行した運転手の話によると、1921年に信仰が罪になり、多くの僧侶が殺害されたという。チンギス・ハーンや伝統継承も禁じられた。反革命分子と言うことで5人差し出すのがノルマになり、僧侶代わりに牧民を差し出し、殺されたこともあると聞いたことがある。

1991年、人民革命党は一党独裁を放棄し、モンゴルは複数政党制による民主政治・自由化へと移行した。家畜の所有権は遊牧民に、そして公有財は売却され、個人の所有となった。スターリン時代以降、チンギス・ハーンやチベット仏教は否定されていたが、モンゴルの民主化以降、伝統や信仰が復活し、同時に世界への関心が開かれ、世界の情報が流入しているのが今のモンゴルの状態である。

モンゴルの直面する課題

鉱山開発への傾斜

モンゴルでは民主化以降、アジアの4つ龍、すなわち香港、シンガポール、韓国、台湾に続く5番目の龍になることを目標に掲げ、鉱山の開発が進められた。1990年代は土地利用に関する法律、91年から94年までは資源利用に関する法律、外国資本に関する法律が進められた。94年頃からは、環境基準や規制などの環境保護に関する法律も少しずつ増えてきた。近年、自然保護の機運が高まり、これまで開発した鉱山を再利用したり、地域の中で既存の鉱山を持続させようとする動きが強まっている。

鉱山の開発には大企業だけでなく、零細個人も砂金採りに従事している。彼らは「ニンジャ」と呼ばれる。利益の追求、あるいは困窮により、遊牧民の中に過去ニンジャになった者もいる。アンケート調査結果によれば、16名の遊牧民中2名がニンジャの経験ありと答えている。しかし、政府系企業や組合等の参入奨励により、ニンジャ数は減少傾向にある。また政府による家畜の一定価格での買い付け等、遊牧民の収入安定化政策の施行や、重労働の一方、微々たる利益に過ぎないなどの理由で遊牧民に戻る者もいる。

進む環境破壊

モンゴル側の研究者の報告によると、モンゴルにおける森林が占める割合は5、6年前は8～10%ほどであったのが、現在は5%以下に減少した。モンゴル・アカデミーの調査によると、モンゴルに生息する植物のうち、70%が絶滅及び何等かの異変の発生が確認されている。現在、モンゴル国内の研究者は政府と国民に対し法律制度の充実などを含めた政策を早急に講じ始めるよう促している。モンゴルの環境はこの70年間の間に恐ろしいほどの変化があり、今後2世代に渡りさらなる激変に見舞われると予想されている。これまで、環境に関する様々な規制が行われてきた一方、現に実行されているものは少ない。ここで、モンゴルの賄賂などの政治腐敗、汚職といった職権の濫用などの

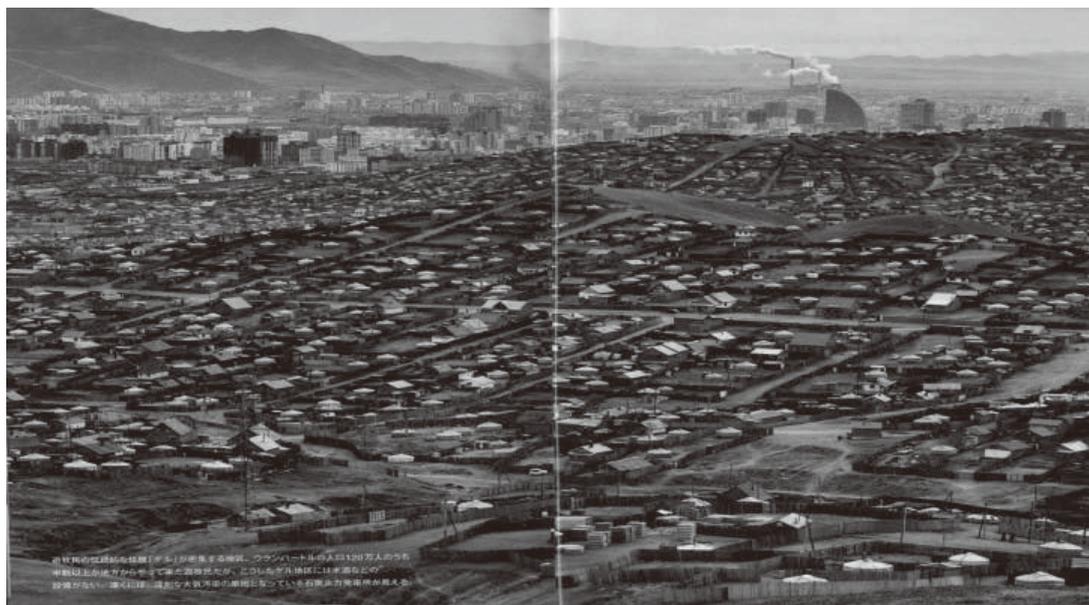
諸問題を指摘しなければならない。事実、外資系企業とモンゴル政治家の癒着、贈収賄も多発しているのである。不平等な資金配分により、一般市民の手には何も残らないであろう。

ネルグイさん（今回のフィールドスタディでは、ネルグイさんには良き指導者としても大変お世話になった）は、オユートルゴイ鉱床開発が終了したとき、地下水が枯渇するだろうと推測している。ちなみに、遊牧民 16 名に対するアンケート調査結果によると、自然が回復していると答えた者は 3 名、悪化したと答えた者は 6 名、変化していないという回答が 7 名から得られている。

また、ネルグイさんは 50 年前からハンガイに住んでいるが、50 年前は熊やヘラジカ以外の様々な動植物が観察されたそうである。今では人間以外の動物をほとんど見ることがない。温暖化はもちろんのこと、人口増加が理由の一つとして考えられている。その当時、モンゴルでは現在の人口の 4 分の 1 以下であった。その他の原因は人間の自然に対する態度の変化である。自然を霊的存在とみる態度が失われてゆき、自然は畏れるべき存在から、保護すべき対象に変わっている。チンギス・ハーンの時代には、川で洗濯や、森林伐採、火事を起こすことなどは厳禁であり、違反すれば死罪とされていた。

都市における人口集中

町は遊牧民の生活にとって欠かせない存在である。同世代の人々との交流や、生活必需品の購入、寺院訪問、シャワーを浴びる等の理由で、遊牧民は都市部付近で遊牧する傾向にある。また、今回の調査で明らかになったことだが、遊牧民の子どもたちは祖父



母や親戚の世話を受けつつ、町に暮らし、学校に通う場合が多い。ウランバートルだけでなく、アルバヘルにおいても、モンゴルの民主化後に割り当てられた土地区画には住民が木の塀をめぐらし、家屋あるいはゲルを建てて暮らしている。もちろんここには

下水道はない。田舎には放牧に行かないため、都市周辺が過密になるのである（上記のウランバートルの写真を参照：ナショナルジオグラフィック 2011年10月号）。遊牧民の定住意識と農耕民の定住意識は根本的に異なっており、計画的都市づくりはなされていない模様であった。

モンゴル国立大学での講義では都市部への人口移動に関して以下の説明がなされた。

モンゴルを5つの地域に分類し、人々の移動について説明すれば、ウランバートルのみが40万人増加している。一方、他地域では減少している。40万人という人口はモンゴルにとって非常に大きな数字である。これは毎日10～11人が移住していることになる。それに関し、2つの興味深い事実を紹介したい。第1は都市と地方の差である。消費の5分の4、製造の5分の3をウランバートルだけで占めてしまうのである。第2は移動の自由である。地方では製造業や商業がほとんどないがために就職口が非常に少ない。そのため、人々は就職及び夢の実現という目標を抱き、ウランバートル、つまり政治・文化・商業の集中地にやってくる。地方の人々は生きるためのチャンスが必要であり、そのチャンスがウランバートルに存在すると考えているのである。

モンゴルでは、2000年より大規模な人口移動に関する研究がスタートした。地方の人々は生活維持だけでなく、生活向上という欲望から移動を決意していることが判明した。元々の住民と新規流入者の間には様々な格差がある。特に移住者に不利な格差がデータで読み取れ、居住環境、居住面積、職業や食事内容に差が現れている。また、地方出身者の中においても格差が見受けられる。地方の行政中心地出身者はある程度収入が良い。一方、遊牧民あるいはソム以下の地域出身者の収入は、低いとされている。収入の35.7%は食糧購入に費やされる。食糧でも生命維持の最低限のレベルに費やす。野菜・果物などは購入出来ない。これは貧困レベルであり、教育に当てる費用はない。人間関係も構築出来ていない。首都移住の理想と現実の差は大きく、夢を実現した者は極わずかであり、ほとんどは理想と現実の乖離した生活を強いられているのが現状である。移住者5人のうち、ある程度理想を実現した者は1人だけという計算になり、ウランバートル移住後、生活状況が悪化した者は多いと考えられる。

遊牧民の生活

遊牧民の観察及びインタビュー

本フィールド・スタディの目的の一つ、それはモンゴルの遊牧民の生活に関する実態調査である。ここでは遊牧民のゲル、2件を訪問したときの状況を報告したい。

遊牧民1

ゲルに入ると、チーズと馬乳酒をふるまわれた。チーズは固く、酸味のあるものであった。モンゴルの作法に従い、年長者から馬乳酒を回し飲むが、何度も注がれた。年長

者が箸をつけるまでは他の人は手を出さないなど、年長者を敬う気風が観察された。最初、主人と奥さんは町に出かけており、不在だったが約 30 分後に帰宅した。この家庭の家族構成は、主人(42 歳)、奥さんと兄と母、そしてその子供 3 人である。その他にも親戚が 2~3 名と主人の姉の娘が来ていた。子供はそれぞれ 17 歳、10 歳、4 歳であった。17 歳の子供はアルバヘールの専門学校で建築を学んでいる。10 歳の女の子はアルバヘールの小学校に通っており、夏季休暇期間中に家族を手伝いに来たとのことであった。夏休み、遊牧民の両親は子供に仕事を任せ、母(祖母)に料理を任せることで町に出かけるそうである。

途中、主人の兄がゲルを出た。羊の群れが他の群れと混ざりそうになっているようだ。どうやら羊同士が一旦混ざれば、再び分けるのは難しいらしい。常に家畜を見張る必要性がある。わずか 4 歳の小さな子供は日常的に両親の仕事を手伝う。この子供は火を熾したり、子守を担当していた。

17 歳の青年 A へのインタビュー

青年 A(17 歳)は専門学校生である。アルバヘールで父の家に一人暮らしをしながら、学校では建築を学んでいる。筆者のインタビューの中で、青年 A は次のように話した。

将来、遊牧民にはなりたくない。むしろ技術を身につけたい。本当は電気を学びたかったが、成績不足のため実現しなかった。今の専攻は建築だが、自分には合っていないと思うので、ウランバートルでスポーツを学びたい。クラスメートは 32 人いるが、全員遊牧民になろうとは考えていない。皆技術を身につけたいと考えている。

また青年 A に対し、進路や教育内容を質問したところ、以下のような回答を得た。

モンゴルは現在、建築ラッシュである。家屋の内装等の技術習得すれば、就職先は見つかると思う。草原も町も両方とも好きだ。所有物は少ないが、大切にしているものは、教科書だ。欲しいものは、あえて言うならバイクである(もちろん馬も好き)。英語は少し勉強しているが、好きではない。ロシア語は学校でもう教えられていない。料理も出来るが、10 歳の妹の方が上手である。屠殺はまだ出来ない。

遊牧民 2

別の遊牧民宅では、最初に馬乳酒、チーズ、ビスケットをご馳走になった。2009 年 11 月~3 月のゾド(大災害)により、家畜は決定的な被害を被った。災害前は 580 頭の山羊、羊、そして 60 頭いた馬が、合わせて 61 頭までに減少してしまった。政府から干し草の支給が行われたが、それは微々たるものであった。干し草支援には、途中で横流しする者があり、十分に信頼できないそうである。ゾドが発生すれば、馬は賢いためにどこかへ逃げてしまう。ある馬は 500 km 以上離れたゴビで発見された。ヒツジはその場で群で固まり、死んでしまう。現在はようやく 230 頭まで盛り返した。

現在の放牧地域だが、バグ(村)は登録が 75 件あるにも関わらず、実際に放牧を行

っているのは 20 件のみである。筆者は現地調査の中で、遊牧民が減少していると聞いた。

遊牧民の二人の子供、18 歳の姉と高校 2 年の弟にインタビューを行った。姉はモンゴル科学技術大学に入学予定である。彼女は私に以下のように話した。

遊牧の手伝いや勉強で忙しく、あまり遊ぶ暇はない。今まで旅行した中で最も遠いのはウランバートルである。町は魅力的だ。

筆者が、大学の授業料を尋ねたところ、わからないとの事であった。彼女は、バイオテクノロジーから、経営学に専攻を変え、銀行に勤めたいと考えている。耳にはピアス、スラックスを着ており、スニーカーを履いていた。また、姉とは対照的に、弟は騎乗し、人々を訪問するのが好きと答えている。遊牧生活に興味があるとのことであり、伝統的な民族衣装を身にまとっていた。

ゾド

大雪や旱魃などの自然災害をモンゴル語ではゾドという。モンゴルでは一切、牧草を備蓄する習慣はなく、家畜は自然放牧されている。冬に雪が降ると、家畜は蹄で雪を掘り起し、草を食べるが、大雪が降ると不可能になる。特に家畜の体力消耗が激しい 3 月頃に大雪に襲われると家畜の大量死が発生する。アンケート調査の回答によると、ゾド発生時、遊牧民 16 名のうち、親戚に助力を期待できる者、地域社会の協力を期待できる者がそれぞれ 12 名であった。

ゲル観察

ゲル中央には、柱が 2 本あり、天窗によって効率よく採光できる仕組みになっている。ゲルの柱には、これまでに売った馬の毛がかけられていた。ゲルは円形であり、柱が少ないため移動しやすい。屋根や壁は、羊毛のフェルトで覆われており、断熱性が良いと考えられる。昔は駱駝で移動したが、今は大きいのでトラックで移動すると知った。ゲルを実際に訪れて、テントというよりもまさに家のだとの感想を覚えた。箆箭の上には家族の写真が飾っており、テレビや、馬頭琴もあった。



遊牧の状況

遊牧地と町の間を遊牧民は一日に何度も往復するようになった。テレビは天気予報に不可欠であり、放牧にオートバイ、移動にトラックを使用するため、各家庭に車、オートバイが常備されている。携帯電話も必需品である。

しかし、遊牧民の労働の厳しさも同時に学んだ。遊牧民の仕事は辛く、決して恵まれたものではない。仕事が山ほどある。子供が水汲みに行く、4歳の子供は子守をするなど、家族全員が働いていた。遊牧民の厳しい労働を嫌い、若い世代は遊牧を目指すものが少ない。例えば、ある家族は羊と山羊 400 頭、馬 60 頭、ヤク 50 頭を飼っている。夏の労働力として帰省した子供たちに期待できるが、それ以外の季節は夫婦 2 人ですべての家畜の世話をしなければならない。馬だけでも 1 日 5 回、搾乳する。

思先生は以下のように述べていた。

「一番大事なことをしている人が一番貧乏なのは日本も同じだ。ウランバートルでは、『お前地方出身か』と言う少々差別的な言い回しがある。文化が低レベルといったようなニュアンスである。それがまた大きい町に広がりつつある。言葉ではなく豊かになれないのが馬鹿にされている。自殺者もいる。日本は豊かなため補助金があるが、モンゴルにはない。モンゴルはさらに厳しい。セーフティネットがないし、家畜が雪で全滅したらニンジャになるしかない。こんなきつい仕事で、豊かになれないのであれば誰がするのか。遊牧の仕事はしんどい。」

遊牧は、夏は川付近に、冬は防風のため山麓へキャンプ地を移動させる。だが、90歳になるラマ高僧によれば、昔は頻繁に移動していた。日中に移動すれば家畜が汗をかき、疲れてしまうため、夜間に移動する。夕食後に 1 時間ほど仮眠を取れば、子供も起き上がり、移動を始める。4、5 世帯が共に移動していた。基本的にゲルはらくだで運搬可能なよう、1 家族当たり 1 つであった。家畜は昔の方が良かった。良い草を食べるので丸丸と肥えていた。ゾドにも耐えられるほどであった。子供は 2 歳児から馬と遊び、3、4 歳にもなれば乗馬する。羊の見張りをするのである。高僧からすると今の遊牧民は昔に比べ、労働不足とのことである。

屠畜

どのように屠畜をするのか。ここではモンゴルでの屠畜の方法を紹介する。

モンゴルでは、11 月頃にイデシュ（モンゴル語で屠畜）する。小規模な家庭は、羊、山羊などの小型の家畜を 2、3 頭、牛は 1 頭であり、大家族は、羊、山羊合わせて 10 頭以上、大型家畜は 2、3 頭を屠畜する。

動脈を切断、腹に穴を空け、腋の裾から心臓の中に手を入れ…というように屠殺の作業は進む。血は腹腔ののなかに蓄える。作業はすべて、剥いだ皮の上で行われる。名人

であれば15分ですべてを解体してしまう。

女性は内臓を取り出し、盆に入れ、きれいにする。男性は心臓の中に残る血を絞り出す。モンゴル人は骨を折らないため、接続部から骨を切り取る。このような作業が出来なければ、男性としては1人前でないそうだが、現在は出来ないという人が増加傾向にある。私はまさに、屠畜は男の仕事であるとの印象を持った。ちなみにアンケート調査結果によると、遊牧民壮年男性8名中、5名が屠畜出来る、1名が出来るがやりたくない、1名が出来ない、1名が未回答であった。

イデシュは何日間も続き、親戚が訪問し、にぎやかに行われる。夜間は酒も飲む。モンゴル人は家畜を屠畜するとき、すべてを利用する。骨の髄も食す。肺はあまり食べないが、スポンジ状になっており、腸詰めを作る際に利用する。肺の後方に水を2度注ぎ、きれいになれば、血、小麦粉、野生のニラやネギを入れ、ゆでる。大腸を使うときは、肉や胃袋を入れ、血は注がない。すべて動物の肉は、その胃袋と膀胱の中に納まる。膀胱は息を入れて膨らませる。

家畜の売買

家畜は町で売る。町では個人で屠畜出来ない。日本と同様、屠畜場で行うことになっている。秋になれば、家畜の値段が市場に出る。毛皮はほとんどの家庭で使用されないため販売する。毛皮の販売先は韓国や中国である。遊牧民は現金収入をもとに生活しているが、必要なとき（病気や車の修理など）に現金が準備できないといった問題を抱えている。市場では中間で取引人がマージンを多く取る。市場価格を把握するためのネットワークがないため、よい買い手を探すのは難しい。そのため、すぐに現金を得ようすると足元を見られ、安く家畜を買いたたかれる。これは社会問題として国内で議論が交わされている。家畜を高価で販売可能な時期に売ってゆき、貯金は可能である。しかし、ゾドで家畜は激減した。家畜を手元に残し、頭数を増やしたいという気持ちが遊牧民の心にはあるようである。

遊牧は持続的？

若い世代を中心に、「遊牧民にはなりたくない」と言う風潮がみられる。前述通り、遊牧民の17歳の青年が通う専門学校のクラスメート32名中、遊牧民になりたいものはいなかった。なお、都市住民21名に対するアンケート調査結果によれば、子弟を遊牧民にすると答えた者は3名、公務員は13名、海外留学は4名、子供が選択するは8名であった。なお、このアンケートは重複回答ありとしている。この結果は、モンゴル国立大学の講義でも確認されている。都市住民と遊牧民の間の分断の可能性について調査したところ、後継者の問題は重要であるとの回答がなされた。また筆者の研究者へのインタビューには次のような回答が得られた。

若者は技術を学び、将来はその専門性を活かした職に就きたいと考えており、遊牧民

になるという選択肢を選ばない傾向にある。現段階では後継者問題がさほど深刻化していないが、課題として少しずつ認識されつつある。私が調査した中部ゴビのバインジュンカでは、遊牧民登録は多いが、現実には家畜を両親や親戚に預け、自分自身は都市在住というケースが目立っている（例えば登録上は70世帯だが、実際に放牧を行なっているのは20世帯など）。

もう一人の女性講師は市場と環境リスクの問題を指摘した。肉や乳製品の市場拡大がいかにかに困難であるかということ、自然が不安定になり、急速に家畜頭数が増加すると草原へのダメージが大きくなるということなどである。冬の大量死も家畜頭数の増加に伴い発生率は高くなる。昔（社会主義時代）はリスクを人々と「共に」乗り越えたが、今は「個人で」乗り越えなければならない。また、別の講師は「結婚すると家畜を分け合い、独立するが、人口増加により希望する子供たち全員に遊牧地を与えることは困難である」と現状を指摘した。

町の生活

ショッピングセンター

ショッピングセンターでは食料品店、肉屋、チーズ屋に行った。肉屋では羊の臓物を購入した。市場で販売される肉・チーズは地元産である。野菜は地元、もしくは中国産である。他の加工食品は、中国・韓国・ヨーロッパ・ロシアなど多国籍であった。電化製品は中国製が多く、車・バイクは韓国・日本・中国製が多かった。町では瓶や缶などのリサイクルの光景も見受けられた。



都市の生活・集合住宅

大阪大学のモンゴル人留学生のご両親の家を訪ねる機会があった。父親はモンゴル陸軍の元大将で、母親は脳外科医とエリート階級である。父親は9人家族の出身であり、母親は10人家族の出身である。ここから昔は子沢山であったことが伺える。住居は2LDKであり、バスや水洗トイレは一室にあった。集合住宅の外見はあまり立派に見えないものの、室内はきれい、清潔であり、快適な生活が感じられた。集合住宅前にベンツが駐車されており、裕福な家族がこの集合住宅に暮らす模様である。

モンゴルの伝統

伝統文化の保持

全世代に渡り、伝統尊重の強い願望、仏教の力強い復活への期待が調査から観察された。アンケートの調査結果によると、遊牧民16名中10名及び都市住民21名中15名が、モンゴルにとって最も重要なものとして、地下資源などよりも伝統的文化を挙げていた。また、アンケート対象者全員が仏教信者であったが、仏教の力強い復活への期待も指摘できる。宗教に関して述べると、オボー神というシャーマニズムが健在であることも、宗教的土壌が健在であることを覗かせると考える。また、都市住民も夏季は草原で暮らすなど、大自然を満喫する機会があることを観察した。なお伝統文化を重視する割合は、アンケート調査結果に基づく限り、都市住民の方が多いと考えられる。これは、遊牧民にとって伝統的文化（ゲル、馬乳酒、乗馬など）は日常生活の一部であり、これらの価値をさほど意識していないことに起因すると推測される。一方、都市住民は草原を離れ、伝統文化の重要性を再認識していると考えられる。

相互性・おもてなし・年長者に対する敬意・働き者の子供たち

相互性

モンゴルの都市住民は夏になると、草原に出かけ、キャンプ地で時を過ごす。都会の子供たちも、夏は親戚のゲルを訪れ、馬に乗り、自然を満喫する。日本の子供達とは自然との密着度に相違があることが分かる。

調査地に別れを告げる際、馬乳酒をお土産として常に車に積み込んでくれた。私が遊牧民の一方的好意にすぎると質問したところ、これは相互性であるとの答えが返ってきた。つまり、これらの行為には相互性があり、家族へのプレゼントが相応かなど常に気を配るとのことである。例えば、衣服、酒類など相手が喜ぶものを持って行くなどで

ある。一方、災害に遭遇した際に支援するのかと質問したところ、するとの回答であったが、ただしあまり多くないとも答えた。

おもてなし

遊牧民のゲルでは、真っ先に馬乳酒やチーズがふるまわれる。お酒（ウォッカやモンゴル酒）までご馳走になることもあった。訪問者は高価なものでなくとも、何か持参する必要がある。私たちも日本の焼酎、お菓子、筆記用具、石鹸などを手渡した。

最終日、キャンプ地での食事のときのことである。日本からの訪問者5名に対し、ネルグイさんからプレゼントが渡された。馬庭、桑原両氏には結婚相手が見つかるようにと言うことで、モンゴルの美人人形、牧には年を取っているが頑張っているということで、60歳になると生まれ変わるという意味を持つ（私はここで還暦の習慣があると想像した）子供の人形を頂いた。スー先生及び福田先生には、皮に描かれたチンギス・ハーンの絵が贈られた。

年長者に対する尊敬

家庭に招待され、食事を共にする際には、気配りを要する。日本でお見合いの席での気配りを想像すればよいだろう。食事や飲み物とも年長者に進め、箸をつくの待たねばならない。モンゴルでは一昔前の日本ではこうであったろうという情景があった。

働き者の子供たち

遊牧民の子供及び寄宿先の子どもたちを観察した。遊牧民の子供は4歳から馬に乗り、家畜を監視するとのことである。ゲルを訪問すると、小学生ぐらいの子供達が赤子の世話をしていた。寄宿先の子供達も、自分より幼いものがいれば必ず手を握り、世話をしている。遊牧民にとり最も忙しい時期は、子ども達の夏季休暇に当たる。子ども達は町から草原に帰り、家畜の世話をする。確かに労働は厳しい。しかし、日本の子供たちのようにテレビゲームやスマート・フォンなどの遊びに夢中になるよりも、幸せなのではないかと感じた。遊牧民家庭の女子高校生（モンゴル科学技術大学に進学予定）に対し、暇なときには何をするのかと尋ねたところ、勉強と家の手伝いのため、あまり暇がないと答えた。

天葬

遊牧地に行く途中、天葬が行われる山を眺めた。車窓の右に山を見た。その山を指さし、思先生は次のように語った。

この周辺は天葬がよく行われる場所だ。運転手のおばあさんはここで埋葬されている。天葬は減少傾向にあるが、今でも行われている。白い布で遺体を包み、置く。子供は母親で死後3年、父親で5年間、この地を訪れてはならない。遺体の状況が見苦しくない

ようにとの配慮である。死者は頂きでなく、太陽の当たる斜面に置く。そこからは、広い草原地域が見え、子孫を見守るには最も相応しい場所だ（なお、ウランバートルでは火葬が一般的である）。

自然の中で完全に消滅する。これが遊牧民の理想である。大阪大学のモンゴル人留学生の祖父は天葬を望み、山に葬られたという。享年76歳だった。



モンゴル相撲

アンケート調査結果によると、都市住民の男性8名中、モンゴル相撲を得意とする者が4名、あまり得意でないと答えた者は4名であり、出来ないと答えた者はいなかった。この結果から、日本と異なり、モンゴルにおいては大人になっても相撲を取り楽しむ習慣のある様子が感じられる。

伝統食

モンゴルでは、飲食ともにモンゴル伝統の料理や飲み物が好まれるようである。アンケートによれば、都市住民21名中、モンゴル料理が好きな者は18名、外国料理が好きな者は6名（重複回答あり）である。さらにアンケート調査結果を分析すれば、飲み物ではミルクティー40%、馬乳酒33%となっており、伝統的飲料がコココーラの17%等を抜いて嗜好されていることが指摘できる。

ボルチ

ボルチは駱駝、牛、ヤギ、羊の干し肉のことである。ボルチは、何年間も保存でき、冬は凍らず、夏は腐らないという優れたものである。特に3年以上保存した牛は、薬にな

るほど、栄養価が高くなる。出来上がった干し肉は布製の袋に入れる。干し肉はどこでも保存可能である。

学校の寄宿舎に行く子供たちには、必ず母がボルチを持たせる。日本に留学する者も干し肉を持参する。

ここで作り方を説明しよう。11月頃、肉を細く切り、日蔭で6ヶ月間干す。この地域では、冬季はマイナス35度から50度になることもあって、風にさらされて完成する。柔らかみ、堅味の両方を備えた良い肉になる。料理にはナイフではなく叩いて潰す。新鮮な肉は7kgで1kgのボルチが出来る。ボルチ作りには大変手間がかかるため、生産しない傾向にあると聞いた。若者は場合によって、ボルチを好まないという。ハンバーガーの方が好きだと言う若者もいる。運転手は昔の騎馬軍団の食糧であったボルチについて、誇らしげに語っていた。チンギス・ハーンは相手に準備する暇を与えない。移動の際にも4、5匹の替え馬を連れて移動する。地面に降り、料理することはない。馬乳酒の中にボルチを入れ、それを馬の上で飲みながら移動したそうである。

夕食

ネルグイさんから夕食にご馳走を頂いた。羊の頭部、脚が鍋で出された。頭は皮を剥ぎ、焼くが、脚は毛をつけたまま焼くと味が良いため、焼き上げてから毛を削ぎ取るなど、手間のかかる料理と思われた。食事は十分に満腹感が得られるほどの分量であった。

黒い石を温め、その熱で肉を焼くのが調理方法である。なお、私は油にまみれた石を持つように言われた。だが非常に熱く、じっと持てないのである。手で転がすことで、健康に良くなるとのことである。骨付き肉の塊をナイフ等で削ぎ取り、頂いた。



仏教復活
<高僧訪問>

アルバヘルで最も尊敬されている高僧がいるという夏キャンプ地を訪れた。木造式の簡易な建物には2部屋あった。建物を訪れるとすぐに馬乳酒、クリーム付きのクッキーが振舞われた。馬乳酒は何度も注がれ、回し飲みした。高僧は9人の息子と娘がいるが、普段は三女と同居している。今週は末子のゲルに居住しているとのことであった。仏僧を志したが、宗教弾圧に遭い、18歳のときから6年間兵役に服した。ノモンハンにも従軍し、日本軍とも対戦したことがある。その後、ヨーロッパ戦線に送られるところであったが、終戦になったと僧侶は話した。

私たちはツェブルリンチグドチドルジ（1836年～1895年）高僧の寺院跡に案内された。その転生の5代目と共に修行したが、1938年、その人は連れ去られ、二度と戻らなかったそうである。今回の訪問では、キルギス（モンゴル時代の前）の遺跡も案内して下さった。



仏教復活

高僧は55年間、共産黨員であったが、どのように信仰を維持してきたのだろうか。筆者の問いに対し、次のように話していた。

「習慣を変えることは不可能である。祖父母は宗教的なしぐさをし、よく叱られていた。仏教経典を隠したり、穴を掘って埋めたこともある。宗教行事は出来なかったが、それとなく相手の信仰が理解でき、勇気づけられた。」

1990年頃より、宗教弾圧の緩和があり、1990年春にオブルハンガイ県事務所で政府に申請した。4月3日、最初の会議では39名のラマが集まった。しかし、39は縁起が悪いということで孫2人を加え、合計41名にした。寄付金20000tgを集め、そのうち10000tgで施設を確保した。1991年、ダサン（修行場）、アブルリンケン（占いをする

場所)を加えた。弟子入りしたいと言う者が急増し、現在 60 名を超える者が僧侶となり、インドに 10 名、ウランバートルに 10 名を派遣している。2006 年、高僧の生誕 170 年を記念し、ある建物が建設された。高僧は動物学、医学、宗教学、心理学に精通していた。とりわけ遊牧民に寄り添い、愛された人であった。苦しむ人をどのように助けられるのか、常に考えていた。彼の著作はチベットやインドにも存在する。

思先生が占いに関する質問に対し、次のように答えた。

「チベット仏教には占いがあり、人々はよく寺院を訪れる。結婚、トラブル解決、家屋の建築時期、子供をつくるか否か、旅の出発はいつが良いのかなど、日常的なものから重大事までテーマは多岐に渡る。また土を掘ることは、365 日中 360 日間禁止されている。

仏教の隆盛

以下では、筆者の問いに対する高僧の回答を紹介する。

筆者：この地域の信者はどのような人たちか。

高僧：町全員がチベット仏教の信者である。韓国のキリスト教団体が布教に来たが、住民の反対で追い返したことがある。敬虔さは信者により異なるが、信者は着実に増加している。しかし、1960 年代生まれの（社会主義教育を受けた）人々は信仰心が篤い一方、若者の信仰心は薄い傾向にある。

筆者の観察によると、オボー神（シャーマン神であるが、ラマ教とも関連する）も至る所で見かけられた。



また、「都会化、自由化は信仰の薄れにつながるのではないか」という質問に対し、以下のような回答が得られた。

「宗教に職業の優劣はない。私は遊牧地域が神を祀ることが多いと思う。遊牧地域にとっては、自然は平等なリスク要因である。都会では職業によってリスクの差が大きい。」

最後に「宗教が環境破壊の歯止めになるか」という質問に対し、高僧は次のように答えた。

「これは利益的な質問である。宗教は本能的行為であり、利益の増加が信仰の減少とは考えられない。根本的な生き方に対する問いであるため、環境保護には結びつかない。具体的な事象にはつながらない。ただ宗教は子供を考える。『あなたは破壊された環境を子供たちに引き継ぎたいか』と問うことはできるだろう。」

何を学んだか

今回のフィールド・スタディでは、遊牧文化を十二分に味わうことのできる、予想通りの素晴らしい旅であつが、それ以上に多くの学びをもたらした。本章では私の学びについて述べたい。

1. モンゴル人の国際化が観察されたことから、全地球的な権益・資源獲得競争を感じた。

発展途上国は地下資源や労働力、市場など先進諸国から参入の機会を覗かれている。途上国もこのチャンスに乗り、自国の経済発展や人材育成などに先進国の力を利用している。

モンゴルの資源開発で利益を得るためだろうか。外国政府の援助もあり、外国に留学する者も多い。ネルグイさんを例に挙げると、明らかである。子供はすべてロシアの大学を卒業している。孫はほぼ全員、アメリカ、イギリスで教育を受けている。親戚の子供はアメリカ、ヨーロッパに留学し、スペイン人の彼氏を連れてきた。もう一人はイギリス、アメリカに留学し、日本人の彼女を連れてきたとのことである。モンゴルの国際化は日本以上であると感じられた。彼らは自身や子弟を留学させ、世界の先進技術や情報を入手しているのである。

2. ローカル文化が全世界の環境問題を考える上で果たす役割や可能性を把握した。

私はモンゴルで環境問題に関する新たな視点を掴むことができた。自然を愛するモンゴルの人々でさえも、ゴミを平気でポイ捨てするようである。道路の両面には隙間なくペットボトルの空瓶が廃棄されており、自然を畏れる意識が薄れていると思われた。こ

の意識変化は近代化から生じるものと推測される。しかし近代化への道を歩まず、昔の遊牧生活に戻ることはもはや不可能に近い。

思先生によれば、近代化の過程で人間は自己コントロールできないものを外部に押し付けてきた。これを外部性と名付ける。例えば、死とゴミがそうである。近代人は自らの死を想定せず生き、汚い労働やゴミなどを植民地へ押し付けることにより、貴重な環境が守られてきた。ところが発展途上国においては植民地がない。すなわち、自身で解決する他に術はない。

地域住民たち自身が環境問題を解決した事例としては、皮における砂金採掘を中止させたオング川支流保全活動を学んだ。オング川の保全活動の原動力は、17世紀に当地を訪問したダライラマや18世紀の僧侶の薬草栽培であり、人々を救済した高僧のゆかりの地であることへの人々の記憶であった。

そこで伝統や文化は保護の方向へ、また持続可能性へのムードを形成することで、最重要条件になることを学んだ。伝統や文化を育む地域においては、企業や社会の活動時に保護に向きやすい。環境や資源を子孫に残す、持続可能な発展のため、伝統や文化の尊重が基盤になりうることが観察された。

さらに世界では環境は「一体」であることが認識されつつある。地球温暖化など地球規模の環境問題を先進国においても、外部性でもって解決出来ないのは明らかである。ここで先進国は、自身で解決を図らねばならなかった発展途上国における地域文化を学ぶ必要性が出てくる。米国ではシェールガス採掘が進められているが、欧州では環境問題を考慮し、開発を進めていないという事例がある。世界の自然保護活動の学びとするため、世界の自然保護基準に照らし合わせ、各地域の伝統や文化が存続価値のあることを吟味・理論化し、地域のモデルの世界へのアピールが重要となる。

3. 人々が伝統文化の喪失に危機感を感じ、保持・存続を願う現状が感じられた。

フィールド調査の結果、全世代に渡り、伝統尊重の強い願望、仏教の力強い復活への期待が観察された。アンケート調査結果によると、遊牧民16名中10名及び都市住民21名中15名が、地下資源等よりも伝統的文化を重要なものとして回答していた。オボ一神が様々な地域や場所で祭られていることも、宗教的土壌が健在であることを覗わせる。

4. 遊牧文化に触れた。

モンゴルの伝統文化とは、深層に自然を畏敬し、ありのままの姿を保持しようとする遊牧文化を意味する。人間は死後、跡形もなく自然に戻ることを理想とする。チンギス・ハーンの墓は現在も発見されていないのがその証左である。遊牧民の死は「流れ」であ

り、死を終焉ではなく「循環」とする思想を学んだ。天葬の慣習も自然への畏敬と死をも循環の過程に置くと考えられる。老人と子供は未来を形成する。老人は最後でなく、来世につながる。善行を施し、子孫繁栄を祈るのである。私は遊牧民の死生観に触れ、自らの死生観を再考する機会を得た。

また、遊牧民の労働の厳しさも学んだ。遊牧民の仕事はつらく、決して恵まれたものではない。労働は山ほどある。それを家族で分担し、ときには共同で行う。遊牧民の厳しい労働を嫌い、若い世代で遊牧を目指す者は少ない。日本の農業が後継者不足問題を抱えているのと酷似している。

5. 日本との親和性に気付いた。

モンゴル人は日本人に対し、好意を抱いていると感じた。現地で度々、モンゴル人の方から、日本人とモンゴル人は起源を同じくする、お尻に蒙古斑があるだろうと握手を求められたものである。モンゴルには親日家が多い。この印象はモンゴル滞在によって深く裏付けられた。私の印象は、データにより確かに裏付けられている。2004年11月に在モンゴル日本国大使館が実施した世論調査では、モンゴル人の「日本に親しみを感じる」と答えた回答が7割を超えたほか、「最も親しくすべき国」として第1位になるなど、現在のモンゴル国は対日感情が極めて良好な国となっている。

また日本人もモンゴルに好意を持つ人が多いようである。現地ではモンゴルに惚れ込み、以後何十回もモンゴルを訪問しているという日本人に出会った。

モンゴルと日本の間には自然崇拜やシャーマニズム、仏教など日本と共通する文化がある。人々は控えめ、かつ礼儀正しく、謙虚な人々であった。私は本音で無理なく付き合い合える人たちと感じただけでなく、日本にとってモンゴルは特別な国であり、大切にすべき国であると思った。

コラム ささやきをきく

牧 美喜男

このコラムでは、私がフィールド・スタディ期間中に詠んだ歌、7句を紹介します。

頂（いただき）で オボーの神と 朝日浴び オンギの絶えぬ ささやきをきく

最初の歌はキャンプ地に到着した翌日、馬庭さん、桑原さんと早朝の日の出を拝むため、裏山に登り感動した情景を詠んだものです。オボーは、山や川の畔に立つ、棒や石を積み上げたケルンのようなものです。布などで覆われています。モンゴル人は、山や川を崇めオボーの傍らで祈りを捧げます。我々同行者3名も、手を合わせました。

稜線に 白雲たなびき その中を モンゴルの鷲 悠々と舞う

眼下には オンギの流れ 蛇行して 行きつく先は 南ゴビとか

オンギはローカルな河川であり、遙か南のゴビまで 500km以上に渡り流れて行きます。頂上からは四方を眺めることができ、草原には翌日訪問予定のゲルが遠くに見えました。



山を越え 野原を走り 水とばし ランドクルーザー 進むや頼もし

訪問地はランドクルーザーで廻りました。道なき道を駆け上がり、川は浅瀬を見つけ横断する。

モンゴルで 生まれし人が 息をのむ 自然の中に 我は居ませり

夏はモンゴル人が最も好む季節です。野生動物たちは短い夏を楽しんでいるようでした。湖には鶴の群れがいました。冬前にはるかヒマラヤを超え、遙かインドまで旅立つとのことでした。同行したモンゴル人教員までもが、思わず息をのむ素晴らしい風景を満喫しました。

ハンガいの 川辺に子ヤギ 草をはみ 牧民馬で 流れを渡る

ハンガイは山脈地帯です。高緯度のため、牛の姿はなくなり、代わりにヤクが放牧されていました。オートバイで遊牧する人々の姿も見えましたが、モンゴルの民族衣装に身を固めた牧民が浅瀬を騎乗し渡っていました。

威厳満ち 語る口調も 穏やかに 自然と人の かかわりをとく

最後の歌は、宿泊キャンプのオーナーであるネルグイさんを詠んだものです。彼は共産党員だったということもあり、威厳ありき、しかし心温かく常に遠くから私たちを見守ってくださいました。日本から来た学生に、少しでもモンゴルを伝えたいという彼の熱意が常を感じ取られました。非常に豪華なモンゴル料理を何度もご馳走になりました。大変お世話になりました。ありがとうございました。

Баярлалаа(バイラルラー).



1990年の民主化以降の20年間で、モンゴルは著しい変化を遂げた。市場主義経済への移行によって、物の統一価格が廃止され、人々の職業の選択も自由になった。特にこれまで国のものとされてきた企業や土地、家畜などが私有化されることで、人々の経済活動は自由に、つまり自分で好きなだけ稼げるようになった。それによって、人々の暮らしは劇的に向上し、その結果20年間で人口は約1.5倍に、実質GDPは約3倍になった。その一方で、自由な経済活動によって生じた家畜の過放牧、車の礫などといった問題は、草原の砂漠化という自然環境の変化を引き起こした。(森,2001)

なかでも最も深刻な問題の1つが鉱山開発による川の枯渇、および水質汚染である。民主化以降のモンゴルでは鉱山開発が盛んに行われ、特に主要な産出鉱物である砂金や銅は、採掘に大量の水が必要となるため、川の近くで採掘が進められた。その結果、モンゴル南部の重要な水源であるオランノール¹⁾(湖)は枯渇し、そこを水源としている家畜、遊牧民に大きな影響を与えた。(思,2010) コペンハーゲンで開催されたCOP15²⁾では、モンゴルは地球温暖化の影響を最も受けた国の一つとして報告されており、オランノールの枯渇は複数の事象が複雑に絡み合っただけのものである、とも考えられている。そして、これらの問題はモンゴルだけでは解決が難しく、国際的な協力が必要不可欠なものである。しかしながら、鉱山開発がオランノールの枯渇の主要な原因であることは疑いの余地がなく、富を得る人がいる一方で、遊牧民などの自然を相手にする職業に従事している人々が負の外部性を受けることが現在モンゴルの社会問題となっている。(Batjargal,2007)

その一方で、鉱山開発はモンゴルに多くの外貨をもたらしており、そのおかげで遊牧民の生活も以前よりずいぶん豊かになった、ということもまた事実であり、生活を良くしていくためには、鉱山開発は不可欠であるといった遊牧民の意見すら見られた。

そこで鉱山開発の現状を観察するとともに、人々の自然に対する意識や生活習慣、これまでの鉱山開発の経緯などを現地の人々にインタビュー、アンケート調査することで、どのようにすれば開発と自然環境の保護を両立していけるかについて考察した。

モンゴルの現状

鉱山開発の現状

1) モンゴルの南部にある湖。日本の琵琶湖と同等の面積であり、家畜や牧草地にとって非常に重要な水源。2001年に完全に枯渇し、湖の復元を目指した活動が起こった。

2) COPとは、締約国会議(Conference of Parties)の頭文字であり、COP15は、国連気候変動枠組み条約第15回締約国会議のことである。温室効果ガスの排出規制に関する国際的な合意形成を主な目的としている。

って支えられた非常にデリケートなものである。表現をかえれば、降水量が少ないうえに寒い期間が長い³⁾、自然環境が日本などと比べ脆弱である。土壌が肥沃で無いため植物の種類も少なく低密度であるため、雨が降っても地表にとどまらず流れてしまう。そのため、モンゴルの自然環境は、環境問題のカナリアとも呼ばれている。(杉田,2001) 近年の環境変化(家畜の過放牧と川の枯渇、地球温暖化)によって、自然環境が大きく変化したことが報告されている。

インタビュー、観察を通じた調査

自然に対する認識

まず我々は調査を行う上で、調査地の環境変化についてよく知っている人に対してインタビューをし、問題のブラッシュアップを行った。インタビューに応じて頂いたネルグイ氏は資料2に説明がある通り、オブルハンガイ県アルバイヘルを50年以上見てきており、自身も大学教授で生態学を研究されていたプロフェッショナルな方である。

周辺の自然環境で最も変化したものは何か、という質問に対して、ネルグイ氏は「50年前からハンガイに住んでいる。50年前は熊やヘラジカ以外にも様々な動植物を見かけることがあったが、今では人間以外の動物をほとんど見ることがない」と答えた。

また、その理由についてネルグイ氏は、温暖化、人口の増加、人々の意識の変化を挙げた。過去50年間で世界の人口の急激な増加があり、モンゴルでも50年で人口が4倍近くに増えた。モンゴルの人々にとって、山や川、大地などはすべて霊的な存在として捉えられており、人間が触れたり穢したりすることは決して許されることではなかったという。モンゴルで魚を食べる習慣が無いのも、これが理由であると考えられる。

チンギスハンの時代(13世紀)には、川で洗濯をする、木を切るだけで死罪になることがあった⁴⁾ほど、自然に対する畏敬の念は強かったと言われている。しかし現在では、人々のそういった自然に対する意識が薄れてきており、平気でごみをポイ捨てする人もいる、という。

特にごみの問題については、観察によってもその問題の重大さを実感させられた。草原や川に捨てられたごみ(プラスチックやアルミなど)は、自然に分解されにくく、長くその場に残ってしまうため、家畜や草の成長に影響が出そうであった。この問題について、思先生は「元々モンゴルでは、すべてのものが利用されて自然に還っていたため、ごみという発想がなかった。市場の外部性として現われたごみに対して、モンゴル人は対処するすべを持っていなかった。」と言われていた。

その一方で、町なかではごみを回収し分別・再利用している人の姿もあり、徐々にで

³⁾ 我々が調査した地域(オブルハンガイ県アルバイヘル)で年間降水量が約300mm(日本東京都の平均が1500mm程度)。1年のうち半分以上が平均気温0℃以下であり、寒い時期には氷点下20℃を下回る。

⁴⁾ ダイ・ジャサクという文献に法律として示されている。

はあるが、ごみに対する意識が浸透しているの
が見受けられた。ごみの問題を解決するため
には、こういった意識をより多くの人に浸透
させていくことが重要である。我々もキャン
プ地周辺で、子供たちとともにごみ拾いを行
い、ごみをその辺に捨ててはいけないという
意識を広める手伝いをした。



図 キャンプ地でのゴミ拾い

生活習慣の変化

遊牧民のゲルは年に数回移動するために、比較的容易に分解して持ち運べるようになって
いる。ゲルを移動させるためには、かつては馬やラクダを使っていたというが、現
在では家財が多いため、軽トラックを利用する遊牧民が多いという。実際にゲルの中を
案内してもらったが、昔と比べて家財が多いといっても、日本で生活している我々から
見るとはるかに少ない家財の量であった。たとえば、冷蔵庫や洗濯機といった電化製品
がないのはもちろんのこと、衣服を収納するダンスも一家全員分としては非常に小さい
ものであった。しかし、その少ない家財の中でも、特に我々の目を引いたのがテレビで
あった。訪問した遊牧民のほとんどが、ゲルの中にテレビを所有しており、衛星アンテ
ナにより世界中の番組が視聴できるということであった。テレビをつけるための電気は、
太陽光発電やディーゼル発電機によって賄われている。テレビは家族団らんの間となる
だけでなく、天候などの情報を得る上でも無くてはならないものだという。

そのほかにも我々の目を引いたものに、バイクと車があった。バイクはほとんどのゲ
ルにあり、遊牧するために必要不可欠だということであった。また、車を持っているゲ
ルもあり、町へ出かけるために必要ということであった。町に住む人は、ほとんどみな
車を所有していた。

これらの家財類は、ほとんどが海外から輸入されたものであり、遊牧によって得られ
る収入からすると非常に高いものであった。特に車については、物によるが中古のもの
で 2,000,000 Tg⁵⁾程度であり、平均年収が約 300,000 Tg である遊牧民は 10 年以上のロ
ーンを組んで車を購入するという。

また観察から、遊牧民はそれほど多くの家財は所有しないものの、国内外の様々な情
報を得ており、物質的に豊かな生活に対して憧れを抱いていることがわかった。そのこ
とを後ほど示すアンケートによる調査が表している。これは遊牧民に対して、モンゴル
にとって一番大切なもの何か、という質問をしたものであるが、伝統的文化という回答
項目について地下資源という項目が多くなっている。また、アメリカや日本のように発
展してほしいかという質問に対して、ほとんどの遊牧民が「はい」と答え、その理由とし
て生活が楽になることを挙げた。

⁵⁾ Tg (トゥグルグ) : モンゴルの通貨の単位。100 Tg が 約 6.2 円 (2013 年現在)

そこで、生活における遊牧民が抱える問題を調査したところ、彼らはまず現金収入を得ることの難しさを挙げた。車やバイクが故障、子供が入院、入学などで一時的に大きなお金が必要になる時、遊牧民は家畜を売って現金収入を得なければならない。しかし、家畜は時期によって売値が大きく変動するらしく、町の仲介業者を通じて売るため、焦って交渉しようとする足元を見られ、非常に安く買いたたかれるという。このことはモンゴル国内でも社会問題となっているそうであるが、まだ解決はされていないという。

次に、セーフティネットの少なさを挙げた。遊牧業は気象条件などによって大きく左右されるものであり、数年に一度起こるゾド⁶⁾（雪害）の際には家畜が全滅もしくはそれに近い被害を受けることがあるという。しかし、それに対する生活の保障などは無く、ゾドが原因で遊牧をやめざるおえない遊牧民もいるという。（森,2001）

そのような厳しい職業であるが、インタビューを通して彼らから遊牧業に対する誇りのようなものを感じた。また、遊牧民の家庭に育った青少年に対して、いま何が一番欲しいか、といった質問をしたところ、（遊牧のための）バイクや教科書、馬などといった回答が得られ、携帯や電子機器、装飾品といった町をイメージさせる回答は得られなかった。

これは、外国人訪問客である我々に対して遠慮したのか、親の手前ということがあったのかは分からないが、我々が想定しているよりも物質的な欲求というのは少ないのかもしれない。

ニンジャと鉱山開発

事前学習により、モンゴルでは金の採掘による河川の汚染が深刻化しており、特に個人採掘者であるニンジャが大きな社会問題となっている、ということを学んだ。そこで今回我々は、モンゴルのオブルハンガイ県 Oyang 村を対象として、鉱山開発の現状の調査、およびニンジャに対するインタビューを試みた。Oyang 村の近辺には、オンギ川⁷⁾とその支流の川が流れており、そこでは 1995 年以降、個人や企業による金の開発が盛んに行われており、モンゴル国内でも有数の金の産地となっている。（思,2010）

Oyang 村へは、滞在中のキャンプ地から車で向かった。8時半に出発し、轍の跡のない野原を走り続け、11時半ごろに Oyang 村に到着した。移動中、我々は水汲み（遊牧民の仕事の一つ）をする子供たちや、モンゴル国内でも有数の素晴らしい草原であるア

⁶⁾ ゾドとは、主に冬期におこる家畜の大量死を招く自然災害である。ゾドが起こると食料となる草が不足し、家畜は餌を食べることができなくなる。弱った家畜から死んでいくが、馬はどこかに歩いて行ってしまい、ヒツジはその場で固まって死んでしまう、という。ゾドに対する対策として、干し草が販売・支給されているが、近年のゾドは寒く、家畜にとって体力的に厳しいという。

⁷⁾ オンギ川：モンゴルの主要河川のひとつで、30もの支流を持ちその長さは400kmを超える。とくにゴビ地域の草原で暮らす遊牧民ら10万人（と100万頭の家畜）の貴重な水資源となっている。

ルバイヘール草原を観察し、Oyang村周辺が豊かな自然に恵まれていることを感じた。

Oyang村は、人口200人ほどの小さな村であるが、商店やレストラン、学校などは存在していた。Oyang村の半数以上は、鉱山開発を行う地元企業に勤めているという。Oyang村から車で5分ほど川の上流に向かうと、鉱山開発の現場に到着した。川は、下の写真に見られるような状況であり、企業のものと思われる重機のそばで、ニンジャらしい数人が金の採掘を行っていた。彼女たちは、粗い網目のあるマットのようなものを手にして、中腰で作業していた。そこで、我々は2人組で作業を行っている女性に声をかけ、インタビューに応じてもらった。

二人の女性は、それぞれ38歳と52歳の姉妹。妹のほうは、建設業に勤める夫を9年前に交通事故で亡くした。父は木材会社に勤めていて、母は遊牧民。息子は二人とも鉱山会社に勤めている。姉のほうは子供5人おり、うち3人は鉱山会社ではたらいっている。その鉱山会社の年収は約3,000,000 Tgで冬は休み、それなりに給与は良いということであった。生活に困ってニンジャになったのか、余暇を利用して行っているのかは不明であった。

彼女たちは近くの町に住んでおり、夏も冬も働くが、天気の悪い日は働かないと言うことであった。ニンジャで得られる収入は、よい日で20,000 Tgであるが、あまりとれない日も多いという。金の選鉱に使う篩（粗い網目のあるマットのようなもの）が1枚10,000 Tgで、良いものは20,000 Tgである。試しに篩を使って選鉱をさせてもらったが、素人には難しいようであった。



図.ニンジャの作業風景

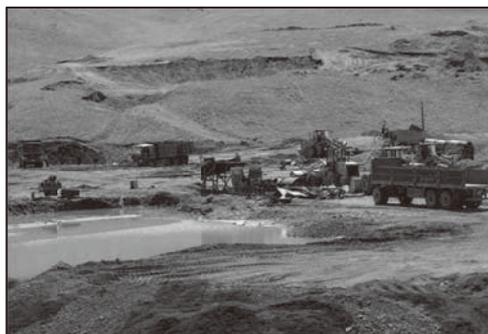


図.地元企業による採掘

インタビュー調査から以下の点があきらかになった。

まず、町の仕事のほうが給料も良く、採掘の仕事も辛いため、できればコックに戻りたいが、働き口が少ないに人口が増えているので、町にも仕事が少ないということであった。

つぎに、昔はたくさん金が取れており、ニンジャが全国から集まってきたが、今は金が少なく、地元の人がニンジャにして採掘を行っている。金は川沿いにあるわけではないが、金の選鉱には水が必要であるため、力のない人は川沿いで採掘をしており、水

を運べる人は川から離れたところでも採掘を行っている、という。

また、彼女たちの隣では地元会社が重機を使って採掘を行っていた。その会社は、オトンチュスというモンゴル人の芸能人が出資している会社で去年から許可を得て運営している。その他にも開発を行っている会社があったが、国の許可をとってやっているという。数年前から、個人採掘者であるニンジャの問題を解決するために、地元企業に許可を与えて地元の雇用の確保を試みているということであり、この川では 50 社ほどが許可を得て採掘を行っているということであった。

私たちが調査したところ（その流域の 3 分の 1 まで）で 14 社確認できたが、ニンジャはあまり見られず、ニンジャよりも企業の重機を使った大規模な開発の方が、環境に負荷を与えているような印象が見受けられた。



図.ウル川周辺



図.ボルジット川周辺

次に、この川（ウル川）からもう一つ離れた川（ボルジット川）に移動し、調査を行った。この二つの川はともにオンギ川の支流であり、距離にして 1km 程度しか離れていなかった。そこで我々はある事実に気付いた。ウル川周辺では、10 社を超える鉱山会社が開発を行っていたが、ボルジット川周辺では 1 社しかおらず、川周辺の生態系も維持されているようであった。

このことについて地元を知る人に尋ねたところ、ウル川では昔から開発が行われていたが、ボルジット川周辺は保護されているという。しかし、ボルジット川周辺にも金がないわけではなく、むしろウル川周辺よりも多く存在しているということであった。さらに詳しく調査したところ、ある歴史的な出来事がこの二つの川の開発に関係していることが明らかになった。

二つの川のうちウル川は、エレル社⁸⁾が 1995 年から 1997 年にかけて開発を行っていた。その当時は採掘に関わる技術・道具をロシアから導入したレベルの低いものしかなかったため、大雑把に金をとったあと、地元で採掘権が売却された。その後ウル川では、

⁸⁾ エレル社：モンゴルの鉱山会社。民主化後に国の事業を引き継ぐ形で設立され、現在では様々な事業を手掛ける巨大企業である。

地元企業によって開発が続行された。ボルジット川はその当時は開発の手が入っていなかったが、2005年にエレル社によって開発が開始された。しかし、その開発は地元の反対運動によって中止された。その理由としては、まず2000年以降に自然環境を保護する活動が活発になっていたことが挙げられる。また、ボルジット川周辺は17世紀に高名な仏僧が薬草を栽培して地域の医療に貢献していた聖地として知られており、そのような歴史的な背景も人々を保護活動に駆り立てるきっかけになったと言われている。これは、ローカルな歴史が自然の保護に影響を与えた事例であり、外部からではなく内部の保護運動であるという点からも非常に重要である。

アンケート結果

環境保護運動におけるローカルな歴史の役割

前節では、インタビューおよび観察を通じて私が気付いたことをまとめた。特にウル川とボルジット川で観察したことは、ローカルな歴史が環境保護に大きな役割を果たした事例として参考になるものであった。この事例では、ボルジット川周辺が薬草の聖地であったことが村の人々にとって共通認識のようなものであり、価値観を共有しやすかったことが挙げられる。

他に地元の人々にとって共有しやすいものはあるか、環境保護運動に対する動機づけになるようなものはあるか、アンケートにより調査した。そこで、モンゴルの人々が何に価値を置いており、身の回りのものをどのように認識しているのかをアンケートした。

“モンゴルにとって何が一番大切か”という質問に、遊牧民17名、都市住民21名にそれぞれ答えてもらった。選択肢は、伝統的文化、山やなどの自然景観、きれいな星空、豊富な地下資源から複数選択可で回答してもらった。

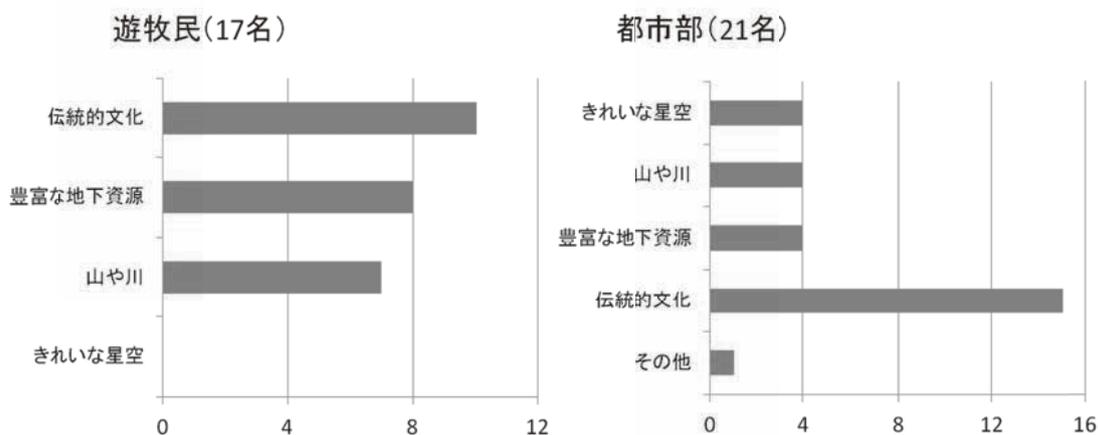


図 アンケート結果 “モンゴルにとって何が一番大切か”

その結果を図に示している。まず、遊牧民・都市住民共に“伝統的文化”の選択率が非常に高いことが図からわかる。とくに都市住民では21名中15名と70%以上の人が、

伝統的文化がモンゴルにとって一番大切である、と回答していた。これは、文化を大切にしているという観点からは非常に好ましいものではあるが、この項目の選択率が多いということは、逆にその保持に対して危惧を抱いていることではないだろうか、とも感じられる。

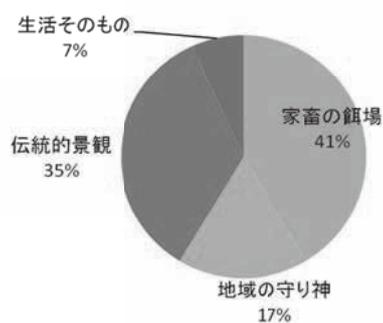
それを示すものとして、遊牧民では“伝統的文化”の選択率が17名中10名で一番高いが、次いで“豊富な地下資源”が8名と多くなっていること、が挙げられる。“伝統的文化”については、都市住民よりも遊牧民の方が保持していると考えられるが、アンケートにおける“伝統的文化”の選択率は都市住民のほうが多くなっている。これは、遊牧民にとっての“伝統的文化”とは生活の一部となっているからである、と考えられる。

次に気になったのが“豊富な地下資源”の選択率であるが、都市住民では他の項目と比べてそれほど高くない（21名中4名）が、遊牧民では2番目に高い選択率となっている。これは、遊牧民にとって生活の向上がいかに重要な課題であるかということを示している。一方、都市住民ではある程度生活が安定している、もしくは地下資源の負の側面（開発による環境汚染や利益の不平等な分配）に関する知識があるからではないかと考えられる。

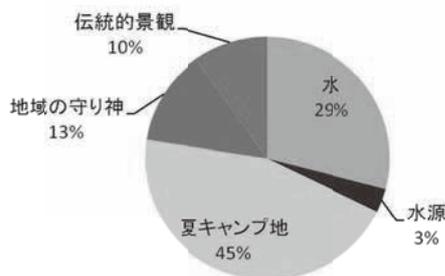
このアンケート結果から、遊牧民は“伝統的文化”を生活の一部として考えており、生活を良くすることが遊牧民にとっての最優先課題であること、が明らかになった。

そこで、身の回りの自然環境についてのアンケート結果を通じて、遊牧民の認識を考えてみた。アンケート結果を下の図に示している。アンケートは遊牧民17名に対して、自然環境（牧草地と川）をどのように捉えているか、ということについて選択肢（複数選択可）を選んで回答してもらったものである。

あなたにとって牧草地とは何を意味するか



あなたにとって川とは何を意味するか



牧草地・川ともに遊牧民にとっては“伝統的景観”というよりも“家畜の餌場”や“夏キャンプ地”といった生活に根ざしたものである、ということが分かる。一方、“地域の守り神”といった自然を霊的なものとして捉える回答もあったが、他の選択肢と比較してそれほど選択率は多くなかった。これは、自然を霊的なものと捉える意識が低い、

というよりも選択肢が選びにくいものであったから、であると推測される。

アンケートの結果から、モンゴルの人々にとって伝統的文化は重要な価値観の一つであるが、それは人によってとらえ方が異なることが分かった。特に自然環境（川や牧草地）に対する認識は、その関わり方によって大きく異なり、価値観の共有は難しい。しかし、その中でもローカルな歴史というのは、価値観を共有しやすいものであったと考えられる。環境保護には、地域における内発的な運動が重要であり、その運動を支えるものとして歴史は非常に重要である。

保護か開発か

ネルグイ氏によると、モンゴル人の外国人に対する印象を物語る一つの逸話があるそうだ。モンゴルに来る外国人（特に開発・投資関係の人）は現地の人に対して、「一緒に発展しましょう」ということを決まり文句のように言うが、開発の現場を見た外国人（特に国際機関関係の人）は、「なんて無茶な開発をしているんだ」と言うという。これは、外から開発・投資を行う人と現地で生活している人の認識がどれほどに離れているか、ということを実に表しているように思う。外から投資を行う人は、その投資からどれほどの利益を出せるかという指標でしか物事を評価しないが、開発の現場にいる人にとっては、開発による自然環境の変化、および収入の増減は、その人の生き方に直結する重大な問題なのである。それと同様に、単に自然環境を保護できればよい、開発は悪いことだ、といった先入観を持って問題の解決に当たることは、必ず現地で生活する人の価値観との衝突をもたらす。

今回調査した内容から、理由はさまざまではあるが遊牧民、都市住民ともにモンゴルが発展していくことを望んでおり、その方法として鉱山開発に期待をしていることが明らかとなった。とくに市場化に伴う生活習慣の変化は、これといった主幹産業を持たないモンゴルにとって、ただ国内で生産し消費するだけでなく、モノを輸出し外貨を得る必要性を生じさせた。しかしながら、地下資源自体が有限なものであるため、ただ外貨を得る・失業者問題を解決する目的での鉱山開発はモンゴルをより貧しくしてしまう、と考えられる。

これは、「海外資本や個人採掘者が勝手に開発し、採掘しつくされたあとのモンゴルにはすなしか残らないだろう。」というネルグイ氏の言葉を強く思い起こさせる。現在の鉱山開発を通じて未来のモンゴルに対する投資ができるような開発の在り方が望ましい。

鉱山開発によって得られた利益は、遊牧民の収入補助やセーフティネット、環境・伝統の保全、新しい産業の開発といった未来を見据えた用途に用いるべきではあるが、残念ながらそのようにはなっていないという。鉱山開発を行う企業、またそれによって税収を得ている政府は、透明性を持った利益の分配を行っておらず、それがモンゴル国民の政府に対する不信感の原因となっている。鉱山開発を通じてモンゴルがより発展した

良い国になるためには、政治を透明性のある公正なものにしていく。そのためにはまず、個人がモンゴルの未来をより良いものにするといった、意識をもって行動することが大事である。自然環境の保護に関しても、鉱山開発に関しても、外発的な発展に任せるのではなく地域で発展していくという意識が大切なのではないか、と私は考える。

何を学んだか、提案

開発か保護かという問題に関して、今回の調査から2つのことを考えさせられた。ひとつは、地域における自然環境の変化というのが地球規模で起きている問題の影響を大きく受けており、それを完全に解決するためには、その国の力だけでは不可能であるということである。地球温暖化による影響もあるが、市場主義の導入によって海外から大量の資本が流れてくるようになったことも示している。そして、地域における自然環境の変化といった問題の影響を最も受けているのが、社会の中でも立場の弱い人間である。

もうひとつが、地域の問題がその国の力だけでは解決が難しい場合でも、そこに住む人が自発的に行動することによって現状を大きく変えることができるということである。モンゴルでは鉱山開発が河川の汚染、枯渇を引き起こしたが、遊牧民をはじめとした住民の運動によって改善されたという事例が観察された。しかし、今年調査して聞き取りをしたところ、そういった住民レベルでの運動は少なくなっているという印象を受けた。

今後モンゴルで保護が自発的に行われていくためには、どのようなことが大切であるか。

このことを、わが国で高度成長期に起こった公害問題を取り上げ、日本との比較を通して考えてみたい。

日本は、1950年以降で急速な工業化を果たした。これはイギリスで産業革命が起こり、200年近い年月をかけてやってきたものをわずか数十年で達成するような急激な変化であった。それに伴って、河川・土壌・大気は甚大な汚染を受け、近年まれにみるような公害を引き起こした。そして公害によって最も影響を受けたのは、モンゴルで現在起きているのと同じように、低所得者や主婦といった社会的に弱い立場の人々であった。現在では我が国の自然環境は大きく改善され、工業自体も環境の面で世界をリードするようになった。その要因となったのはいったい何だろうか。

その理由として、地方自治体レベルでの市民運動が盛んに行われたことが挙げられる。戦後日本の公害問題において、基本的に政府は開発を推進する企業方の立場であった。そのため、住民は中央政府に陳情するのではなく、地元の自治体を動かして政策を変えることに力を注いだ。住民の間で勉強会を開くなどして公害問題に関する認識を広め、公害反対の世論を形成していった。また、大学の研究者や弁護士、医師などの民間の専門家による調査がその運動を支えていた。このように現在の日本の環境政策は、住民の

運動と世論形成によって下から自発的に形成されてきたものであり、その中で重要であったのが基本的人権と民主主義の論理であったと言われている。(宮本,2010)

モンゴルと日本を比較すると、確かにモンゴルのほうが難しい状況にある。まず、モンゴルでは日本と比べ厳しい気象条件にあるため、自然の復元にも長い時間がかかる。また、開発を加速させている外国からの投資は、人々の生活を一時的にはあるが豊かにしているため、住民の間で開発反対という世論形成は起こりにくいかも知れない。そして、これは個人的な印象であるが、モンゴルは1990年まで社会主義政権下にあったため、上から政策が下りてくるという意識が強いのではないかと感じられた。そのため、民主主義のもとで各個人が主張し、運動を起こしていくことは日本や欧州などと比べて少ないのではないかと考えられる。

現在モンゴルは自然環境の保護に関して、先進国から多くの支援を受けている。しかし、それに頼り切るのではなく内部からも保護運動が活発に起こってくるのが好ましい。モンゴルでも一人一人が現在起こっている問題を考え、将来どのような国にしていきたいかということについて議論していくことが非常に大切である、と私は考える。

日本でもモンゴルから学ぶことはある。我々(とくに私を含む若い人たちは)、現在の政治や経済、自然環境といった我々を取り巻いているものを無条件に受け入れがちである。しかし、これらの状況はもともとあったものではなく、戦後多くの人の努力によって時間をかけて形成されたものである。自分を取り巻く環境を当たり前ものと思わず、一人一人が責任を持って取り組むことで未来につなげていくことの重要性を考えさせられた。

また今回観察を行う中で、モンゴルの生活の中に多くの文化が根付いているのを発見した。日本で住んでいるときには意識していないが、我々の生活の中にも多くの日本の文化が根付いているはずである。この文化についても、ただ当たり前ものとして捉えるのではなく、外から見る目線で見つめなおしてみるのも重要なのではないかと私は感じた。

今回モンゴルにおける現地調査を通じて、日本では発見できない多くのことに気づき、学ぶことができた。我々のまとめた報告書が、少しでもモンゴルの人に気づき、学びをもたらすものになれば幸いである。

<引用文献>

Zamba Batjargal(2007), *Fragile environment, vulnerable people and sensitive society*. Kaihatsu-sha

内堀基光監修(2004). 論集 モンゴル国における土地資源と遊牧民 一過去、現在、未来— 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

岩波書店(2003) モンゴル：環境立国の行方一人と自然の古くて新しい関係 科学 Vol.73 No.5 岩波書店

思沁夫編著(2010). オンギー川流域における環境破壊の実態及び‘ニンジャ’集落形成に関する調査報告 モンゴル科学大学出版

金岡秀郎(2012) モンゴルを知るための65章 第2版 明石書店

宮本憲一(2010) 日本公害史論序説 彦根論叢 第382号

<統計データ等>

http://ecodb.net/country/MN/imf_gdp.html

http://mric.jogmec.go.jp/public/report/2012-04/Mongolia_12.pdf

<http://www.erina.or.jp/jp/Asia/bes/>

<備考・注>

本章における写真はすべて桑原が撮影したものである。

チンギスハーン空港から渋滞のなかを車で走ること 30 分、モンゴルの首都ウランバートルの中心市街地といわれる場所に我々は到着した。そこで私が受けた印象は、事前学習で予想していたのと大きく異なるものであった。車の通りこそ多いものの、通りには都市といえるほどの人通りはなく、店はほとんどシャッターを下ろしていた。我々が訪問したのが 8 月上旬の長期休暇の時期にあり、たまたま日曜日あったこともあるかもしれないが、モンゴルの首都は非常に閑散としているという印象を私は受けた。ウランバートルはモンゴルの最大にして唯一の都市であり、人口の半分近くが集中するということを学んでいたからだ。その日の晩飯は、たまたまやっていた屋台（出店）のような場所で食べたが、日本とほとんど変わらない値段だった記憶がある。

翌日は、早朝から 400km 近く離れたオブルハンガイ県アルバイヘルに行くためにジープに乗って、ウランバートルを後にした。道中我々が見たものは、ただ 1 本だけ伸びている中央分離帯のない道路と見渡す限りの草原であった。

アルバイヘルはモンゴルの中でも 20 に入るほどの町であり、病院や学校、商店、レストランなどは充実しており、生活するには不自由ない環境である。そこで私が不自由したひとつのことが、英語が通じないということであった。レストラン、公共施設などでは英語の表記はあるものの、ほとんどの商店では英語表記はなく、話される言葉もモンゴル語であった。これは、調査の過程で訪れた他の村や遊牧民のゲルにおいても同様であり、モンゴル語・日本語・英語をはじめとして様々な言語に精通した思先生の助けがなければ全く調査を行うことができなかつたであろうと思われる。海外調査において言語が非常に重要であることを実感させられた。

オブルハンガイ県での 1 週間の調査を終えて、ウランバートルに帰ってきた我々は最終日にモンゴル国立大学で調査報告を行った。そしてその夜、報告に立ち会ってくれた 2 人のフレンドリーな学生と 1 人のフランクな教授 Byamba 氏と共に夜の街へ繰り出した。目的はナイトクラブ、いわゆるディスコである。モンゴルでは、欧州の影響を強く受けているのか、友人や家族などとクラブで踊りに行くというのは日常的事らしい。

仕組みや雰囲気はタイや台湾、日本のものとあまり変わりなかったが、外国人の姿はそれほど多くなく、地元の人が家族や友人と来ているといった印象を受けた。年齢層は 20 代から 50 代と幅広かったように記憶している。12:00 を過ぎたあたりが一番盛り上がりを見せており、我々は 3:00 ぐらいまで踊っていた。翌日は 9:00 にロビーに集合であったが、8:50 に起きてあわてて支度をする始末であった。

次に来る際には、今回あまり行くことができなかつた町の探索や乗馬、そして自分と同年代の若い人たちとの交流を行いたいと思う。

第4章 新しい生活空間の創造 都市と草原のあいだ - デザインの視点 -

馬庭 泰介

私は大学で都市計画について学んでいる。現在日本を始め先進各国では、少子高齢化、人口減少、環境問題の深刻化などの社会問題が顕在化し、環境に配慮した持続可能な都市構造として、コンパクトシティを都市のモデルとして受け入れられてきている。人口減少に見合った、効率のよいコンパクトな都市を実現しようというものである。しかし、途上国に目を向けてみると、人口が年々増加し、都市部に人が流れ、都市圏が拡大している都市が世界中にある。モンゴルも例外ではない。第2章の人口の都市集中で書かれているように、ウランバートルでは地方から多くの人が入り、都市の急速な拡大が進んでいる。ウランバートルの人口は2009年の1196.8千人から2012年には1318.1千人に増え、わずか3年で10%も人口が増えたことになる。(Undesnii Statistikiin Khoroo 2013) しかし、現在もモンゴルの人口の約35%は草原で暮らしており、「遊牧国家」であることに変わりはないと思う。そのような遊牧国家で、今まで移住を繰り返してきた民族が作り上げる都市とはどのようなものだろうか。遊牧文化と、都市文化、両者が共存していくためには、モンゴルでどのような都市が今後求められるのだろうか。そのような問題意識を感じ今回のフィールドスタディを行った。私達はオブルハンガイ県で調査を行ったので、ここでは、都市としてオブルハンガイ県の首府であるアルバイヘルを取り上げる。そして、遊牧文化と都市文化の共存、持続可能に向けて今後のアルバイヘルのあり方について考えていく。

「まち」、「都市」とは何か

そもそも「まち」や、「都市」とは何なのか。住居が密集している、役所などの行政の機能がある、商業施設が充実している、など色んな特徴が挙げられるが、私は人々を魅了し、惹きつけるところが「まち」や、「都市」の最大の特徴だと思う。アルバイヘルもそうである。物が充実している、自然の脅威にさらされることもない、仕事が多い、教育施設があるなど、遊牧民を惹きつける要素はたくさんある。アルバイヘルができた当時も、人々を惹きつける要素が原点であった。18世紀初頭、現在のアルバイヘルの場所に寺院ができ、人々の信仰の場となり、礼拝に訪れていた。そこで修行するものもいたが、当時は定住するものはいなかった。その後、寺院の周辺に色んな施設ができ、定住する者も現れ、その辺り一体が「ホレー」と呼ばれるようになった。1924年、モンゴル共和国ができ、オブルハンガイ県の中心をホレーに定め、それが後にアルバイヘルとなったのである。アルバイヘルの歴史からもわかるように、寺院という、人々を引き寄せるものが原点であり、常にそういう機能を持っていた。

1980年代は、アルバイヘールの中心部にあるものとして、幼稚園、社会サービスセンター、アルテール（金物で物を作る店）、スーパー、警察署、郵便局、法律所、民間団体施設、第一・第二学校、劇場、市役所、ホテル、集合住宅、病院、体育館があることがわかる。すでに、都市として必要な機能は揃っているように見受けられる。また、中心部の周辺には山の麓にゲル地区が北と西、北東部にあり、町の南西に工場地区、専門学校、ガソリンスタンド、発電所があることがわかる。さらに、町の南には空港もある。また、この時代は車が少なく、ほとんどの町の人々が徒歩で生活していた。

現在のアルバイヘール

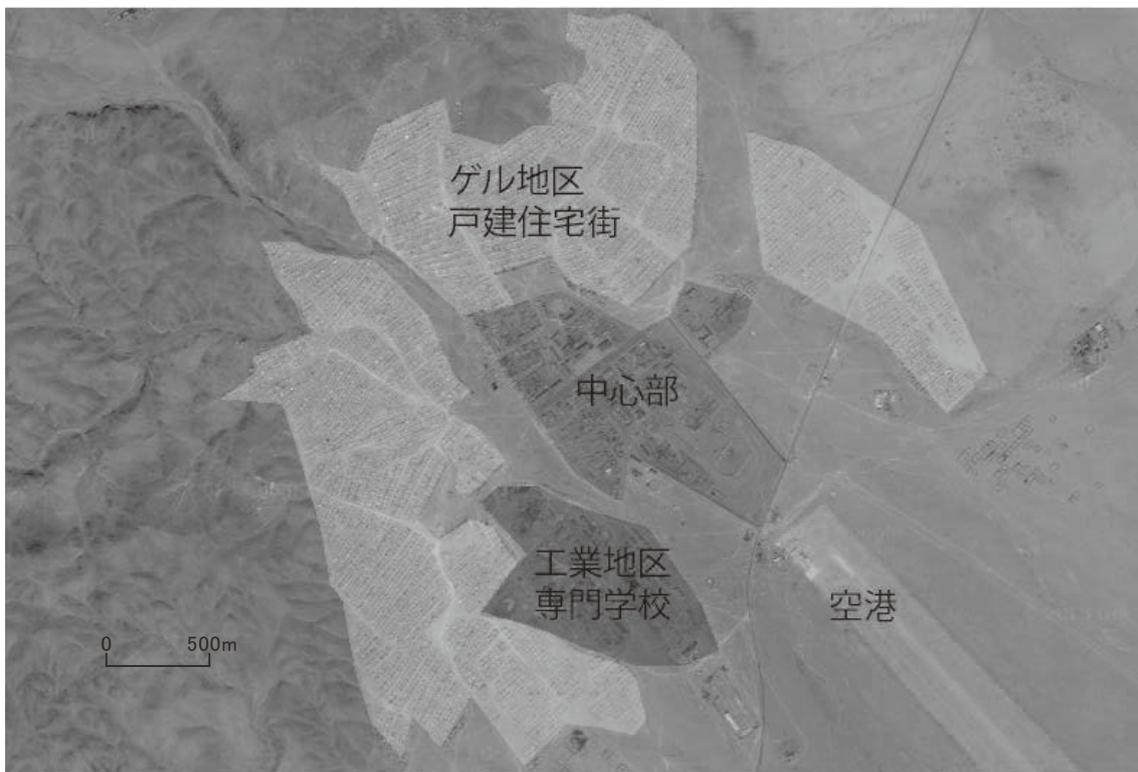


図3 現在のアルバイヘール（google earth より）



図4 工業地区から中心部を見たパノラマ写真

中心部の周りに工業地帯、ゲル地区があるという構造自体は変わっていない。1980年代に比べると、中心部に博物館や、カラオケバーなどが増え、集合住宅の数も増し、密度が上がっているように思える。また、ゲル地区も外へ拡大しているだろう。現在はゲル以外にも、戸建住宅もかつてのゲル地区で目立っている。しかし、背後に山があるので、北と西側のゲル・住宅街のさらなる拡大は抑えられるであろう。

さらにここで気をつけたいのが、車が非常に増えたということである。私が中心部からゲル・戸建住宅街へのある道の5分間の通行料を調べたところ、トラックが3台、乗用車が21台、バイクが8台通過した。また歩行者はほとんどいなかった。人々の移動手段が大きく変化している。ウランバートルはアルバイヘールとは比べ物にならないほど車の量も多く、渋滞が深刻であった。公共交通機関が充実していないウランバートルでは、皆が車で移動を行い、渋滞が深刻化している。車で草原から都市部に入った時は、歩いたほうが速いのではないかというくらい中々前に進まなかった。

アルバイヘールの話に戻るが、かつては宗教弾圧により、取り壊された寺院も、我々が訪問した高層の貢献もあり、1993年にアルバイヘールに寺院が建てられ、仏教復活の端緒になった。我々もその寺院を訪れた。小さな建物がありそれが20000 t gの募金で建てた建物とのこと。本堂、19世紀の高僧の住居を模したコンクリート作りのゲル、占いの建物があった。



集合住宅



寺院

フィールドスタディを通して分かった、アルバイヘールと草原の関係

モンゴルにおいて、都市の周りは草原であり、定住区域と遊牧地域とが明確に分かれている。都市と草原との間にはどのようなつながり、関係性があるのだろうか。ここではそのことについて考えていく。

フィールドスタディを通して得た情報をもとに、アルバイヘールと草原との間にどのような関係があるのかを考察する。

まず、アルバイヘールにある寺院と、遊牧民とのつながりである。一度は宗教弾圧で消滅した寺院だが、1990年ごろの宗教弾圧の緩和、我々が訪問した高僧の努力もあり、現在はアルバイヘールのゲル・戸建住宅街の中に寺院が復活している。まず、モンゴル人はほとんどが仏教徒なので、遊牧民はアルバイヘールの寺院に礼拝に行く。その移動手段も昔は馬であったが、今では車である。

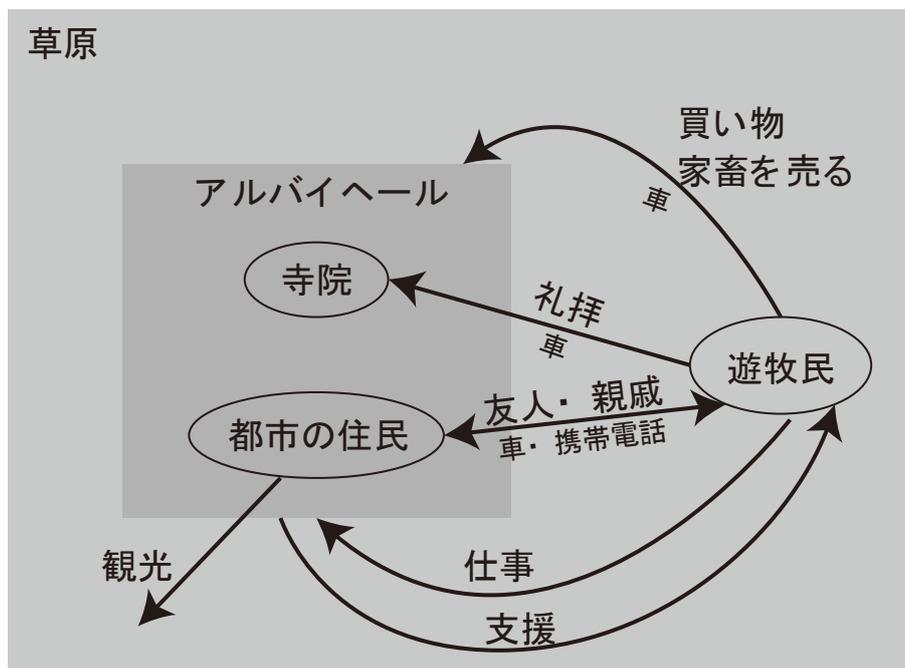
また、モンゴルが学歴社会になったために、遊牧民と、町の住民との間にも深い関係が生まれている。第2章でも触れたように、我々が訪問した遊牧民は自分たちの子供を町の学校に通わせるために、子供を町の親戚に預けていた。別の遊牧民は町にもう一つ家を建て、そこから通わせていた。逆に町にいる子供も休暇中は草原の両親の元へ帰る。さらに、町の人は肉を自給できないので、遊牧民の親戚から家畜の肉を分けてもらっている人もいる。

モンゴルの市場化により、遊牧民も現金がなくては生活ができなくなった。遊牧民は町に家畜を売り、テレビや車、携帯電話といった近代的なものを買うお金を得ている。我々が訪問した遊牧民の方は携帯、洗濯機、草刈機、近代的なものは今や遊牧民の生活に欠かせないものと語っており、それらを購入するためにも、町の重要性は高い。遊牧民の話しによれば、携帯電話は家畜が遠くへ行ってしまった時でも、知り合いに電話して家畜の所在を知ることができ、便利だということだ。テレビは天気予報が見られるので、放牧の生活に欠かせないし、バイクも馬が弱る冬に家畜を追いかけるときに重宝していると話してくれた。さらに、町に行く頻度は、遊牧の仕事の状況に大きく左右され、週に1回の時もあれば、1日に2回行くときもあるということだった。

近年の環境変化も草原と町との関係に大きく影響を与えている。ゾドの頻度は増えており、自然災害ゾドにより家畜を失う遊牧民もいる。そのような人は町に仕事を求める。また、ゾドに対する対策として干し草が販売・支給されている。干し草は一つ100 (cm)×100 (cm)×80 (cm) ほどの形状であり、我々が訪問した遊牧民は、2009年のゾドの際には、700-800購入した（十分に購入したつもりである）が足りなかったと言っていた。なお、支援は干し草の塊が2つのみであった。支援としての干し草に関しては、中間で横流しする人がおり十分に信頼できるものではないとのことであった。

モンゴル人にとって、草原は日常的なもので、身近なものだと思っていたが、日本での都市部の住民が山間部にキャンプに行くというのと同じような現象がモンゴルでも起きていた。我々がキャンプ地に滞在している間、アルバイヘールからの観光客が草原に来ていた。なんでも、同窓会を草原で開いているそう。キャンプ地のゲルを借りてパーティーを行っており、我々も少しお邪魔した。彼ら以外にも観光客はキャンプ地に来ており、普段と違う環境にはしゃいでいる姿が見られた。

以上の関係を図にすると次のようになる。



アルバイヘールと草原の関係

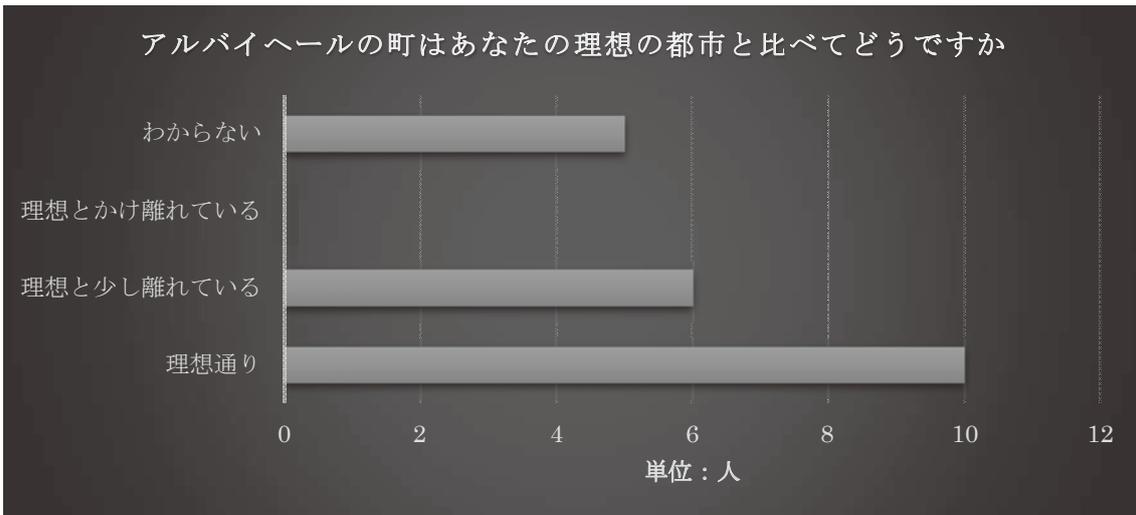
草原とアルバイヘールの両者の間には多様な関係があり、遊牧民からすれば、携帯電話、車の普及で心理的な距離は近い。しかし、都市部の住民からすれば、自分たちで家畜を育てて肉を得ているわけではないし、草原が観光地化していることから、非日常的存在になっているように思える。また、アルバイヘールの重要性がどんどん増し、航空写真から見た、視覚的な拡大以上に、社会面での都市の拡大が、アルバイヘールと草原の境界を見えにくくしている。これは、日本の状況とは全く逆である。日本では、都市周辺でのスプロール現象により、都市の形が見えなくなっているが、モンゴルでは視覚的には草原と都市とは明瞭に分かれ、都市の形は見てわかる。このモンゴルでの変化に、人々はどのように対応すればいいのだろうか。

アンケート・資料調査からわかった関係

我々は日本に帰国してから約1ヶ月後、モンゴルで行ったアンケート調査の結果をモンゴルから受け取った。アンケート結果を分析し、そこからアルバイヘールと草原について見ていく。

人々はアルバイヘールに何を求めているのか

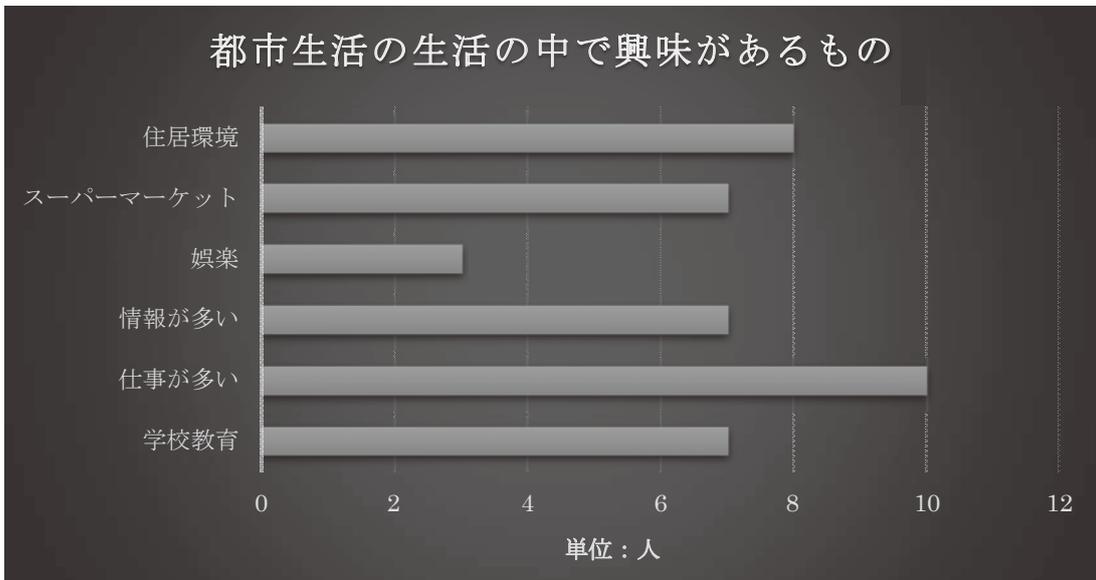
アンケート調査によって、都市部に住む人21名からアルバイヘールの町をどのように感じているかを調査した。最初にアルバイヘールが理想的と感じているかそうでないかのアンケート結果を示す。



アルバイヘールが理想的かどうか

理想通りと答えた人が 10 人、理想と少し離れていると答えた人が 6 人という結果であった。ちなみに、我々がモンゴル国立大学で都市計画を研究されている先生から聞いた話では、ウランバートルに来るときの理想と現実の差は大きく、来た夢を実現した人は少なく多くの方は理想とかけ離れた生活を強いられており、5 人の中である程度理想を実現した人は一人だけという割合だという。地方と比べ生活の状況は悪化した人が多いということであろう。

次に、何が都市生活の魅力なのかを聞いたアンケートの結果を示す。

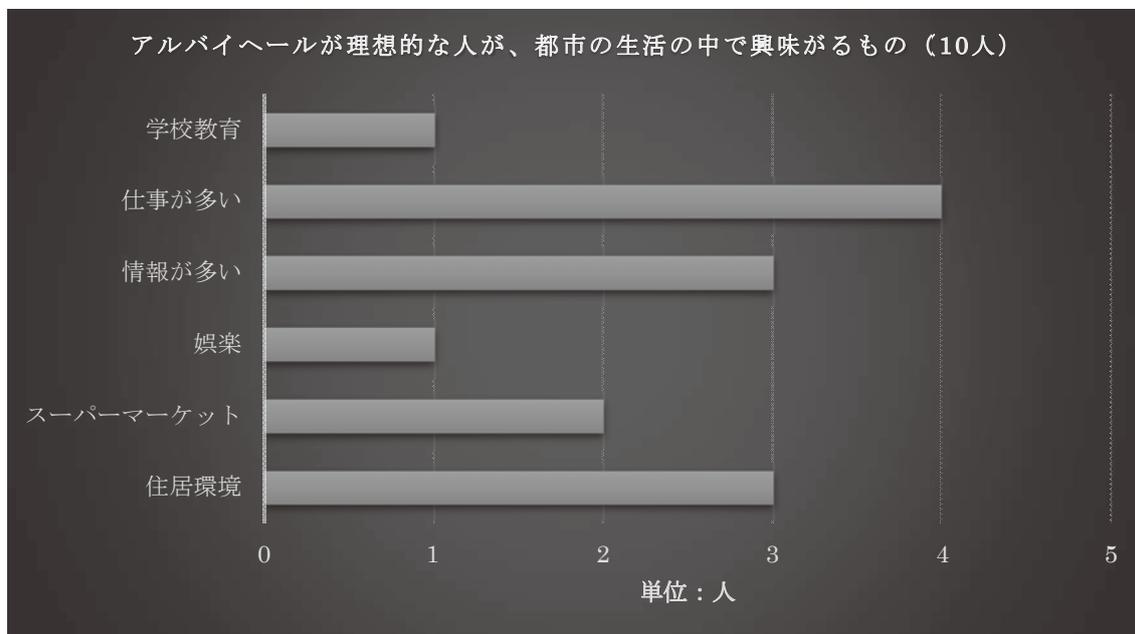


都市部に住む人にとって都市生活の中で興味があるもの

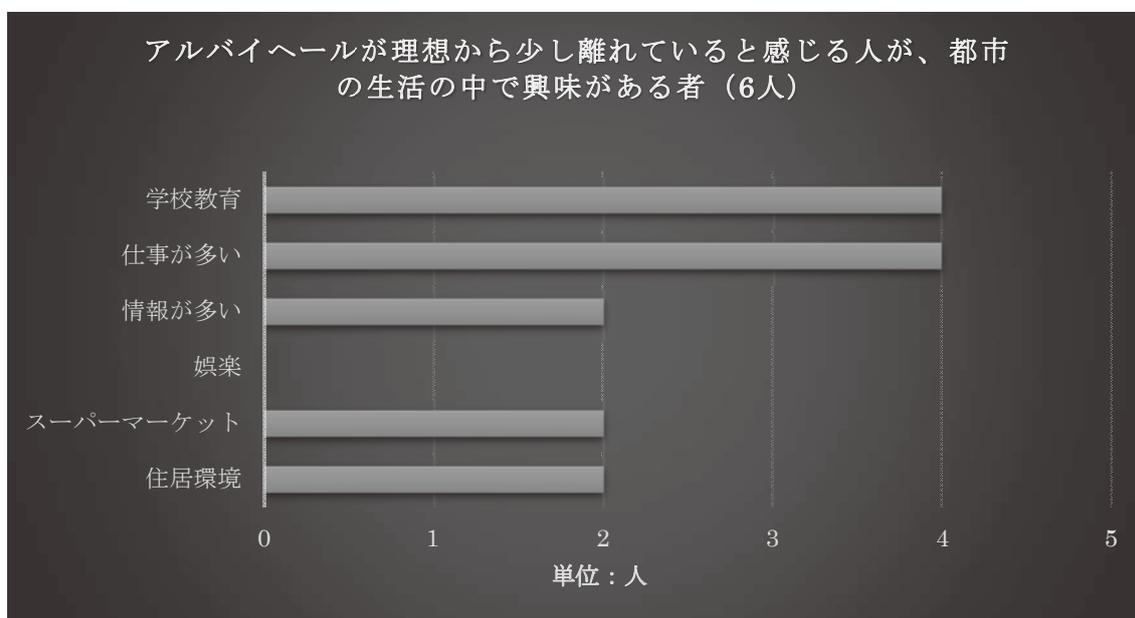
仕事に関心を示す人が 10 人と最も多く、次いで住居環境が 8 人、次にスーパーマー

ケット、情報の多さ、学校教育の7人という結果になった。

今から示すグラフは、アルバイホールが理想的かどうかによる、都市の生活の中で興味があるものの違いをクロス集計により調べたものである。



アルバイホールが理想的な人が、都市の生活の中で興味がるもの



アルバイホールが理想的かどうか・都市の生活の中で興味があるもの

アルバイホールが理想から少し離れていると感じる人は、理想通りと感じている人に比べ、学校教育を街に求めている。ここから、アルバイホールはすべての人に学校教育

の機会が十分に行き届いていないことが言える。また、なぜ貧富の差があるのかという別の質問に対しての回答として以下のものがあった。

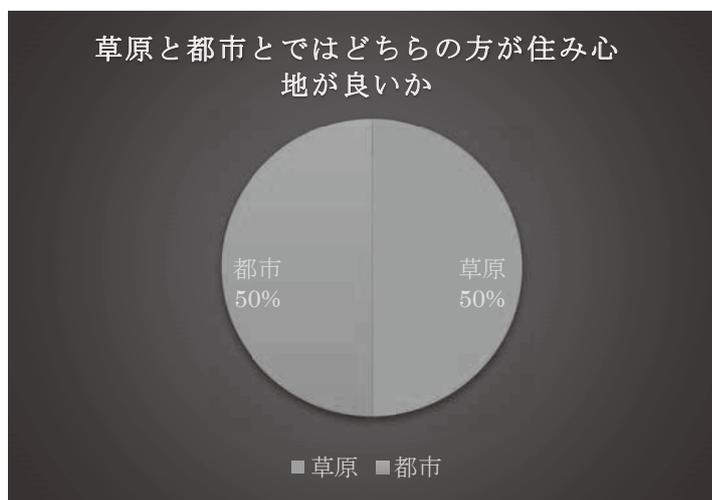
- 仕事が見つからない、国民の皆が専門の資格、免許を持っているわけではない
- 教育格差が大きい。天然資源が国民の手に届かない。政府の人々の金への関心が強くなることで、格差が拡大
- 専門が無いため、仕事が見つからない。生活が難しい

さらに、訪問した遊牧民の両親に、子供が将来遊牧民になり、牧畜を手伝うのと、町で仕事をして、現金収入で自分たちを助けてもらうのとどちらを望みますかと尋ねたところ、「子供の希望に任せる。だが、今の社会状況を見ると、最低限大学を出ていないと生きていけないと感じている。」ということであった。

ここから、モンゴルにおいても学歴社会が浸透し、学校教育の重要性が裏付けられる。

人々はアルバイヘルと草原どちらを好むのか

私達が訪れた、アルバイヘル、ウランバートルともに、インフラの整備が行き届いておらず、衛生状態にも問題があるように思えた。しかしそれは日本と比較した場合の話である。日本のように、都市部も田舎もインフラが行き届いた国では、都市部のほうが住みやすいという人もいれば、田舎での暮らしを好む人もいる。モンゴル人は都市と草原どちらのほうが住み心地が良いと感じているのだろうか。草原と都市とではどちらのほうが住み心地が良いかというアンケートの結果は以下のグラフのようになった。

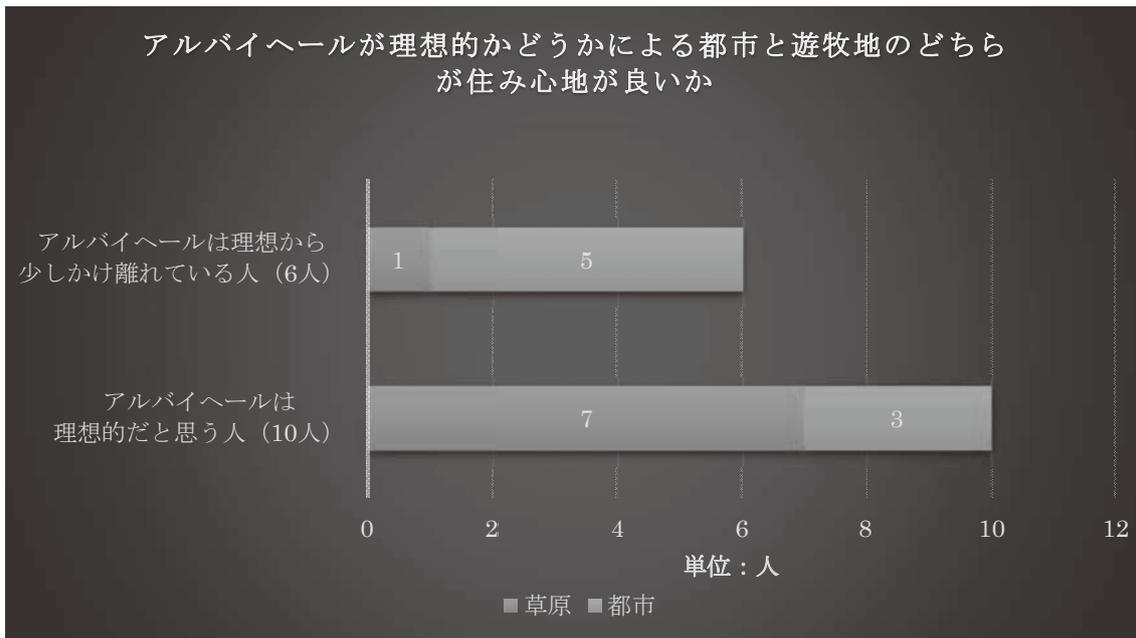


草原と都市とどちらの方が住み心地が良いか

により分析した。私の予想では、アルバイヘルが理想的だと思っている人は当然都市の方が住み心地が良いと感じていると思っていたが、結果は次のグラフで示すように全く私の予想とは逆のものになった。

都市部のほうが住み心地が良いという人、草原のほうが住み心地が良いという人とが半々に別れる結果となった。ちなみに、高僧は草原のほうが好きだとおっしゃっていた。町は便利な面もあるが、時間が来ると皆仕事に行き、家で一人になってしまうが、草原だと話せる人がいる、と話してくれた。

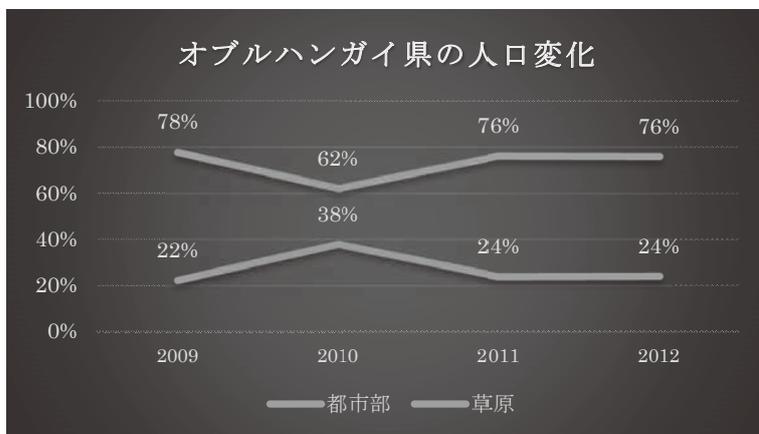
ここで、アルバイヘルが理想的と思うかどうかによって、草原と都市どちらの方が住み心地が良いと思っているかをクロス集計



アルバイヘルが理想的かどうか・都市と草原どちらの方が住み心地が良いか

ここからわかることは、アルバイヘルが理想的だからといって、都市部のほうが住み心地が良いというわけではなく、また、アルバイヘルが理想から少し離れていても、都市のほうが住み心地は良いということである。都市の恩恵を受けている人が次に求めているものは、草原にあるということではないかと思われる。第2章の伝統文化の保持状況でも触れていたが、都市住民は草原を離れ、伝統的文化の重要性を再認識していると推測される。つまり、アルバイヘルにおいても、遊牧文化を融合させたまちづくりが必要ということになる。

自然災害が都市と草原の関係にもたらすもの



オブルハンガイ県の人口変化

Undesnii Statistikiin Khoroo 2013 を基に作成

遊牧民にとって最も恐ろしい自然災害がゾドである。冬の異常な気温低下と大雪により、家畜を失い、経済的に大打撃を受けるからである。近年では2001年と2010年にゾドが発生している。このゾドが都市と草原の関係にどのような影響をあたえる

のだろうか。図 12 は、2009 年から 2012 年までのオブルハンガイ県の都市部と草原の人口変化を示したものである。

ゾドが起こった 2010 年に都市部の人口が急増している。そして、翌年には元の数値に戻っている。ここからわかるのは、遊牧民にとって、都市は自然災害時の生活の拠り所となるということである。さらに、そのまま、遊牧民は都市にとどまるのではなく、再び草原に戻っていることも伺える。

空間・デザイン的特性から見た遊牧文化、草原

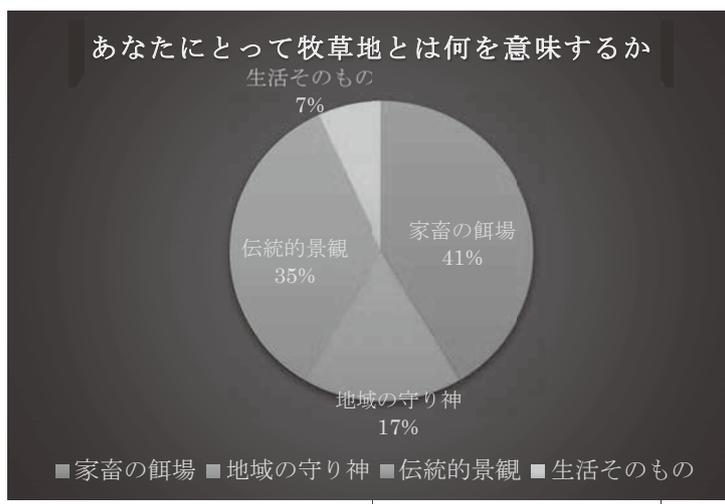
草原の生活空間は非常に開放的で、密度は非常に小さい。さらに、草原に点在するゲルの場所は、遊牧民によって自由に決められる。草原には土地の所有者という概念は全くない。



草原とゲル

とある遊牧民の方に、我々をキャンプからアルバイヘルへ車で送ってくださる最中、遊牧民同士のコミュニティについて質問してみた。すると、遊牧中にお互いよく出会うので、そこから中が良くなり、お互いのゲルに訪問しあうということであった。また、川はあまりわたらないので、交流があるのは、自分と同じ川岸側の遊牧民だけで、川の向こう側の遊牧民とは、見えて

いても交流が少ないとのことであった。つまり、遊牧民にとって、草原はコミュニティ形成の場であり、広い行動範囲ながらも、遊牧民同士、顔を合わせる付き合いを草原で



牧草地の意味

行っているということである。

さらに、遊牧民に行ったアンケート調査の中で右のグラフのようなものがある。遊牧民にとって牧草地は何を意味するかというものである。家畜の餌場、伝統的景観という回答が多いことがわかる。つまり、遊牧文化において、人々は餌場（遊牧民にとっては仕事場）と伝統的景観でコミュニティを築いてきたのである。

また、草原では、川がコミュニティを大きく分断していることが先ほどの遊牧民の話から伺える。家畜は川を渡るのが大変で、橋も少ないので、放牧していないところ、または車で行けない要素がコミュニティの境目になっている。草原では険しい山は少なく、川で分断されていない限り、車で行けてしまうので、山はあまり生活圏、コミュニティを分断する要素ではない。実際我々が車で移動している時に一番困難だった場所が、川であった。

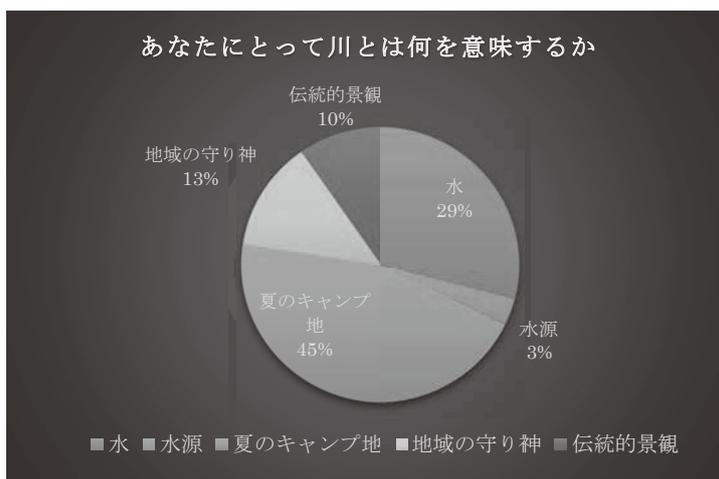


川と向こう側のゲル



渡るのに苦労した川

右のグラフは、遊牧民にとって川は何を意味するかをアンケートしたものである。夏のキャンプ地、水という回答が多く、自然・生活に必要なものが遊牧民の生活空間とコミュニティを分離しているのである。



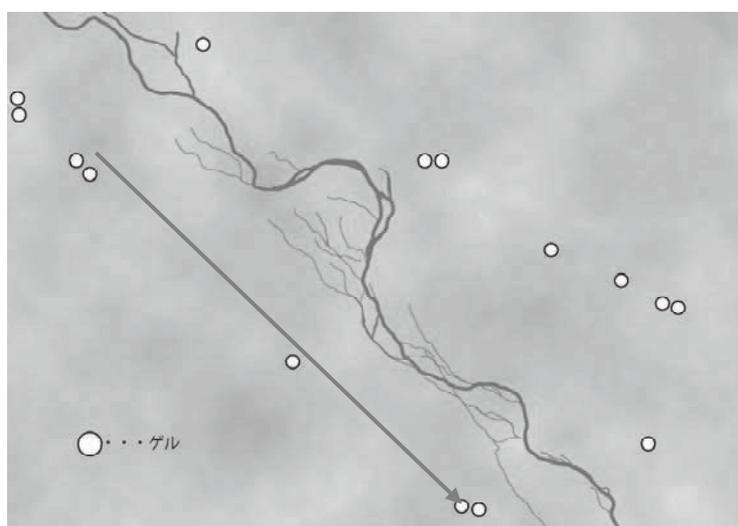
川は何を意味するか

川が遊牧民にとって夏のキャンプ地という結果からも言えるが、ゲルは川沿いに点在していた。そこから言える遊牧文化の生活空間は直線的で、ヨーロッパの都市にあるような、公共のものを中心に円形に広がっていく暮らしの形とは違うものである。

右の図は、イタリアのミラノ市中心部の上空写真である。写真中央部の教会の広場中心とした都市空間が形成されている。生活空間は広場を中心に四方八方に形成されている。一方、我々のキャンプ地の近くを流れていたオンギ川沿いのゲルの配置を google earth を参照して示したのが、その下の図である。川に平行にゲルが点在し、ミラノと比べ非常に直線的である。これが遊牧文化の生活空間の形と言えよう。川に沿って直線的に伸びていく生活空間、人とのコミュニティが特徴である。ゲルとゲルの感覚が離れており、人同士の交流は行われなさそうに感じられるが、行動範囲が広い遊牧の生活において、放牧中に他の遊牧民と出会うことは頻繁にあり、そうやってコミュニティが形成されていく。



ミラノの中心地区 (google earth)



夏のオンギ川沿いのゲルの配置

モンゴルにおける持続可能な都市とは—アルバイヘルを例として—

近年のモンゴルの経済成長により、アルバイヘルはより重要な存在になっていくであろう。遊牧国家であるモンゴルとはいえ、都市で問題が起こっているからといって、都市の住民に遊牧生活を奨励するのは現実的でないし、実際都市は人々を惹きつけるものを持っているものである。都市部での人口増加は避けられないであろう。どのようにして遊牧文化と都市文化が共存し、持続可能な都市を作るかが、今後のモンゴルの課題である。

アルバイヘルの都市構造で考察したように、北と西側のゲル・戸建住宅街の背後に山があるため、このままだと、都市空間の拡大は東側と南側になる。ただ単にスペースがある方へ都市が拡大していけば、都市の中心部からは住宅街が遠くなる一方なので、

公共交通機関が発達していないアルバイヘールでは車がなければ中心市街地に行くことができず、さらに中心部に車が増え、ウランバートルのように、渋滞の絶えない都市となり、車の排気ガスによる大気汚染も深刻になるであろう。

自然災害が都市と草原の関係にもたらすものでは、自然災害のとき、遊牧民は都市に流入してくることを示した。都市は過酷な環境で生きる遊牧民を緊急時はすぐに受け入れられる体制を整えなくてはいけないということである。今のアルバイヘールに家畜を失った遊牧民を受け入れる力はあるだろうか。ゲル地区を外に拡大するだけの対応が精一杯なような気がする。

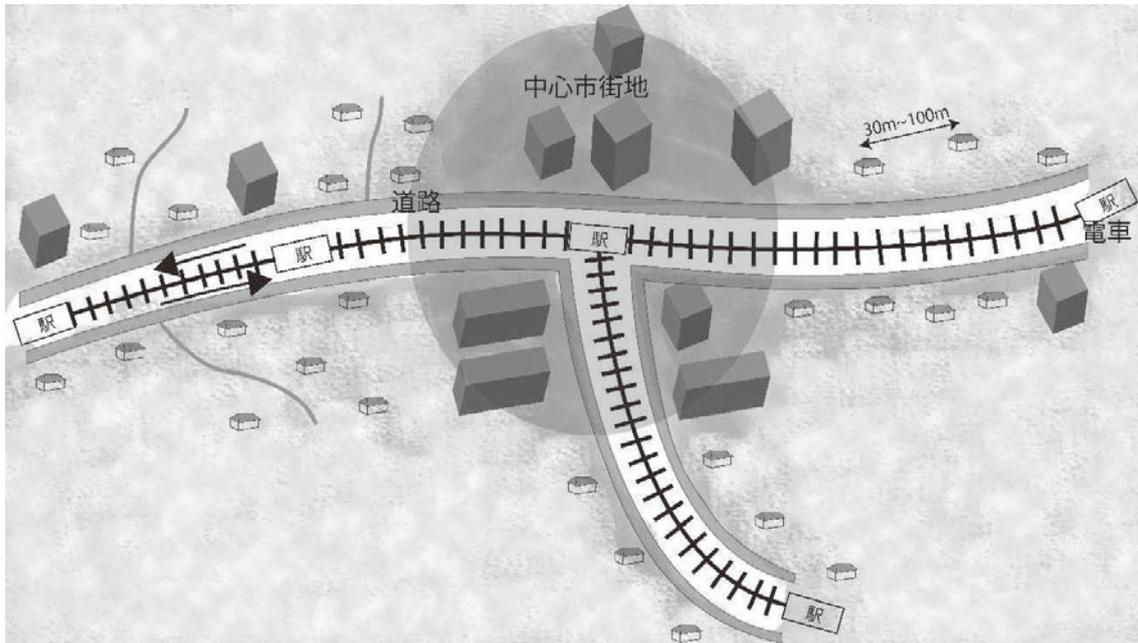
人々がアルバイヘールと草原どちらを好むのかで考察したとおり、アルバイヘールには、遊牧文化が感じられる生活空間にしなければならない。今のアルバイヘールは遊牧文化特有の粗密な人口密度、人々の生活圏が広いために生まれる人同士のつながり、直線的な生活空間、コミュニティは感じられない。しかし、住宅をゲルにするのはおかしい。草原におけるゲルの配置と密度に、デザイン的な解決策があると感じられる。日本のように、建物が密な生活空間は、モンゴル人の空間認識とは合わないと思う。人口密度を高くしても、人同士のすれ違いが多くなっても交流が生まれるわけではない。また、整然と建物を配置するのにも疑問を感じる。草原でのゲルの配置にヒントがあると思われる。遊牧可能な草原があり、川があり、そこにゲルがあるのである。行政側が整備した整然とした区画から生活空間が生まれるのでは順番が違う気がする。遊牧文化が生きているモンゴルだからこそ、デザインしない都市空間が必要になってくるのである。

私の提案

アルバイヘールでの新しい生活空間の創造にあたり、私が留意しなければならないと思うのは以下の点である。

- ゲル・戸建住宅街の拡大による、中心市街地での車の増加に対し、どのように対処するか。都市の構造から考慮する必要がある。
- ゾドの時は、遊牧民は都市に流れこむ。都市は過酷な環境で生きる遊牧民を緊急時はすぐに受け入れられる体制を整えなくてはいけない。
- 遊牧文化が感じられる生活空間にしなければならない。モンゴル人の空間認識に合った、建物の配置・密度を考えなくてはならない。夏の草原の川沿いのゲルの配置は、町での新しい生活空間を想像する際に参考にする必要がある。

以上の点から私が持続可能だと思う、アルバイヘールは次の図のような町である。



私が提案するアルバイヘルでの新しい生活空間

日本の生活空間は密度が高いのが特徴であるが、モンゴルは国土が日本の4倍もある上、遊牧文化の空間認識では、密度が大変低い。だからこそ、あえて建物と建物とを話さなければならない。今や世界中の都市計画で謳われている、コンパクトシティの考えとは全く逆である。さらに、草原では視界を遮るものがない。草原では常に遥か向こうまで見える景観が特徴で、遊牧民へのアンケートでも、草原は「伝統的景観」という回答が多かったことから、アルバイヘルにそのような景観を取り入れるためには、建物、特に集合住宅や、故郷施設のビルは低くしなければならない。

私の案では、電車（または路面電車、バス路線）に沿って建物を配置している。夏の草原では川という、人々が共有するものに沿ってゲルが配置されていた。そこで、公共交通機関に沿って生活空間を直線的に創るのが良いのではなかろうか。しかし、電車の線路にそって生活空間を創ると言っても、日本で考えられているような、駅を中心とした生活空間を作っているのではない。線路にそってまんべんなく、そして粗密に建物を並べていくのである。人口が増えた場合は、線路を延長し、それと同時にまた生活空間を延長していけばよい。

今回の調査、提案した生活空間の問題点

提案した案では、アルバイヘルでの生活に遊牧文化を取り入れようと、デザイン面での解決策を出したものだが、今回の調査では、遊牧民の空間認識については、自分が実際に目にしたもの（夏のキャンプ地におけるゲルの配置、ゲル同士の距離）から判断しているものが多く、主観的な要素がどうしても入ってしまっている。さらに、草原に

住む彼らのスケール感は、狭い日本で暮らす我々とは全く異なるものであろうし、空間認識といった感覚的なものをどのように調査し、客観的、定量的に判断するのかといったことを事前に考えておくべきであった。提案した案自体も、すでに形成されているアルバイヘールの町とは全く異なる構造をしており、私の案に変えていくには、現在あるものの大部分を破壊しなければならない、非現実的である。

しかし、都市文化と遊牧文化の共存を考えなければならないことは確かで、遊牧文化の空間認識、移住という特殊な生活スタイルから、先進各国での都市計画の考えとは全く異なる計画が求められることも強く主張したい。また、自家用車の増加による中心市街地での渋滞対策を防ぐためにも、公共交通機関の充実は必須であろう。道路の整備、動線計画だけでは限界がある。

今後、モンゴルで都市を考えるにあたって、モンゴル人が都市でどのような空間に快適性を感じるかという調査を、遊牧文化と比較して行う必要があると思う。また、移動回数が減ったりと、遊牧文化自体も変わってきているので、遊牧民の移動距離、放牧範囲の変化も調査されるべきであろう。

参考文献、論文

- ・ Undesnii Statistikiin Khoroo (2013) *Mongolian Statistical Yearbook 2012*
National Statistical Office of Mongolia
- ・ Ts.Doljin (2004) *STATISUTICAL BOOK OF UVURKHANGAI PROVINCE*
Statisisical Department of Uvurkhantai
- ・ 小金澤孝昭、ジャンチブ・エルデネ・ブルガン、佐々木達 (2006) モンゴル・ウランバートル市のゲル集落の拡大 宮城教育大学環境教育研究紀要 9, 87-93.
 - ・ 海日汗(1998) モンゴル族の定住化についての研究 日本建築学会大会学術講演梗概集, 59-60.

コラム 海外調査は体力勝負

馬庭 泰介

私は今回のモンゴルでのフィールドスタディを通して、海外での調査、特に途上国での調出を拝み、また明日別の山に登ろうと話していたが、そんな体力があったのもその日までだった。なれない環境に先進国の人々は日々体力を消耗していくであろう。

まず、食生活である。モンゴルの食事は大半が肉料理で、それに慣れなければならない。また、毎晩のようにお酒が振る舞われたが、あまりアルコールに強くなかった私には正直しんどかった。よく飲んだお酒は、アルヒとよばれるウォッカだが、チンギスハンという有名なお酒を飲みやすくしたものらしいが、それでもアルコール度数は40度もあるし、私には強すぎた。

また、胃袋も強くなくてはいけない。私は幸いお腹を壊すことはなかったが、水道水などももちろん無く、衛生状態も日本に比べれば良くないので、お腹の弱い人は、慣れない食事にお腹を壊すかもしれない。

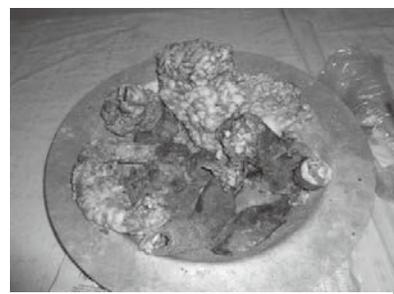
次に、体が丈夫でなければならない。私は日本にいる時から風邪はめったに引かない体質だったので、現地でも体調を崩すことはなかったし、今回調査を行った学生達は皆健康体だったので、風邪を引くことはなかった。しかし、現地を訪れたのが夏とはいえ、気温は寒い時で日本の晩秋くらいの寒さで、真夏の日本から来た場合、体の弱い人であれば、体調を崩すと思われる。実際、我々が調査を行った前の年は、風邪を引く学生が続出したそう。そうすると調査に大きく支障をきたすので、日本にいる間に、体を鍛えておく必要があると思う。

都市部の空気の悪さも、途上国の大きな特徴であろう。特にウランバートルは、近年の車の増加により、排気ガスによる大気汚染が深刻化している。また、砂埃もひどい。我々が訪れたのは夏であったが、冬はもっと大気汚染がひどいらしい。ゲル集落での石炭ストーブの煙で前が見えないくらいになるらしい。そのような環境下で喘息を引き起こさないようにしろというのは無茶なのかもしれない。

海外での調査は楽しく、やりがいもある反面、体力勝負なところもあるので、これから、途上国でのフィールドスタディを考えている方は、自分の体質と、現地環境とをよく考えた上で対策して望んでほしい。



山の上での写真 この頃はまだ体力があった



家畜の内蔵

第5章 学生たちは何を学んだのか ーフィールドスタディの方法論ー

福田州平・思沁夫

2013年8月4日～8月14日に実施されたモンゴル海外フィールドスタディでは、第2章～5章における学生の報告に示されるように、遊牧生活の持続性(環境保護)、開発そして都市空間に関し、教員の予想を上回る成果を収めた。本章は教員の側から今回の海外フィールドスタディにおける学生の学習態度や姿勢の観察、考察および課題の提示を行い、今後の海外フィールドスタディの実践の進展及び理論化(研究)に役立てることを目的としている。

海外フィールドスタディにおける調査とは

1. 観光的要素

海外フィールドスタディが、一般的な研究における調査と異なる点は、それに観光的な要素が加わっていることである。海外フィールドスタディでは、教育的観点から、異なる文化との接触、あるいは文化遺跡や博物館訪問などをスケジュールに盛り込んでいく。それは、非日常を学生に提供するという意味であり、必然的に観光的要素が伴うのである。今回のモンゴルフィールドスタディにおいても、学生たちは博物館などを訪問し、また現地の人々と交流した。研究者が現地で研究に特化した調査を実施するのは異なることが分かる。そのため、参加者の学習意欲、あるいはフィールドスタディのデザイン次第では、物見遊山になりかねない。今回の学生は学習意欲が高く、それぞれの専門領域から現場にアプローチしようと試みたため、単なる観光旅行になることはなく、初期に設定した目的以上の成果を上げることができた。しかし当然のことながら、参加者のモチベーションを高め、学習意欲を促すよう、ある程度、教員は介入しなければならないだろう。

2. 他者・異文化との出会い

また、海外フィールドスタディにおいては、自己と異なる他者、あるいは文化との出会いが重要である。学生は、異なる人・モノに出会うことや触れ合うことに意識が集中し過ぎるあまり、日本と異なるイメージに満足感を得ることが多い。例えば、モンゴルへの渡航に関して言えば、遊牧民の生活に関心が寄せられ、ゲルでの生活や食事、乗馬などを体験し、満足する。これは、素朴な好奇心から湧き出てくるものであろう。しかし、海外フィールドスタディは、観光的な要素も含む一方、調査・研究の側面が多くを占めている。ともすれば、日本人が期待しがちな、素朴でおおらかな「モンゴル人」に出会うのではなく、現地に暮らす、実在する人物と向き合うのである。後述するように、実りある成果を得るためには、脳内で構築された先入観や思考様式を一度、崩さな

ければならない。そのときにも、やはり出会いが必要である。

3. 矛盾との出会い

海外フィールドスタディに限らず、研究全体として言えることだが、調査は矛盾との出会いでもある。海外フィールドスタディにおいて、学生たちは様々な矛盾に遭遇する。モンゴルには、美しい大草原があるとはいえ、一度越山すれば日本製のショベルカーで採掘された砂の山脈が築かれ、河川は汚染、破壊されている光景を目にすることになる。さらに近年は馬でなく、バイクで放牧する遊牧民が増加している。さらに、今回のインタビュー調査では将来、遊牧民になりたくないと答える若者もいたことが明らかとなった。このような矛盾に遭遇し、学生たちは戸惑ったことだろう。しかし、学生たちは矛盾に包まれた状況から、日本との共通点を探し、比較する姿勢を終始保っており、その点は評価でき、彼らの姿勢は調査にも如実に現れていた。学生の間でも、同じ光景を前に、各々のバックグラウンド・経験から異なる意見が飛び出す。このような矛盾を如何に調整するか、それはある程度教員が介在しつつも、学生たちが主体的に議論する中で見出していくものであろう。

先入観と思考様式の問題

ウランバートルをはじめとするモンゴルの街を訪れると、学生たちはあまりに近代化したモンゴルの様相に戸惑ったに違いない。街は乗用車で溢れかえり、渋滞し、近代的建造物が林立し、さまざまな言語の看板が立ち並んでいる。発展途上国のイメージからは程遠い光景である。「こんなに開発が進んでいるとは思わなかった」と、学生は、鉱山開発の現場を目撃し、予想と現実との乖離に驚いた様子であり、不満を感じたかもしれない。他方、ウランバートルで宿泊したホテルにはエレベーター設備がなく、重い旅行鞆を抱え、4階まで階段で部屋まで登らなければならなかった。ここでも、近代化した街と宿泊施設の設備との違いに、学生は矛盾を感じたに違いない。あるいは、調査地へ向かう途中、道が舗装道路から草原へと変わっていく。その時、「舗装道路に戻れるのか？」と不安を抱くような言葉を発した学生もいた。このように学生たちが現地で矛盾や不安を感じることは一度や二度ではなかった。

この問題は、各個人のもつ先入観の問題でもある。これは、海外フィールドスタディでは、講義や事前学習などを通じ、強調されてきた。しかし、学生たちは遊牧民のあるべき姿、バイクで放牧する遊牧民、そしてゲルでの生活など、さまざまな媒体を経由し、情報をもっており、またこれまでの経験から、ある一定のイメージを構築している。こうして、広大な自然の川沿いに点々と白いゲルが立ち並び、家畜の群れから嘶きが聞こえるといった、ある種の「桃源郷」とでもいうべき遊牧地域に学生たちは親近感を抱くようになってゆく。だが、所詮は桃源郷であり、海外フィールドスタディでは現場をみなければならない。

また、学生が先進国／発展途上国といった概念を持ち出すこともあった。これは、本来多様である地域を端的に二つに分類し、それぞれを均一の存在として捉えてしまいかねない。これはあるべき地域の多様性を見失うことになりかねない。こうした思考の問題は、調査にも影響する。今回は学生の努力が観察されたが、こうした二分法を用いる思考様式は強く頭脳に焼き付いている。モンゴルという一つの存在を立体的かつ多面的に、そして平等の観点から観察を試みても、常に思考は邪魔されてしまう。

今回、我々が出会ったのはオブルハンガイというローカルな場に暮らす人びとであり、決して「モンゴル人」ではない。しかし、親日／反日などの概念でモンゴル、そして世界を捉えようとする学生がいたのは事実である。あるいは、何かにつけ「日本」を持ち出そうとする発想も時折観察された。このような思考は、昨今のメディア、あるいはソーシャルメディア上の議論でもごく一般的にみられる。しかし、海外フィールドスタディは、ローカルな現場に足を置いており、国民国家の概念を用いれば有益な結果はもたらされない。いや、俯瞰的に世界を理解する際にも、ほとんど役立たないであろう。今回のフィールドスタディで痛切に感じたのは、学生が「日本人」や「日本」といった国民国家の概念を振り回すことに無自覚だったということである。

海外フィールドスタディでは、先進国／発展途上国、国民国家といった思考様式を崩すことが重要となってくる。つまり、調査では、いかにこうした思考様式をなくし、新たな考え方で対象にアプローチしていくのが課題である。今回の海外フィールドスタディで、ブレイクスルーの一つとなったのは、宿舎のオーナーであるネルグイ氏の講義であった。講義内容は地域の歴史や自然に関するものだったが、途中、参加者の質問をきっかけに哲学的議論に話に移った。学生らはネルグイ氏のような知識人が、オブルハンガイの草原で暮らすこと非常に驚いた様子であった。こうした驚きとの出会いを重ね、思考を堰き止める大きな壁は少しずつ、崩壊していったに違いない。

海外フィールドスタディについて一若干の補足と課題

海外フィールドスタディにおいて、学生たちはモンゴルの自然には満足するが、食には飽きる傾向にある。そこで今回は、基本的に教員が調理した食事を食べたが、ときにはレストランで食事したり、あるいは現地の人びとからモンゴル料理をふるまっていたことで、学生たちはモンゴルの食事を十分に楽しむことができたはずである。特別に現地でキノコを採取し調理したり、毎日馬乳酒も堪能した。そのためだろうか。学生たちは病を患うことなく、フィールドスタディを終えることができた。現地に馴染もうと努力する姿勢は、現地を理解する上で不可欠である。調査は頭で考えるだけでなく、五感で体験することも重要である。例えば、馬乳酒を飲み、毎日モンゴル食を食べることである。こうしてモンゴルとは何か、少し臭みのあるヒツジの肉などとともに次第に分かるようになっていく。

スケジュールに関して言えば、調査期間と活動内容には改善が求められるが、学生が

常に調査を念頭に活動していたことから考えれば、適切だったとも言える。現地調査を補うようなかたちで、ネルグイ氏やモンゴル国立大学の教授陣たちの講義が実施され、現地の人々との交流も生まれた。モンゴルの海外フィールドスタディでは、今後、調査と学習の組合せを工夫し、学生の学びがより深まるようデザインしていくことが課題となろう。例えば、モンゴルの学生と共に考察するといったことも可能だろう。また、調査地は交通が不便な土地であるため、今後ロジスティックな面も検討が必要とされる。

今回改めて認識したことだが、十分すぎるほどの事前学習は海外フィールドワークにおいて決して欠かすことはできない。例えば、今回の海外フィールドスタディにおいては、ニンジャの問題が一つのテーマとして取り上げられた（詳細は第3章を参照）。確かに、モンゴルにおいてニンジャは重大な問題であるが、日本のメディアで報道、取り上げられることは少ない。そのため、モンゴル現地でニンジャの問題を聞き、戸惑わぬよう、学生たちに適切な情報を与える必要がある。また GLOCOL の海外フィールドスタディでは、参加希望学生の所属を問わないことから、文理の問題にも直面する。確かに学問上では文系／理系の区別はあるが、海外フィールドスタディで訪れる現場に文理は存在しない。そのため、今回、文系／理系という違いをことさら強調せぬように尽力し、学生間の議論を促進させた。これは、成功すれば学際的な視点・考えを打ち出すことができるが、失敗すれば単なる意見の寄せ集めに終わってしまう。今回の海外フィールドスタディが一体どこまで成功したのかは、読者に委ねるしかない。いずれにせよ、海外フィールドスタディの学びをデザインする上で、避けてはならぬことであろう。

私たちは今回の海外フィールドスタディで学生たちに対し、「国際化」、「自己向上」、「グローバルに活躍」といった近年、日本の大学教育の流行用語のようなことは一切強調しなかった。今後実施される海外フィールドスタディにおいても強調されることはないだろう。むしろ強調したのは、いかに「地味」になるか、いかに細部を観察してゆくかということである。自己と異なる文化・生き方をどこまで理解できるか。これこそが国際的かつグローバルに活躍する上での不可欠要素なのである。英語が話せる、国際的である、あるいはグローバルに活躍できることではない。もっとも、私たちはここで言語が全く必要ないと述べているわけではない。グローバルに活躍するためには、言語は必ずしも必要不可欠ではなく、様々な能力を総動員することこそが重要だと伝えたいのである。人間の価値観が多様化していくことに、見るべきことがあるはずであり、それこそがまさに国際化であり、また自己を高める重要な機会であり、グローバルに活躍する人材となるためには見逃してはならない。だからこそ、私たちは海外フィールドスタディと言いつつも、いかにローカルなことを考えていくか、そしてその中の多様性をいかに理解していくかを重視している。このようにして、グローバルに活躍するための素地が生まれてくるはずだと心底から信じている。

歴史・現在・未来

調査は時間的に現在進行形であるが、地域社会や人々は歴史の中に存在し、生活している。地域性を歴史の視点から理解するのは大切であるが、地域研究を専門としない学生らにとってこれは難しい問題である。学生らはモンゴルに来る以前より、モンゴルの伝統文化に非常に強い関心を示しており、文献を読み漁り、準備してきた。しかし、知識として伝統文化を理解することと、地域の生活の中で人々の意識や思考を理解することは同じでない。また、短期調査で一体どこまで歴史的な理解が得られるのか。歴史の視点から地域社会及び地域の抱える課題を理解できるのか。これらは非常に難題である。

今回のモンゴルフールドスタディでは、地域史を理解する機会があった。オンギ川源流域で環境保護と開発が対立する中、現地の人々は自然と歴史の重要性を理解し、社会に訴えた。地域は一致団結し、最終的に源流の3本あるうち1本の保護に成功している。この環境保護の事例は、学生が歴史を理解する上で、非常に参考になったと考える。詳しくは第3章を参照して頂きたい。

ネルグイ氏の講義や遊牧民との交流を通じ、学生らは地域の自然が物理的自然ではなく、歴史的な価値を有する自然であることを、ある程度理解したと思われる。調査地域はかつてモンゴルの宗教の中心地であり、様々な形で伝説、逸話が残されており、歴史的遺産も人々の感情、心情は世界や地域に対する愛情や理解として反映されている。細部に至るまで調査、分析することは学生たちにとって至難の業であった。しかし諸問題を技術で単純に処理してしまうのではなく、歴史を学び、歴史から考え、地域の素晴らしさや主体性を重んじることを学んだと考えている。私たちは学生たちに対し、常に歴史的観点を重視して欲しいと望んでいた。幸いながら、地域の人々がその大切さを彼らに教えてくれた。学生たちをみると、技術者であるという枠にとどまらず、既存の枠組みを超越し、理解に努める姿があった。しかし、短期間で地域に対する歴史的な理解を深めるのは十分でない。事前学習や現地学生の参加・交流という形で不足部分を補わなければならないだろう。

調査成果について

GLOCOLでは、調査結果を帰国前に現地で発表するのが一般的である。また、海外フィールドスタディの成果を大学で公表し、さらに報告書としてまとめる作業も行われてきた。モンゴルのフィールドスタディでも、現地での報告会、帰国後の発表会や調査成果をまとめた報告書の作成に取り組んだ。

口頭発表や報告書の作成は学生たちが調査、交流活動を振り返り、さらに深く考えさせることにつながる。だが、其々の専門性の活用につながったのかは検討の余地がある。今回は「技術者のためのエスノグラフィー」及び調査結果のモンゴル語版出版に挑戦した。

「技術者のためのエスノグラフィー」は、冒頭で紹介したように、調査成果をそれぞれの専門性を活かしつつ1つの「エスノグラフィー＝報告書」としてまとめたものである。

本エスノグラフィー執筆は大変困難を伴うものであった。まず、執筆時の問題である。科学技術系の論文でない、エスノグラフィーというまとめ方は学生たちにとって初めての体験であり、執筆方法が分からないという戸惑いや質問を多く受けた。私たちは学生たちに指導しつつ、作業を進めてきたが、短期間でエスノグラフィーをまとめるというのは至難の業であるようだった。

しかし、「技術者のためのエスノグラフィー」を書くという共同作業は非常に良かったと思う。モンゴル側も参加あり、両国が協力して作業を進行させ、討論を行う。このような作業プロセスを経ることによって、フィールドスタディを夏の一時的な調査に終わらせてしまうのではなく、事前学習、調査、報告など年間を通して続けてゆく。そしてさらに人間関係の構築と維持につながるようにしたい。また、フィールドスタディを成果としてまとめるという、新たな挑戦に挑んだが、学生それぞれの専門性を活かし、単独で報告書をまとめるのも悪くはないと考えており、柔軟に対応すべきだとも感じている。特に参加人数の多い調査では、やはり一つの報告書の形でまとめるのは困難であるため、専門性を活かしたまとめ方が相応しいと思われる。

最後になるが、フィールドスタディ前後、そして期間中も日蒙間の交流は非常に限られており、言語の壁は現地での交流と文献収集、読解に制約をかけたほか、学生たちは自身の研究に多忙の中、報告書をまとめるというのはかなり厳しかっただろう。だが今回はモンゴル語版の報告書出版を通じ、両国の交流が促進されることは間違いなく、マスメディアやその他の方法でフィールドスタディを両国で広く報告していきたいと思う。

第6章 モンゴル側からみたフィールドスタディ

アマルバト・ソソルボラム、岸本紗也加

第6章では、モンゴル在住の2名がそれぞれ報告する。一人目の報告者はモンゴル科学アカデミー日本研究部研究員のアマルバト・ソソルボラム（ソソル）、二人目はモンゴル国立大学社会科学学科・文化人類学研究室の研究生、岸本紗也加である。

フィールドスタディから得た学び—国際交流を通じて—

大阪大学はモンゴル国立大学、特に私の所属している社会文化人類学研究科を中心に思沁夫先生を通じて、モンゴルの環境や遊牧民、社会的、経済的な問題など様々な分野で共同研究が行われている。その活動の一部である大阪大学 GLOCOL 海外フィールドスタディプログラムでは、2012年8月22日～29日実施のオブルハンガイ県における調査に私も参加することになった。この調査では大阪大学の先生方や修士課程の学生たち、調査対象であるオブルハンガイ県のズーンバヤンウラーンスムの遊牧民たち、調査期間に大変お世話になった人々、バトノミン・スワラガ環境保護遊牧民組合の人々など、大勢の人々が参加し、協力し合った。皆様の努力や善意によって非常に有意義な調査が実現できたと思う。

フィールドスタディでは、モンゴルにおける遊牧民の日常生活、遊牧民らに与える社会・経済の影響、環境問題をテーマに、反遊牧民になるニンジャや鉞夫たち、ニンジャのように金を採掘する遊牧民たち、自然を守る活動を行っている遊牧民組合などのほか、自然（特に希少な自然について）や歴史、伝説、記念碑なども対象に幅広く調査を行った。

大阪大学の三名の先生方から調査期間中、優れた教育活動やアドバイスを受けたが、時間を厳守し、調査計画の通りに短期間に多くの資料を収集し、その資料を正しく分析するための助言をして頂いた。また、思沁夫先生や宮本和久先生は料理人として素晴らしい才能をお持ちであった。素晴らしい、健康的な料理を振舞ってくれたからこそ、参加メンバー全員が元気に、楽しく調査できたと思う。先生に心から感謝申し上げる。

学生たちからは調査に対する熱意を強く感じただけではない。まず、時間を厳守し、計画的に物事を進めていたことに驚いた。モンゴル人には計画的に物事を進めるという習慣や考えがあまり浸透していないように思う。明日は何をするか、朝起きてから決める、今日仕事が出来なければ、明日があるので明日する、といった具合である。これは、時間という概念や日本の「和」といった考え方よりも、モンゴル人が自然環境に従い順応するかたちで生きてきた遊牧文化がその性格に影響しているのかもしれない。また、学生たちはとても誠実、真面目、温和で、判断力と協調性があり、他人と協力し合い行動することに長けていると感じられた。1日の調査を終えると、疲れているにも関わら

ず、夜に必ず、調査での学習事項や発見などをノートに詳細にわたり記録し、すぐに分析し始めた。一人ひとりの意見を尊重し、其々が分かったこと、不明点などを確認し、先生方のアドバイスを受けつつ、意見を膨らませていた。ちなみにモンゴル人の場合は、集団よりも個、すなわち個人が重視される傾向にある。他人と協調し、行動するよりもむしろ、個人それぞれの長所や能力を活かし、伸ばしてゆくというのが学校や職場でごく一般的にみられる。

しかし、学生たちに学びを与えたこともあった。日本ではモンゴルと同様に自然に神が宿るという信仰がある。キャンプ地に宿泊中、私たちは近くの川で歯を磨いた。日本人の学生たちは歯を磨くとき、濯いだ汚れをそのまま川に吐き流していたが、そのような行為は禁止されている、川は清く神聖であるため、汚してはいけないと注意したことを今でも覚えている。フィールドスタディを通じ、モンゴルの文化や習慣と自国との違いを理解するだけでなく、日本人を相手にモンゴル文化を説明することで、より深く自国の文化について学ぶ機会になった。

フィールドワーク実施と参加は、モンゴルと日本間の交流はもちろんのこと、モンゴルのための様々な研究や教育にも大いに役立つと思う。さらに、環境保護活動を実践する遊牧民らの活動を支援し、モンゴルと日本の学生たちの関係をより強く結びつけ、共同でモンゴルのための活動実践につながっている。また、鉱山開発に沸くモンゴルで、自然の保護、遊牧地域の再生と維持が強く求められる中、今後、フィールドスタディがモンゴルと日本の架け橋となる若い人材や研究者の育成に寄与すると考える。フィールドスタディは約1週間という短期間で、非常にスケジュールが密に組まれており、疲労や体調不良を感じる学生もいたかもしれない。しかし苦勞以上に学びのほうが大きく、研究者としてあるべき姿勢や性格、そして人生経験上、私に大きな影響を与えたと言える。日本から来た学生たちはモンゴルに非常に高い関心を抱いていたため、モンゴル人として嬉しく思った。今回のフィールドワークでは、一人ひとりが最善を尽くし、良い結果を残すことができたと考える。モンゴルでのフィールドスタディが今後も毎年、成功的に継続され、モンゴルの自然と国民に良い影響をもたらす、素晴らしい活動になると信じている。

モンゴルの環境と開発

モンゴルでは、遙か昔より自然は神聖であり、守ってゆくものと固く信じられてきた。しかし1990年代初頭のモンゴル民主化移行後、自然を守るという人々の信仰は急速に失われてきており、自然を崇める、守る行為はかつてほど見られなくなってきた。そのときモンゴルに市場経済が急速に浸透し、個人経営のビジネスが急増、鉱山開発も活発化し始めた。人間の悪い行い（環境を汚染するような行為のこと）や発電所や工場など

から無防備に排出される大気や水質汚染物質によって、モンゴルの環境はかつてないほど深刻化している。

モンゴルのオユトルゴイ鉱山はその規模をとっても、専門家らの意見からも、世界級の巨大鉱山であり、モンゴルは世界から注目を浴びるようになった。特に近年、鉱山開発が自然環境に与える影響はすさまじく、それに対する遊牧民や彼らを支援する外国の多くの環境保護活動や資源ナショナリズムが発達し、自然を保護するための新たな組合設立や活動の展開が著しくなっている。例えば、自然を守る遊牧民組合、すなわち、遊牧民たち「自身の力で故郷を守る」という活動、特にニンジャたちと鉱山開発に反対の意を唱える遊牧民組合が近年増加している。

今回のフィールドスタディで訪問した、バトノミン・スワラガ自然保護遊牧民組合は、オブルハンガイ県の県庁所在地であるアルバイヘルから約 28 キロメートル離れたところにある。オンギ川の岸辺に位置する、モンゴルで非常に珍しいカスピーンの白い柳の森を守るという目標を掲げて設立された。この地域は歴史的、伝統的、宗教的な遺産が数多く残されている地でもある。

このフィールドスタディプログラムでは、当遊牧民の環境保護組合や遊牧民たちの自然保護活動を支援し、地域の歴史や自然の特徴とその大切さを人々に周知させる、もとの自然の姿に自然を戻し、自然を維持してゆく活動を行っている。今回のプログラムでは、組合の目的に沿い、ネルグイ氏より組合に関する話を伺い、組合員の遊牧民にもインタビューし、植林も行った。モンゴルでは多くの自然を守る伝統や方法があるが、植林の伝統や経験は乏しい。今回、引率の先生方や学生たちは組合に対し、様々な提案を行いました。例えば、庭に菜園を設け、野菜や果物を育てれば、冬でもビタミン類などを摂取できるほか、市場における販売を通じ、現金収入を得ることが出来るなどである。

話を環境と開発に戻そう。そもそも、冒頭でも述べたように、モンゴル人の精神には自然を守るという概念が生きていた。昔のいわゆる自然を守るという概念とは、自然に神がおり、自然を神聖なものとして守るという意味であった。確かに現在もこの概念は存在しているが、自然を破壊から守る、被害を防ぐという考えのほうがむしろ強調されているのは残念である。本来、モンゴルにおける自然保護は宗教思想や人間と神との信頼関係に基づいているが、モンゴル人は自然がありのままの姿であり続ける大切さを重視している。遊牧民たちの心には、環境破壊の被害地となった生まれ育った地域を再生したいという意思が生きている。しかし、遊牧民の場合、ニンジャになるという選択肢を選ぶこともあり、遊牧民の家族のうち誰かがニンジャになり、砂金採取のために土を掘るという事例も確かに多い。それはなぜか。様々な理由が考えられるが、遊牧民がゾドなどの厳しい気候現象によって家畜を大量に失った、また生活や移動のため現金が必要だからだと推察する。これも私の推測であるが、自分以外の誰かが既に土を掘り返している状況で、途中から自分も砂金採取に加わり、土を掘り返すことは「環境破壊にならない」「やってもいい」と遊牧民たちは考えているのではないだろうか。

遊牧民の組合の自然を守る活動とモンゴルフィールドスタディプログラム

現地調査が行われた地域は、オング川流域であるが、地方の人々の自然を守る活動が多く行われてきた。それ一つである自然を守る、バトノミン・スワラガ環境保護遊牧民組合は社会主義時代以降、手入れされず、破壊の被害を受けてきたモンゴルで非常に珍しいカスピーの白い柳を守るため、地元出身のSh. ネルグイさんが2007年の12月に設立した組合である。組合員は全員自発的に集まり、組合員となった地元の人々である。ここは昔から歴史的、伝統的、特に仏教にとって重要な神聖の地であるため、地元の人々が愛し、自然を守る最も強い原動力になっている。しかし、バトノミン・スワラガ環境保護遊牧民組合は自発的に組織され、活動を行っても、保護活動を支える財団などの支援が必要である。

白い柳を家畜や人々から守るため、世界自然環境財団の「自然環境2」プロジェクトなどの支援で白い柳に庭やチャツァラガナやウヘリーンヌデの木を植えることが出来た。本組合は地方を守る活動の必要性を地方の人々や政府に訴えるため、地域の主要な利点や特徴、つまり「地域の宝」を紹介している。そのためネルグイ氏は、地方史、地方の文化を詳述した本を何冊も執筆している。彼の地方史、伝統文化についての知識は、自然を守る活動に非常に大きな役割を果たした。組合員の遊牧民ではなく、組合員以外の遊牧民たちやソムの人々は自然環境を守る重要性をよく認識し、破壊された自然を回復するため、共同活動を行うことになった。子供たちにも自然を守る、自然を回復する方法を教えている。このように地方の人々の行動は、国の法律よりも、実行能力や将来的可能性が高い。ネルグイ氏率いる本組合の活動は非常に実践的であり、他の環境保護活動の模範になるところが大いにある。本組合の自然を守る活動はモンゴルでは新しい方法で行われているが、今後より成功的に発展すれば、地方の発展に良い結果を出すことが出来る。地元の人々の地元愛が強く、地方に関する歴史、伝統、文化を外部の人々より知識が豊富であるため、自然を守る活動を地元の人々が円滑に進めることが出来る。

本組合とともに調査を行ったモンゴルフィールドスタディプログラム内容には、当地の人々の自然を守る活動を支援する、特別な自然を守るモデルになるための援助をする、地史、伝統、神聖地を国際的に紹介するなどの重要な活動を担っている。また、日本の自然保護の優れた方法、実践例を紹介し、アドバイスや提案を行っている。本フィールドスタディプログラムの調査によって、当地域の研究はさらに進められ、日本人に対してモンゴルやモンゴルの自然環境に関する知識や情報提供に繋がると感じている。

本組合とモンゴルフィールドスタディプログラムの自然保護活動は、日本とモンゴル両国の自然保護方法を融合させ、実践にフォーカスした共同の活動、いわゆる国際的なモデルと言っても間違いはないだろう。

しかし、白い柳だけではなく、地元における他の破壊された地域を保護する、共同活

動を拡大し、地域の保護活動を促進しなければならない。また、自然だけではなく、人材育成のための活動も必要である。ウヤンガソムにおける、手で砂金を採取する約 5000 人のニンジャヤ、アルバイヘル市中心部に暮らす無職の人々を対象とした活動も行うことにより、地元の発展に貢献すると考える。本フィールドスタディプログラムの期間中に、地元の人々に共同プログラムを紹介し、彼らから意見や感想を得ることが出来れば良い。

本フィールドスタディプログラムでは、モンゴルと日本の学生たちの関係を深く結びつけ、両国の若い研究者を育成することが出来ると思う。特に調査に参加したモンゴルの学生にとって、日本の大学教授から研究方法や資料の分析方法などを学ぶことは非常に勉強になる。モンゴルの学生は大学で学んだ理論を、実践する機会がない。また、モンゴルの主な政策方針「自然に良い緑の経済を発展させる」にも貢献する小さなモデルになると思う。モンゴル科学アカデミー国際研究所では、今年（2014 年）から開始される「先進国の緑の経済政策、日本・ヨーロッパの国々の事例」という 2 年間の研究調査テーマにとっても、日本の自然保護法を学ぶなどして非常に勉強になった。本フィールドスタディプログラムの調査期間は短かったが、今後も継続し、研究においても、自然保護活動においても、双方に良い結果が出せるプログラムだと考える。

まとめ

モンゴルで伝統的な自然を守る方法が多くあるが、自然保護し、実際に回復された例が少ない。現在モンゴルでは、鉱山開発により自然が多く破壊され、大きな問題になっている。政府は様々な法律を決定し、活動を行うものの、結果は良くない。そのような状況で、政府に依存せず、地方を自ら守る、バトノミン・スワラガ環境保護遊牧民組合のような活動を行うことで、結果がより早く伴うと思う。

地方の自然を守る活動は今の問題を解決する、良い将来を迎える、地方の自然を保護し、発展させる非常に大切な活動である。モンゴルの場合、地方に遊牧民が多いがバトノミン・スワラガ環境保護遊牧民組合と同じく、他にも自然を守る組合を設立し活動を行う可能性があると思う。そのため地元を愛する人々の心が非常に重要であるが、自然保護活動に必要なのは、地元愛の他に、地史や地元の文化などの知識である。

参考文献

“Газрын харилцаа” сэтгүүл 2011 5(17)

Ш.Нэргүйтэй хийсэн ярилцлага 2012-08-25

Ц.Мөнхбаясгалан “Байгаль орчны өнцгөөс орон нутгийн түүхийг эргэн харахуй” 2011
МУИС-НСА магистрын диплом

С.Ичинноров “Арвайхээрийн хошууны хураангуй түүх”, Арвайхээр 1997

(Амарбат・ソソルボラム)

私は2013年8月2日にモンゴルの地を再び踏んだ。これが4度目のモンゴル訪問であり、初の長期滞在である。現在、ウランバートルに暮らし、モンゴル国立大学の研究生である傍ら、大学生や社会人に対して日本語を教えている。

本稿では、モンゴル・ウランバートル在住の一日本人として、また本フィールドスタディの調査報告会、アンケート調査結果やネルグイ氏の紹介文、調査評価書の翻訳などに従事した一参加者として、フィールドスタディの主題である「開発と生存環境」について日蒙間の関係、ウランバートルでの生活体験などに触れつつ見解を述べ、最後にフィールドスタディをより良いプログラムにするための提案を行いたい。

草原・ゲル・相撲から鉱物資源へ

モンゴルは1990年代初頭、旧ソ連の傘下を離れ、民主主義体制に移行した。同時に、国民は国家の保障を失った。国際的競争時代の中で、他の誰でもない個人が人生を切り開いていかなければならなくなった。今から約20年前、激動の時代を経たモンゴルは今なお変動期にあり、国際社会の影響を強く受けながらも、外国に影響を与える国にもなりつつある。

では、モンゴルは日本に対し、どのような影響を与えているのだろうか。日本にとってモンゴルとはどんな国なのだろうか。ほとんど日本人にとって、モンゴルは未知の遊牧世界なのかもしれない。なぜなら、日本人が「モンゴル」と聞くと想像するのは草原、ゲル、相撲の3点セットが並ぶのがごく一般的だからである。だが、首都ウランバートル中心部では草原、ゲル、相撲とは無縁とも言えるような、大都会の風景に包まれた、住宅やアパートで、近代的生活を送る市民が少なくとも約40万人いる。(ちなみに、現在ウランバートルは約120~130万人の人口を抱えているが、そのうちの過半数はゲル住まいであり、住民登録に未登録の地方出身者もいると言われているため、居住形態ならびに人口に関する正確な数値は明でない。)

日本とモンゴルは1972年2月に国交を樹立後、40年以上の時を経ている。モンゴルの民主化、市場経済化以前は、日蒙間関係は技術、物資援助などに集中し、分野や支援事業にも偏りがあった。だがドイツやアメリカ、韓国を抜いて、日本はモンゴルにおける最大の経済援助国家であり続けているだけでなく、1990年代以降は特に、留学やビジネス、旅行など両国間のより人的交流が活発化している。尚、外務省の海外在留邦人数調査統計及び法務省の在留外国人統計⁽¹⁾によると、モンゴル在留邦人数は442人(2012年)、日本在留モンゴル人の総数5789人(2013年)であり、いずれも増加傾向にあるようだ。

もちろんモンゴルは草原、ゲル、相撲だけではない。最近は鉱物資源という答えも挙

げられるのではないだろうか。特にここ数年(2010年代以降)、日本ではモンゴルの地下資源に関するニュースや投資セミナー、視察などが増えているという。現地モンゴルにおいても、資源開発への外資による投資が急増している。同国では鉱山開発関連のニュースが連日マスメディアを賑わせ、モンゴル国民も様々な意味で関心を抱き、鉱山開発の未来^{ゆくえ}を注視していると思われる。

そして2度目のフィールドスタディがモンゴルで実施された2013年は、日蒙間の政府間協議と交流がさらに促進された重要な年のように思われる。2013年は3月に安倍首相のモンゴル訪問、9月のエルベグドルジ大統領及びアルタンホヤグ首相の日本訪問が行われ、両国政府は政治・安全保障、経済、文化・人的交流分野での関係強化やハイレベルな協議の維持、継続を相互確認している⁽²⁾。投資・経済関連では、2013年4月に第3回「日本モンゴル経済連携協定(EPA)」交渉会合をウランバートルで開催、同年5月には第6回目の「日本モンゴル貿易投資・鉱物資源官民合同協議会」が開催された。また同月、JETROはモンゴル商工会議所の協力を得、初の「ジャパン・ビジネス・フェア in モンゴル」が開催された。日蒙間の投資・経済関係は具体的な議論と実行に向け、着実に歩を進めている。

現在、モンゴル経済は鉱物資源の輸出に強く依存する構造となっており、モンゴルの急成長を牽引している。安倍首相は鉱物資源開発の日本企業参入に手を挙げたが、モンゴル側が賛同の意を表したのは当然のことのように思える。また、モンゴル政府はタワントルゴイ炭田開発事業実施に当たり、日本への長期及び安定的な石炭供給の意向も示しており、鉱物資源を巡る政府間協議が重要なスタートを切った。それが2013年だった。

モンゴル生活を通じて

私は同年の夏の終わり、ウランバートル市内の本屋でとても興味深い絵を発見した。モンゴルの月刊誌『Mongolian Mining Journal』2013年9月号の表紙である。次ページの資料を見て頂きたい。2012年、遊牧民がビジネスマンらに対し怒りを露わにし、彼らを追放した様子が描かれているが、翌年、遊牧民は民族衣装にネクタイを締め、札束袋を握るビジネスマンに向かって鉱山開発を歓迎している。

この表紙から様々な意味が読み取れるだろうが、私には遊牧世界における貨幣経済の浸透と、自然を神的に認識し、生きてゆくことの限界を象徴しているかのように見える。遊牧民にとって生存環境である草原を切り開き、資源採掘することは人間や家畜の生命危機、自然に対する罪と同然のように思える。一方現在、家畜だけでなく、(もしかするとそれ以上に)通貨、すなわち現金が食料やバイクの購入、電話料金や交通費の支払い、子供の教育費など生活や生存に欠かせない重要な財産となっている。実際、モンゴ

ル南部に位置する主要鉱床、オユートルゴイ（金と銅）及びタワントルゴイ（石炭）開発関係企業に勤める社員の月給は 3000 ドルだと今年（2013 年）に複数のモンゴル人から聞いたことがある。これは国家公務員や（国立病院の）医師の月給の 8 倍以上に相当している。現在のモンゴルの経済不安や価格高騰など畏怖することなく生活出来るぐらいの額である。多くのモンゴル人が羨望と同時に、貧富の格差を痛感するのも頷ける。遊牧民が鉱山開発関係者と手を結ぶことは「豊かな生活」を得るチャンスの切符かもしれない。そのときに石炭、金、銅などの鉱物資源は国際市場経済と完全に切り離すことはできず、不安定要素を含むことを理解しなければならないことは言うまでもない。



だが、モンゴルでは風光明媚な大自然を謳った民謡は今でも国民に愛され続けているとともに、山、川、火、土などあらゆる自然には神が宿ると信じられており、神を崇拝したり、祈る文化が生きている。ここに自然崇拝の文化、慣習はモンゴル人の心の奥底

に生き続けていることを伺わせるような事例をいくつか紹介したい。

特にツァエニーデージュールグホ（あるいはスーニーデージュールグホ）がそうである。ツァエニーは「お茶の」、スーニーは「ミルクの」を意味し、デージとは「誰も飲んでいない、手をつけていない上部」、ウルグホは「持ち上げる、差し上げる」ということを示す。沸かし立てのスーテツァエ（モンゴルのミルクティー）の上部をすくい取り、ある対象に向けて撒く、モンゴルの文化的慣習のことである。ある対象というのは神や太陽、星、故郷、家族や子供、ある特定の人物など様々であり、これらへの信念や感謝、祈りや思い、愛情などを示す行為のことである。私はアパートの駐車場や路上で、椀からミルクを掬い取り、撒く人々の姿を何度も見たことがある。本書に登場する環境保護組合の組合長、ネルグイ氏も毎朝欠かさずにツァエニーデージュールグホを行うと聞いた。

また、ツァエニーデージュールグホではないが、私は「山や故郷に向かって毎日祈り、家族や故郷を想う習慣を身につけてください」と言われたことがある。2013年12月、とあるゲル地区で私の家族との関係を占った際の、シャーマンから私への家族関係を良くするためのアドバイスである。

私のモンゴル人の知人（20代半ば、女性）が次のようなことを話していたことも印象的であった。以下は彼女の言葉である。

「ここ最近、トーラ川（ウランバートルを流れる川）で洗車している人を見かけます。洗剤を川に流し、川を汚しています。地方では鉱山開発のために土を掘ります。でも、掘った土はもとに戻しません。こんな人たちが増えているから、モンゴルでは今いろいろな問題が起こっているのだと思います。貧困もそうですが、人間の行動、例えば暴力や飲酒問題などを抱えた人が増えて、夫婦、親子、家族や友人関係は崩壊しています。これはモンゴル人が自然を大切にしなくなったから、神様が怒って人間に罰を与えて、悪い現象を起こしているんです。」

現実には「開発と生存環境」の前者である「開発」に重点が置かれている向きがあるが、モンゴルで歴史的、伝統的に継承されてきた文化や信仰、人々の精神こそ、モンゴルの「開発と生存環境」を左右する重要なファクターであり、失われてはならないもののように思う。一方、近年の急速に高まるモンゴルの地下資源に対する国内及び外国の関心は、国家戦略やビジネスチャンス、利益など、人間の果てしない欲望が根底にあると思われる。

鉱山開発に伴うモンゴルのあらゆる問題は、モンゴル一国の課題として捉えるべきではない。グローバル化時代において地域の問題はますます地球規模の課題として、私たち一人ひとりに可視化されない状態で複雑かつ密接に絡んでおり、民族や国籍などの壁を越え、共同で改善・解決することがますます求められている。今回のフィールドスタディでは、学生たちが日本からモンゴルの地に降り立ち、一定期間滞在しながら鉱山開発現場を観察し、遊牧民やニンジャ、環境保護組合長から話を伺っている。学生たちは「開発と生存環境」という切り口で、環境問題における自分の位置を知り、専門を活か

して懸命に解決策を模索したと拝察される。

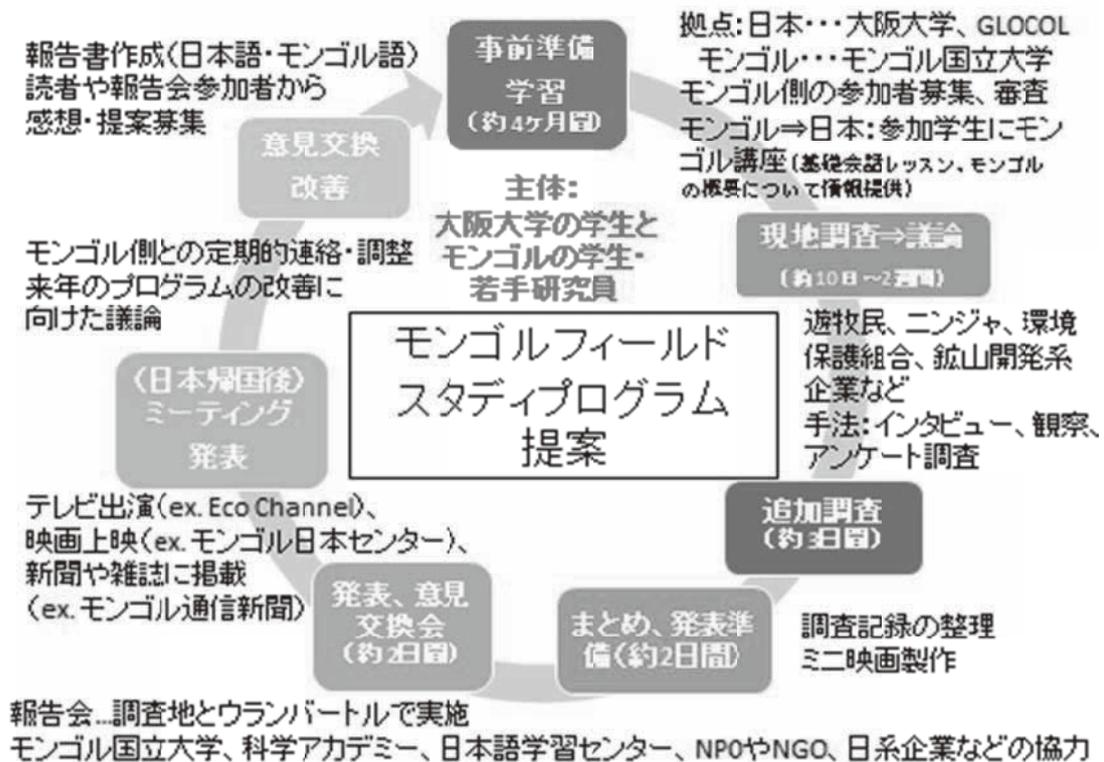
残念ながら、わたしはオブルハンガイアイマグまで調査に同行できなかったが、モンゴルの「開発と生存環境」と自分がどのような関係があるのか、そして何をすべき（何ができる）のか考えた。日本は地下資源のほとんどを海外輸入に依存しており、現在の豊かな生活維持のためには、今後も依存し続けなければならないだろう。将来的に、モンゴルで鉱物資源開発の日本企業参入が促進され、もし不適切な開発がなされ、そこで採掘された資源を利用すれば、日本はモンゴル生存環境の「破壊者」となり得る。

国境、すなわち他国という認識は、無意識のうちに無関係や無関心を生む怖れがある。国境は人間が地球上に描いた線である。しかし、国境をまたぎ、人々が出会い、交流し、共に行動するとき、そこに線引きはいらない。私の現在の立場を考慮すれば、モンゴルにおける調査研究や日本語教育などを通じ、周囲の身近な人々から、例えば大学の先生や調査協力者、日本語教室の生徒などと共に様々な課題や問題を共有し、相互理解や解決に努めつつ心の中に国境線を引かないことは出来る。またそうすべきであると真摯に思う。

これからのモンゴルフールドスタディ（提案）

本フィールドスタディはモンゴルの大学や大学院では珍しい学習の形態をとっている。確かに、小学校から大学教育機関や学習センターなどで諸外国との相互交流は行われているが、ある一定期間寝食を共にし、調査研究活動に取り組み、それぞれの関心や専門領域から同じテーマを考察し、発表や報告を行うというプログラムはほとんどないと思われる。2012年のフィールドスタディに参加したソソルは日本人学生とのフィールドスタディは刺激に富んでおり、彼らから学ぶことも多く、とても実り多き調査研究だったと話している。今後も事前準備の段階でモンゴルからフィールドスタディ参加者を積極的に募り、モンゴル側と連絡を密にし、調査準備を万端にしておきたい。

しかし改善しなければならない課題もある。本稿では、主に調査手法、期間、成果報告、連携・協力の4点について課題や改善点について意見を述べる。なお、フィールドスタディプログラムの事前準備、学習から帰国後の改善までの全体案は以下のパワーポイント資料にまとめた。



パワーポイント資料

モンゴリアールドスタディプログラム改善に向けた提案

まず調査手法についてであるが、今回の調査ではアンケートも実施したが、モンゴルではアンケート記入に不慣れな人が少なくなく、回答は内容も量的にも不十分だったのは否めない。モンゴルと日本の状況は異なることに十二分に留意し、アンケート調査結果を参与観察やインタビュー結果と照合する必要がある。

また調査期間が1週間であり、プログラムのスケジュールや学生たちの話に基づく限り、非常に多忙だったと察せられる。今後、当然ながら予算、費用の問題もあるが、プログラム期間を多少長く設定し(約10日～2週間)、補助調査、議論やまとめ、発表準備に集中するための時間を確保するのはどうだろうか。

フィールドスタディは8月に実施され、気候的に調査に相応しい環境だったが、モンゴルの夏季休暇にあたるため、交通費や宿泊費が通常よりも高くなってしまい、経済的負担を伴ったと思われる。また参加学生たちが睡眠時間を削り、丁寧に仕上げた発表であったが、報告会の参加者が少なかったのは非常に心残りである。私はモンゴル人の友人、知人に参加を呼び掛けたが、休暇中もしくは勤務時間帯であるため参加を強く希望していたが最終的に都合がつかず、欠席の場合がほとんどだった。可能であれば調査時期を変更する、成果報告を複数回(曜日や時間帯をずらすなどして)実施する、日本モ

ンゴルセンター（日蒙間の交流促進と人材育成を目的に、2002年ウランバートル中心部に日本のODAが設立。）など学生以外の一般人や在留邦人も気軽に立ち寄れる会場を利用すれば良いだろう。加えてテレビ放送や新聞、雑誌掲載など他の成果報告手段も考えられる。

さらにモンゴル国立大学や、モンゴル科学アカデミーに研究部を設置し、夏の短期調査以降も、連携協力関係を構築・維持し、意見交換や共有の時間と場を設けたり、在モンゴル日本企業関係者、モンゴルを拠点に活動を行うNGOやNPO団体などのバックアップがあればフィールドスタディはより充実したものになるだろう。私は大阪大学、GLOCOL、モンゴル国立大学、ネルグイ氏の環境保護組合と、今後も継続して何らかの形で、モンゴルフィールドスタディに参加・協力してゆきたいと考えている。

「この世にあるものはすべて無常であり、永遠なのは『人間の記憶』である」

これはチンギス・ハーンの後継者であるモンゴル帝国第2代皇帝、オゴタイ・ハーンという言葉である。フィールドスタディで得られた様々な知識や情報は「人間の記憶」であり、その記憶を綴ったものが本書である。本書では大阪大学の学生や教員など日本側だけでなく、モンゴル側にとっても非常に有益だと考える。たとえ短期間かつ、学生たちにとっては1度限りの調査であっても、新鮮な眼差しで観察し、発見したモンゴルの今は、モンゴルの人々にとっても新鮮であり、多くの示唆に富んでいることだろう。

（岸本 紗也加）

注

- (1) 外務省「海外在留邦人数調査統計」<http://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/tokei/hojin/>
法務省「在留外国人統計」
http://www.moj.go.jp/housei/toukei/toukei_ichiran_touroku.htmlを参照した。
- (2) 外務省 <http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/mongolia/index.html> を参照した。

資料1 プログラム概要 (2012年と2013年)

	2012年		2013年	
	日にち	内容	日にち	内容
1日目	8月21日	ウランバートル到着。	8月4日	ウランバートル到着。 ホテル周辺の町並みを観察。
2日目	8月22日	オブルハンガイ県チャガンボルガンへ移動。	8月5日	オブルハンガイ県チャガンボルガンへ移動。 夕食後、ネルグイ氏レクチャー。ここ50年の環境の変化について。
3日目	8月23日	ネルグイ氏レクチャー。地域の歴史、自然保護、組合活動などについて。 遊牧民宅訪問。ゲルの解体の様子を見学。	8月6日	オインクへ移動。鉱山開発現場を見学。 ニンジャへのインタビューに成功。経済的状況などについて尋ねる。 保護に成功した地域を見学。 ネルグイ氏から干し肉について話を聞く。
4日目	8月24日	オインクへ移動。鉱山開発現場を見学。現地で、ニンジャへのインタビューに成功。なぜニンジャになったのかなどの経緯について尋ねる。	8月7日	近代社会の外部性などについてディスカッション。 遊牧民宅を訪問し、10代の少年に将来の進路などについてインタビュー。
5日目	8月25日	学習の振り返り。 アルバイヘルにて市場、寺院を見学。偶然、祭りを見ることができた。 夕食後、ディスカッション。	8月8日	アルバイヘルの市場等見学。計画的な街の設計はなされていないが、上手く機能していることを観察。 ラマ高僧へのインタビュー。宗教の復活、2009年のゾドについて聞き取り。
6日目	8月26日	遊牧民宅を訪問。カシミヤや家畜などについて、インタビュー調査。ホーショールをふるまっていた。	8月9日	思沁夫レクチャー。 ラマ高僧へのインタビュー。現在の宗教事情、社会主義時代の信仰の維持などについて聞き取り。
7日目	8月27日	寺院にてラマ高僧へのインタビュー。アルバイヘルの歴史について尋ねる。 幼稚園訪問。交流する。 ゲルでの宿泊を体験。	8月10日	アルバイヘルにて市民宅訪問。うどん等をふるまっていた。 博物館訪問。考古資料などを見学。 ラマ高僧へのインタビュー。僧侶になった経緯、昔の遊牧生活などについて聞き取り。
8日目	8月28日	植樹。 プレゼン準備。 感謝の食事会。	8月11日	プレゼン準備。 絵地図作成。 感謝の食事会。
9日目	8月29日	ウランバートルへ移動。	8月12日	ウランバートルへ移動。
10日目	8月30日	モンゴル国立科学大学にて学生プレゼンテーション。 日本・モンゴル学生間のディスカッション。 情報交換会。	8月13日	モンゴル国立科学大学にてレクチャー。 学生プレゼンテーション。 情報交換会。
11日目	8月31日	帰国。	8月14日	帰国。

資料2 ネルグイ氏の紹介

① ションホル・ネルグイ氏の略歴

ションホル・ネルグイ氏（以下、ネルグイ氏）はツァガンボルガソントホエに暮らし、オブルハンガイアイマグ・ズーンバヤンウランソムの自然保護遊牧民組合「バトノミン・スワラガ」の組合長です。2000年の定年退職以降、ネルグイ氏は自然保護活動を続けています。

ネルグイ氏は1939年夏、アルバイヘルソムのイヒボラグで生まれました。ネルグイ氏の両親はツァガンボルガソントホエ周辺で暮らしていましたが、そこから約5km離れたイヒボラグに移動したちょうどその日、ネルグイ氏が誕生したと言われています。

ネルグイ氏は1961年、モンゴル国立農牧業大学獣医学学科を卒業しています。大学教員、科学者でもあり、オブルハンガイアイマグの行政機関や農牧業管理局などの監督者でもありました。

② ネルグイ氏の地元に対する愛と理解

オブルハンガイアイマグ中心部から北に約30km、そこには優美な自然が広がる、ツァガンボルガソントホエがあります。東西南北は山で囲まれ、オンギ川周辺はモンゴルで唯一この地に存在する珍種の「カスピーの白い柳」で覆われています。

この地には第3ダライラマ、ソドソム・ジャンツ訪問の伝説が残り、19世紀の偉大なるSh. ツェウエルワンチグドルジ活仏が瞑想したという言い伝えもあります。モンゴルには約80以上の活仏が誕生したと言われますが、Sh. ツェウエルワンチグドルジは他の誰にも勝る活仏だと考えられています。彼が150か条、計15冊に及ぶ仏典執筆に専念した場所、それがこのツァガンボルガソントホエだと言われています。

この地には、はるか何千年以上も昔に建てられた墓石が多く存在しています。また、家畜や人間を模した絵が石に描かれた遺産も残されていますが、自然や歴史が素晴らしいだけではありません。ここは神聖地でもあります。かつて、地域の人々は信仰心が篤く、自然の神々を信じていました。モンゴルの伝統的宗教、シャーマニズムにおいても自然保護に対する信仰は篤いです。チンギスハーン時代は自然保護のためのあらゆる法律が制定されており、自然破壊につながる行為は固く禁じられていました。特に山の神（サウダグ）、川の神（ロース）の存在が強いと信じられてきたため、ツァガンボルガソントホエの土地採掘、木の伐採、川で洗濯などの行為は厳格に禁じられており、地面の落ち木さえも使用しないという習慣がありました。モンゴルではこのように伝統的に自然を守るための法則や習慣が数多く存在していました。だからこそ、モンゴルの大自然は変わらずにこれまで生きてきたのです。

ネルグイ氏もこのように自然を守り続けたモンゴル人の思想や価値観、伝統的信仰や法を信じ続けています。次のような言い伝えもです。「ツァガンボルガソントホエで刈り取った柳を料理や暖房に使用し、火事を起こせば、家畜がすぐになくなる、狼が家畜を食べてしまう、あるいは火事を起こした当本人が交通事故に遭う」

ネルグイ氏は毎朝沸かしたてのミルクティーを屋外で撒きます。自然に神が宿ると固く信じており、神への崇拝や感謝の念を表すためです。

しかし、人々の信仰心はどこへ消えたのでしょうか。現在、ツァガンボルガソントホエの柳林は失われてゆき、消滅の危機に立たされています。世界的な気候変動のほか、人口増加、自然に対する人間の不善な行為が主な要因として考えられますが、とりわけ1990年代初頭の民主化以降、自然は信仰の対象ではなく、保護の対象として捉えられるようになったことが一つの大きな原因ではないかと思われま

③ 自然保護遊牧民組合「バトノミン・スワラガ」

ツァガンボルガソントホエには社会主義時代、オブルハンガイアイマグ管理局経営の夏キャンプ地（休養地）がありました。しかし民主化後は人々の姿はなくなり、施設だけが残されました。誰も来なくなったのです。そこで、家畜が自由にやって来て柳を食べたり、人間が暖を取るため好き勝手に柳を刈取ったり、ごみ捨て場にしたりした結果、ツァガンボルガソントホエの自然環境は悪化していきました。その時、ネルグイ氏は考えていました。「ツァガンボルガソを守らなければならない。」

2001年、ネルグイ氏はツァガンボルガソントホエを回復させるため、オブルハンガイアイマグの行政機関と協議を始めました。ネルグイ氏はツァガンボルガソの自然破壊を指摘し、ツァガンボルガソ賃貸契約（2060年まで有効）を交わすと、5ヘクタール、周辺地域を合わせると合計25ヘクタールの所有が認められました。

2007年12月になると、ネルグイ氏は自然保護遊牧民組合「バトノミン・スワラガ」を設立し、ツァガンボルガソントホエの自然回復に向けた第一歩を踏み出しました。地域の遊牧民との共同作業の必要性を感じていましたし、世界自然保護基金WWFやオランダ政府信用基金「自然環境2プロジェクト」助成金申請のため、組合結成を決意したのです。

近年、モンゴルでは自然破壊が深刻化しています。ツァガンボルガソントホエも例外ではありません。面積は限られていますが、自然がありのままであり続けるためには、人々は保護活動に従事する必要があります。

「あなたが自然に与えたものは、自然があなたに与えるもの」これが「バトノミン・スワラガ」組合のスローガンです。現在、ネルグイ氏のほかツァガンボルガソントホエ周辺に暮らす約10名の遊牧民、ネルグイ氏の妻S.ドルジンスレン、息子であるN.バトバヤル、彼の妻A.ウネルデルゲルらと共に保護活動を展開しています。

組合の成果

2001年の自然保護活動開始、2007年の組合設立以降、短期及び長期的目標を設定、実行し、少しずつ成功を収めています。財団に見事採用された結果、2008年は総額2000万トゥグルグ（約125万円に相当する）規模のプロジェクトを実施することもできました。現在、柳林はもとの姿に戻りつつあるだけではありません。いくつかの成果が確認されています。

- ・ ツァガンボルガソントホエ全体の約50%を柵で囲むことで、ボルガソの保護だけでなく、生育も可能になりました。一年を通し、監視人を配置しており、ツァガンボルガソントホエへの人間や動物の侵入を防ぐことができます。
- ・ 柳の植林、ウヘレーンヌデ（黒ぶどう）とツァツツアルガン（モンゴルの果物）の種付け、じゃがいもなどの野菜栽培も始めています。これは、肉や乳製品中心の食事を取る遊牧民にとって栄養源になるほか、作物を購入するのではなく、自分の手で育てることで生活支援につながっています。
- ・ 秋になれば、組合員が集まり、保護地域内の草を刈取ります。ツァガンボルガソントホエは保護地区であるため、家畜が入らぬよう柵で囲んでいます。そのため、草は自由に伸び、高く成長します。この伸びた草を収穫し、冬の家畜用飼料に保存します。これで家畜たちはモンゴルの厳寒を乗り越えることができるようになりました。
- ・ 組合は小・中・高校生向けに環境教育を行っています。どのように自然を守るのなど、生徒たちが自然保護に関する知識を獲得、理解した結果、彼らの行動が変わったと言われています。現在、生徒たちは植林のボランティア活動に積極的に参加するようになりました。

組合の課題

もちろん組合は課題に直面しています。

近年、モンゴル社会では個人や外国企業による鉱物資源採取に伴う環境破壊が著しく進行しています。特に自然との共生なしに生きてゆけない遊牧民たちは危機的状況に立たされています。環境破壊活動の深刻化を防ぎ、失われた自然を蘇らせるためには、遊牧民同士の結束と協力は不可欠となっています。

しかし彼らは四季を通じて多忙であるため、共同作業や活動が困難です。遊牧民は家畜を連れて移動しますから、組合員が一箇所に集まり、活動するのは容易ではありません。しかし、自然保護活動を個人で行うこともまた非常に難しいのです。

モンゴル政府や地方の行政機関からの支援がありません。この条件下で、わたしたち個人が自然保護を進めるのは非常に難しいです。ツァガンボルガソントホエの自然保護のためには外国からの支援と相互協力なしに考えられません。

財団の支援金は自然保護に活用されます。組合員の給与にはならず、組合員の経済的生活支援にはいたっていません。

モンゴルにおける組合の重要性

現在、組合はボルガソの栽培用地と自然公園の設立、自然が最も美しく、保護されたエコツーリストキャンプ地の一つのモデルとなることを目標に掲げています。

組合は地元の遊牧民や住民、若者だけでなく、外国の大学や観光客との交流活動を積極的に行っています。これは、モンゴルの地域に根差した持続的な自然保護活動、現地住民の生活保護、人材育成、観光事業などの促進に寄与します。

2012年より、大阪大学グローバルコラボレーションセンターの思沁夫教授が組合の自然保護活動を支持しています。思沁夫教授は毎年8月、大阪大学の教員や大学院生と共に組合を訪れ、自然保護活動を見学しています。そこで彼らは経済的支援ではなく、活動改善に向けた提案を示しています。

この共同研究活動は初めの一步を踏み出したばかりです。今後も交流活動を継続的に行えば、より良い結果に結びつくことが期待されます。組合は大阪大学と協力関係を維持、促進し、自然保護活動を効果的に行えば、モンゴルにおける自然保護の一つのモデルになるだけでなく、世界においても自然保護の興味深い事例になるでしょう。

БАТНОМИН СУВАРГА НӨХӨРЛӨЛ

2013.08.12

№ 08

Арвайхээр сум

ОСАКА ИХ СУРГУУЛИЙН ЗАХИРГААНД

Дадлагын ажлын тухай

Осака их сургуулийн профессор, сурагчдын бага 2013 оны 08 сарын 05-наас мөн сарын 12-ныг хүртэлх хугацаанд өөрсдийн тодорхой хөтөлбөрийн дагуу Монгол Улсын Өвөрхангай аймгийн Зүүнбаян улаан, Уянга, Тарагт, Арвайхээр сумдад ажиллав. Тус баг Зүүнбаян-Улаан сумын Цагаан бургасан тохой хэмээх домог түүхт, байгалийн нэн үзэсгэлэнт газар Бат номин суварга хэмээх байгаль хамгаалах малчны нөхөрлөлийг түшиглэн хичээл сургалтаа явуулав.

Сургалт нь байгаль хамгаалах талаар бидний хийж байгаа ажилтай танилцах, харилцан ярилцах, зөвлөх чиглэлээр явагдсаны дээр Уянга суманд алт ухаж байгаль орчинд ноцтой муу нөлөө үзүүлснийг үзэж танилцах зэргээр ажилласан нь цаашид бидний зүгээс байгаль орчноо хамгаалахад санаа оноо болохоор бодит тодорхой сургалт болов.

Олон арван малчидтай ярилцаж, тэднээс нүүдэлчин Монголчуудын мал маллагааны байдал, малчид-байгаль орчны шүтэлцээ, малчдын өөрсдийн нь ажил амьдрал, санаа бодолтой холбогдолтой сонирхолтой судалгаа хийсэн нь тэдний сонирхолыг татаад зогсохгүй ер нь Монгол улсын мал аж ахуйг хөгжүүлэх, малчдын үйл ажиллагааг дэмжиж, тэдний амьдралыг сайжруулахад тус дэм болохоор сонирхолтой судалгаа болов. Ер нь Осака их сургуулийн профессор сурагчдын багийн өнгөсөн болоод өнөө жилийн сургалт дадлагын ажиллагаа нь аймаг, сумын удирдах байгууллагуудаас байгаль орчноо хамгаалах, мал аж ахуйгаа хөтлөн хөгжүүлэх, малчдын амьжиргааг дээшлүүлэхэд ач тусаа үзүүлэх сайн үйлс болж байгааг малчдаас эхлээд аймаг сумын удирдлыгуудын талархалыг ихээхэн хүлээж байна.

Бид иймэрхүү сургалтыг цаашид жил бүр зохион байгуулж дээрх чиглэлүүдээр бодит тодорхой ажлыг хийгээсэй гэж хүсч байна. Профессор сурагчдын баг нь маш шахуу хөтөлбөрийнхөө дагуу бараг 2 нарны хооронд эмх цэгц зохион байгуулалт өндөртэй явагдаж байгаа нь бидний бахархалыг төрүүлж бидэнд ихээхэн үлгэр дуурайл болж байна. Та бүхэнд баярлалаа.



БАТНОМИН СУВАРГА НӨХӨРЛӨЛИЙН АХЛАГЧ

Ш. НЭРГҮЙ

Ш. НЭРГҮЙ

平成 25 年度海外フィールドスタディ モンゴル 調査評価 訳 (概要)

2013 年 8 月 5 日～12 日、大阪大学グローバルコラボレーションセンターの教員や阪大大学院の学生たちが、自然保護遊牧民組合「バトノミン・スワラガ」を拠点に、オブルハンガイアイマグのズーンバインウランソム、オヤンガソム、タラグトソム、アルバイヘルソムでフィールドスタディを予定通り行いました。

フィールドスタディ期間中、私は組合の自然保護活動を紹介し、大阪大学と組合側が相互にアドバイスしたり、話し合いをしました。また、大阪大学のグループはオヤンガソムの砂金の採掘現場を調査し、自然の破壊行為の背景を理解し、現状を見ました。将来的に私たち組合にとって、自然保護に向けた貴重な意見や助言を得た、具体的で有益なフィールドスタディでした。

遊牧民らの家畜飼育の現状、遊牧民と自然の因果関係や、彼らの日常生活や考えに関する興味深いインタビュー調査も行っていました。遊牧民らは快く調査を引き受け、面白く、良い調査だと感じていました。モンゴルの牧畜業発展のため、遊牧民の生活改善につながる興味深い調査でした。今年のフィールドスタディと同様、遊牧民たちだけではなく、オブルハンガイアイマグや各ソムの管理機関指導部などからは、自然保護、牧畜業の発展、遊牧民らの生活改善のために貢献した、有益な活動になったと感謝の意が述べられ、非常に歓迎していました。

このようなプログラムを今後も継続してゆきたいです。非常に多忙なスケジュールにも関わらず、皆さんは計画通りに早朝から夜遅くまで調査活動していました。私たちが学ぶべきことがあり、また誇りに思います。大阪大学の教員、そして学生の皆様ありがとうございました。

自然保護遊牧民組合「バトノミン・スワラガ」
組合長 ネルグイ

資料4 アンケート調査質問票

大阪大学 GLOCOL field study

A. 遊牧地域 Хээрийн судалгааны ажил

【回答者情報】 Оролцогчийн талаарх ерөнхий мэдээлэл

Таны нэр: 名前: _____ Нас: _____ Хүйс: эр・

эм

Ажлын газар 所属:

Гэрийн хаяг 住所:

Утасны дугаар: 電話番号:

Мэргэжил 仕事:

Сарын орлого 主な収入源:

Гэр бүлийн гишүүдийн тоо 家族構成:

Асуулт 1 問 1:

i. Хариулж байгаа малын нэр болон тоог бичнэ үү. Үүнд: 家族が所有する家畜の種類別 (山羊、羊、馬等) の頭数を教えて下さい:

- ① хонь ヒツジ
- ② ямаа ヤギ
- ③ үхэр (сарлаг) ウシ(ヤクを含む)
- ④ адуу ウマ
- ⑤ тэмээ ラクダ

ii. Та хэр олон удаа нүүдэл хийдэг вэ? 貴方の遊牧地、移動回数などを教えて下さい

- ① Нүүдэл хийдэг нутгийн нэр 地域名:
- ② 1 жилд нүүх тоо 2 удаа 3 удаа 4 удаа 5 эсвэл 5 аас дээш удаа 1年のうち移動する回数: 2回 3回 4回 5回及び5回以上
- ③ Та ямар сууцанд амьдардаг вэ? Монгол гэрт үү эсвэл байшинд уу? 居住形態(○で囲んでください): ゲルのみ ゲルと非移動式家 非移動式家の

iii. Та ямар мал дагнан хариулдаг вэ яагаад энэ малыг голлож хариулдаг вэ? どの種類の家畜を中心に遊牧していますか? またその理由はなぜですか?

хонь 羊 ямаа 山羊 адуу 馬 бусад мал その他 遊牧していない

мал хариулдаггүй その理由・

Асуулт 2 問 2:

i. Та малаа морь, машин эсвэл өөр юугаар хариулдаг вэ? あなたはどちらで遊牧しますか(複数可 ○で囲んでください)。 馬 バイク その他()

ii. Таны хувьд таны хариулж байгаа мал доорх хариултуудын алинд нь тохирох вэ? :

- ① эд хөрөнгө
- ② мөнгө олох эх үүсвэр
- ③ малаа гэр бүлийн гишүүн шиг бодож хайрлаж хариулдаг
- ④ мал хариулах нь монгол уламжлал соёл
- ⑤ Өөр сонголт байвал бичнэ үү.

あなたにとり家畜は何を意味しますか(複数可 ○で囲んでください)。 財産 現金を得る手段
家族 伝統文化を守るため その他 ()

Асуулт 3 問 3 :

Та малаа төхөөрч чадах уу

- ① Чадна
- ② Чадна гэвч их дургүй あなたは家畜を屠畜できますか(当てはまるものに○を付けてください)。
- ③ Чадахгүй 屠畜できる 屠畜出来るがしたくない 屠畜できない

Асуулт 4 問 4 :

Та малаа нэрлэж чадах уу?

- ① Чадна
- ② Чадахгүй あなたは家畜の年齢ごとの呼び名を知っていますか(該当するものに○をつけてください)

知っている どちらとも言えない 知らない

ii. Чадна гэж хариулсан бол доорх асуултанд хариулна уу. 4 нас хүртэлх ямааны нэрийг хэлнэ үү. 知っていると答えた人は、0歳から5歳までのヤギの名前を記載してください。

- ① төл ямааны нэр 0 歳 :
- ② нэг настай ямааны нэр 1 歳 :
- ③ хоёр настай ямааны нэр 2 歳 :
- ④ гурван настай ямааны нэр 3 歳 :
- ⑤ дөрвөн настай ямааны нэр 4 歳 :

iii. Ямааг хэдэн настайд нь хөнгөлдөг вэ ヤギは何歳のときに去勢しますか。

.

- ① Уух ус
- ② Рашаан булаг
- ③ Зусахад хэрэгтэй газар
- ④ Эх орны нэг хэсэг
- ⑤ Үндэсний үзэмж あなたにとって川とは何ですか(複数可。該当するものに○をしてください)。

水 水源 夏のキャンプ地 地域の守り神 伝統的景観

Асуулт 9 問 9 :

Таны хувьд бэлчээр дараах хариултуудын алинд нь хамаарах вэ?

- ① Малын идэх өвс ногоо бүхий газар
- ② Эх нутаг
- ③ Малчны амьжиргааны эх үүсвэр
- ④ Үндэсний үзэмж あなたにとって牧草地とは何ですか? 該当するものに○をしてください。

家畜のえさ場 地域の守り神 伝統的景観 生活そのもの

Асуулт 10 問 10 :

Та алт ухаж үзсэн үү. Үзсэн бол яагаад алт ухсан бэ?

ニンジャとして金を掘ったことはありますか? ある場合はそのきっかけを教えてください
 無い ある (その理由は、)

Асуулт 11 問 11 :

Уул уурхай алт олборлож байгаа явдлыг юу гэж бодож байна вэ?

- ① Сайн үйл ажиллагаа
- ② Муу үйл ажиллагаа
- ③ Байгаль орчныг сүйтгэж байгаа үйл ажиллагаа
- ④ Хуулиар хариуцлага хүлээх ёстой үйл ажиллагаа
- ⑤ Хэрвээ өөр хариулт байвал бичнэ үү. 鉱山開発についてどう思いますか。

良いこと あまり良くない 自然を破壊している 禁止すべきこと その他()

② Байна

③ Бараг байхгүй

Монгол дахь ядуу баяны ялгааны талаар та ямар бодолтой байдаг вэ?

i . Монголには貧富の差はありますか

貧富の差が大きい ある あまりない 全然ない

ii . なぜあると思いますか

.

.

Асуулт 問 21 :

Та ямар намыг дэмждэг вэ? 支持する政党とその理由を教えてください。

.

.

・回答ありがとうございました

回答いただいた内容は、調査に活用させていただきます

Санал асуулгад оролцсон явдалд их баярлалаа

Хотод ирж сууя гэж бодож байна уу?

1. Хотод удаан сууна гэж бодохгүй байна
2. Хотод сууршина гэж бодож байна Энэ асуултанд хариулсан хүн 3-2т хариулна уу.都市に移住したい”
3. Хотод сууршина гэж бодохгүй байна хааяа л ирж байна гэж боддог.ですか。
 - i .移住したくない
 - ii .移住したい →問 3-2 へ
 - iii .完全には移住したくない →問 3-3 へ

Асуулт 3-2 問 3-2:

Таны хотод суурших хүсэл ямар үндэслэлтэй вэ?

- i. Хүүхдээ сургуульд өгөхийн төлөө
- ii. Ажил олохын төлөө
- iii. Амьдралд таатай учраас
- iv. Зуданд малаа алдаад хотод амьдрахын тулд
- v. Хүүхэд садан төрөл хотод байгаа учраас

Өөр шалтгаан байвал бичнэ үү.

なぜ都市に移住したいですか(その理由を教えてください)。

- i .子供の教育のため
- ii .仕事を見つけるため
- iii .生活が便利だから
- iv .自然災害で、家畜を失ったため
- v .親戚が都市に住んでいるから
- vi .その他 ※移住したい理由を書いてください。

Асуулт 3-3 問 3-3 :

Та яагаад хотод суурших хүсэлгүй байна вэ?なぜ完全には都市に移住したくないですか、その理由を教えてください。

.

Асуулт 問 4 :

Улаанбаатар болон Арвайхээрт сайжруулмаар байгаа ямар зүйл байна вэ? 都市(ウランバートル、あるいはアルバイヘル) の問題点や改善したいところを教えてください。

.

.

Асуулт 問 5 :

ii .集合住宅

iii .戸

Асуулт 9 問 9 :

i. Хөдөө болон хотын алинд амьдрах дуртай вэ?

ii. Хөдөө

iii. Хот

遊牧地と都市とではどちらのほうが住み心地が良いと思いますか。

i .遊牧地の方

ii .都市の方

Асуулт 10 問 10 :

Танай хүүхдүүд ирээдүйд ямар ажилтай болоосой гэж хүсч байна вэ?

i. Малчин

ii. Төрийн албан хаагч

iii. Гадаад улсад ажиллах

iv. Өөр сонголт байвал бичнэ үү.

あなたは子供を以下のどの職業に着けたいですか

遊牧民 公務員 海外留学 その他（具体的に記載してください）

Асуулт 11 問 11:

Та бөх барилдах дуртай юу

i. Дуртай байдаг

ii. Бага сонирхдог

iii. Тийм ч дуртай биш **あなたはモンゴル相撲が得意ですか。該当する物に○をつけてください**

得意だ ある程度得意だ どちらとも言えない あまり得意でない 得意でない

Асуулт 12 問 12 :

Та монгол болон өөр үндэстний хоолны алинд нь дуртай вэ? **モンゴルの伝統料理と外来料理のどちらを好みますか**

.

Асуулт 13 問 13 :

Долоо хоногт хэдэн удаа өөр үндэстний хоол иддэг вэ? Өөр үндэстний хоол идэхдээ ямар хоол иддэг вэ?

i .週何回外食しますか。

ii. 外食で何を主に食べますか。

.

Асуулт 14 問 14 :

Уух дургай ундаагаа нэрлэнэ үү

- i. Виски
- ii. Шар айраг
- iii. Кока кола
- iv. Сүүтэй цай
- v. Бусад

あなたは飲み物の中で何が一番好きですか

ウイスキー ビール コカコーラ ミルクティー その他()

Асуулт 15 問 15 :

Амралт чөлөөт цагаараа ихэвчлэн хийдэг 3 зүйлийг бичнэ үү.あなたは仕事がない時、何を
して過ごしていますか。3つ上げてください

.

Асуулт 16 問 16 :

Таны саналаар монголд алийг нь хөгжүүлэх нь хамгийн чухал вэ?

- i. Үзэсгэлэнт од тэнгэр あなたが考えるモンゴルにとって最も重要なものとはなんで
すか？
- ii. Уул хайрхан гол горхи
- iii. Байгалын баялаг
- iv. Үндэсний түүх соёл きれいな星空 山や川 豊富な地下資源
伝統的文化

Асуулт 17 問 17 :

Монгол улсыг америк болон япон шиг өндөр хөгжилтэй улс болоосой гэж хүсч байна уу?

Тийм болон

үгүй гэж хариулсан бол яагаад тэгж хариулсан тухайгаа бичнэ үү.

モンゴルが今後、アメリカや日本の様に経済発展していくことを望みますか？その理由は
なぜですか？

希望する 希望しない

理由：

- ・
- ・

Асуулт 18 問 18：

Монголд ядуу баяны ялгаа их байна уу

- i. Их байна
- ii. Байна
- iii. Бараг байхгүй

Монгол дахь ядуу баяны ялгааны талаар та ямар бодолтой байдаг вэ?

- i .モンゴルには貧富の差はありますか
貧富の差が大きい ある あまりない 全然ない
- ii . なぜあると思いますか
- ・
- ・

問 19：

Та ямар намыг дэмждэг вэ? 支持する政党とその理由を教えてください。

- ・
- ・
- ・
- ・

問 20: Монгол улсын байгаль орчны талаар ямар бодолтой байдаг вэ ? Монгол улсын одоогийн байдлыг юу гэж боддог вэ?

Та монгол улсаа ямар улс болоосой гэж хүсэж байна вэ? Уламжлалаа хадгалсан улс уу эсвэл ардчилал хөгжсөн улс уу? モンゴル国について教えてください

- i .モンゴル国の現状に満足していますか
- ・
- ii .モンゴルをどのような国になってほしいですか(例えば、伝統文化を重視する、民主主義)

回答ありがとうございました

回答いただいた内容は、調査に活用させていただきます



大阪大学グローバルコラボレーションセンター

豊中市待兼山町 1-16 全学教育総合棟 1-3F

TEL: 06-6850-5176 FAX: 06-6850-5185

<http://www.glocol.osaka-u.ac.jp/>